片

2
0
2
2

u_

一月

終わりにしたいなら始めなさい！
在り来たりにしろ（何事も概ね在り来たりだが）
始めにそんな声ありき
あぁそうですか　でも
道さえ辿ってられるなら間違ったりはしない
だって
どの道も必ず終わり
どの道もそこで消え去るから
それで何が報われたか報われなかったかも跡形なしに
つまり消え去る事の前には何も間違えようはない
とはまた何て在り来たりな

とは言え道はまだ続く
とは言え道にも色色あろう
な色色が災いするのか雨風に晒されて
どの道も同じに色褪せ色をまるで失えば
ただ一つ頼れるのは
色など要らずどの道とも構わずに進んでるのは確かで
なら必ず消え去る終わりへの道を辿ってると知れる事
と知れながら強張る身は何を疑うのか
まさか
道は必ず終わるなんて嘘なのか
始めに声ありきなんて罠なのか
道が嘘で声が罠と見切れたなら
それならそれで何処ぞを彷徨い
遂にはへたばり斃れるだろうか
けれど疑いは
見切るも彷徨うもへたばるも斃れるも許さず
舟に乗せて流すように
始まりも無く消え去りもしない

それとも始まりがその儘消え去る事なような処へ
強張る身を運んで行こうとするばかり
でもそんな処もどうやら有りはしなくて
身は
何処もが真ん中で端っこで境目な辺りで
何一つ許さない疑いなら疑いは疑いを殺したかろうに
なのに凍るように生きた儘に溶けないで
な道になって怖ず怖ず横たわる疑いと冷たく向き合う
始めにありきの声など上げれば
心を奮い立たせ踏み入れられる処へは踏み入れようか
進んで嘘に騙され罠に嵌まりたいのなら
しかし疑いはそれも許さず
嘘は嘘の儘に罠は罠の儘に
それはその儘この身の儘で
二〇二二年一月一日

誰が死んだのかと思ったら私で
その私が死んでどうなるのかを眺めている
するとそこで
そこでとはどうやら私の死んだ家で
誰かがせかせかと立ち働いているけれど
それは死んだ筈の私に違いなくて
に違いないと言う事は
その誰かは必ず私と違う私な誰かに違いなくて
だって私はもう遥か遠くへ旅立ち
そこに居てはいけない筈で
なのにそれはどうしても
死んだ筈の私に違いないとしか眺められなくて
でも能く能くその誰かに目を凝らすと
確かに私らしさは何処かあやふやで
そんなあやふやの端端に
見知らぬ影が切り込まれ
私らしさは見る見る余所余所しくなって
そこに居るのはやはり

私とは似ても似つかぬ
会った事もない誰かだと冷たく見放すと
似ても似つかぬその姿が全く私でなくてはならなくて
私はそんな知らない私だったので
私は私としてちゃんと死ぬ事も出来たに違いない
と心付くと
いや
そんな私こそが私を生き抜いて私を私にして呉れた私で
そんな私を余所余所しく見詰める死んだ私なんて
疾っくに私とは似ても似つかぬ知らない誰かに違いなく
でもそうして
そんな生きた私はもう私には
会った事もない知らない誰かであるしかない儘に
私の知らない誰かの為に生きている
二〇二二年一月二日

私は〇〇〇が好きだ
〇〇〇だけが好きだ
〇〇〇の他には何も要らないし何も無い
〇〇〇は
片時も忘れない一人限りの恋人であり恋人などと言う言葉では表せない殆ど有
り得ない何かの姿であり姿などと言う言葉では表せない必ず何処にも有り得な
い薫りであり母であり娘であり姉であり父であり息子であり弟であり伯父であ
り叔母であり変わらぬ憧れであり心からの望みであり裏切りであり終わらぬ痛
みであり古里であり見知らぬ涯であり甘い安らぎでありひたすらな耐え難さで
あり悪過ぎる眠りであり徒に長く騒がしい夢であり夢を嗤う傷であり膿であり
切り切りと錐揉まれた穴であり穴の奥に覗く穴であり奥の穴の奥から引っ掻き
出される諸諸であり ゲロでありゲロの中のゲロより濃い血の塊であり掴まれて
は捩切られる腸（ハラワタ）であり砕かれる骨であり踏み躙られる腫れた肉の
捩れた先っぽであり飛び散る肉の汁であり生身の儘に丸丸剥がされた膚であり
トドメに胸を突くぎざぎざな刃（ヤイバ）であり脹れ続ける暗い裂け目であり
裏返され蔑まれ投げ棄てられた裂け目であり裏返され蔑まれ投げ棄てられ陽に
灼かれ砂塗れに引き摺り回されても干涸らびない裂け目であり裂け目の底の濡
れた襞を這い巡って已まない煌めく蛇の群れであり新手の蛇をたっぷり孕む明

明と艶めく胎（ハラ）であり堪らず胎を蹴破る鬼であり流れ惑い拗り回る色取り取りの水子共の尽きない恨みであり生まれながらに角を硬く尖らせた鬼の子であり望み通りに串刺しにされ汚れ果てた鬼の子の骸であり骸を翳す死に神の吐く息の嗅ぎ取れない匂いであり死に神の鼻を明かしたい生き神に諂う取り巻きであり抉り取られる生き神の肝であり生き神の生き肝を貪り喰って疾っくに行方知れずなり化け物であり黴が生え罅割れた化けの皮の寄せ集めでありそれでも夜な夜な舞い戻る火の玉であり火の玉を斬る人でなしが見上げる火の空であり火の山であり火の海であり燃える山並みを厭く事なく繰り返し圧し流す大水であり火や水と戯れ遊ぶ見窄らしい古びた一つ星の速い影であり星星を転がす浮き浮きと楽しげな闇であり闇に叛く月であり凪であり鳥であり間違いなく花である

なので○○○はそのどれでもなくて
○○○は○○○でさえなくて
○○○の事など知ったこっちゃないし
○○○の事など始めから何も知らないし
○○○の事など一つも知りたいと思わない
あぁ私の全て
私だけの○○○

○○○さえ○○○なら後には全く何も残らない
○○○さえも残らない
好きで好きな好きより好きなら好きとも知れない○○○
二○二二年一月三日

止まれないから歩いてるんじゃないよ
歩いてないなら止まるなんて訳ないさ
滑ってるとか転げてるとか
飛ばされてるとか流されてるとか
走ってたって足が縺れて直に倒れ込もう
運ばれてたって止まる時には止まろうね
歩いているから止まれないんだ
歩いてる限り何処を見渡しても
足を止めて呉れるものは見付からなくて
じゃ何で歩いてるかって？
だから

足を止めて呉れるものが見付からないからだろうね
目に入るのは何処までも歩いて行ける眺めだけ
これに勝るものが何処に有るだろう
有るなら出逢ってみたいもんだ
確かに偶にそんな艶っぽいものにも目が止まる
で近付いてみて肩はそれを掠めても
足はきびきびと踏み出されるのを已めない
ひょっとしてあんなものにも
目が曇ってたら足を止めて仕舞ったろうかと
笑いが身の底から込み上げて来てまた先を眺めれば
歩いて行ける為だけかに果てなく澄み渡って行くようだ
その中にちらちらと一際澄み切ってる処を見付けた
珍しくて面白くてぐんぐん近付いて行くと
向こうからもそれはぐんぐん近付いて来て
どうやらそれは
空の青を微かに映す揺れて透き通る穴で
高さも幅もこの身とそっくり同じ程なら
少し身を屈めれば足を止めずに踏み込んでも行けそうだ

と少し身を屈めて直ぐ間近に目が合うと
透けるばかりに目を奪われてうっかり穴と見誤ったのは
それは真っ直ぐこの身へ向かって歩いて来た誰かの姿で
互いに透け合うのか
この身がそれにぴたりと重なり
足も何も全てがそれで止まったのだろう
それより先は知らないな
空の青を微かに映す影ただ一つ切りがくっきりと
歩く姿の儘に凍る色でも滲ませてようか
間違いなく一つ切りにね
二〇二二年一月四日

名など要らなくて名など無い筈なのに
名を呼ばせて仕舞うのは何
な何を何と疑わずには居られないから
な疑いは放っては置けずに

ただ
何って名を
呼んでは呼ばれるものを俄に拵え
恰も手に取って捩って破ってる積もりで
こじ開けなければならないけれど
こじ開けたところで何を望めよう
なのできっと始めの名は白なんだ
光りも影も白ければ光の届かない穴の底も
月の面が嵌まり込んだかに白く潤い静まり
それなら
白い夜に白い影の白い手が白いものを開け
中が真っ白で疑いも白白と晴れて
白白と晴れた疑いを凝っと見詰めれば見詰めただけ
その見詰める目の濁りに晴れた疑いの白は斑に汚れ
その斑の定まらない色形に次次に声が投げ付けられ
ものの名は増えて行くようで増えるのは声色ばかり
増えるばかりな声色に白は埋め尽くされ隠されれば
濃いや薄いや様様な疑いが数知れず剥き出され

飛び抜けて酷い疑いが他の疑いを力で従え
飛び抜けて酷い声が名の全てを貫いて
ただ一つ変わらない名を際立たせ
埋もれた白を逆さに名指そう
逆さに呼ばれる名なんて
予め声も色を奪われ
逆さな名の白が
何処へ噴き出そうが溢れ返ろうが疑いの外へ弾かれ
そう遣って
ただ一つ変わらない飛び抜けて酷い声で呼ばれる名が
そっくり逆さな白の名なんだって事も覆い隠されて行く
それでも
ただ一つの名の酷い声の届かない穴の底の底を覗き込めば
月の面が嵌まり込んだかな白が真白な儘に潤い静まってよう
名など要らなくて白の名も無しに
二〇二二年一月五日

殺されたのが私で無いのなら
殺したのも私では無いよ
なぜなら私に殺せるのは私だけだから
殺されたのが彼なら彼が彼を殺したから
彼が係わった何かが彼を殺したんだよ
彼が係わった何かに私は含まれないよ
殺される彼とは離れた処に居たからね
それから私が彼の何を幾ら奪おうとも
それは私が生きてるからでしかないよ
もし私が私を殺し私に殺されてたなら
彼は私のしたのと同じ事を私にするよ
うっかり
もし私が彼を殺そうとして殺したとしたら
彼が係わった何かに私も含まれてたのかな
でもそれは彼がそうしたからで
彼が係わらなければ彼は何にも係われない訳で
なので私は何もしてないし

彼が係わった何かに係わってもなくて
彼は彼に殺され彼が彼を殺した事は間違いない
他に考えようもないけれど
じゃ何で態態分かり切った事を考えるかって？
なぜなら私に殺せるのは私だけで
うっかり私と彼とが混ぜこぜになって
間違ってても彼が彼を殺したように
私が私を殺したりしない為だろうね
だって生き延びるにはそれしかないんだから
彼が彼に殺され私が彼の全てを奪う事になる度に
これだけはちゃんとはっきりさせておかないとね
それは私が生きてるからでしかないよ
それにこれは殺された彼らの為でもあるよ
彼らが彼らを殺したんだから
私はまた穏やかに彼を葬って
彼を殺したのではない私に葬られれば
彼もずっと安らかに眠れようからね
そんな心優しい私なんだから

殺すとか殺されるなんて恐ろしい事から離れて
私は私を殺したりせずに生きなくちゃいけないんだ
笑いは絶やさずに
二〇二二年一月六日

私だけは私を殺せないよ
なぜなら私は私とだけ繋がっているからね
私と私の繋がりを断つものだけが私を殺せようか
そんなものが怖くて
それから逃れたくて
私は私を殺さずには居られなくなるのかな
私が私を殺すなら私と私の繋がりは断たれない
それどころか
殺す殺されるという消しようのない絆で結ばれ
そればかりか
その絆で輪が閉じるように繋がり合って私は私で

私は私と私の繋がりを断つものから守れよう
でどっちなんだろう
私は私を殺したので私を殺せないのか
私は私を殺せなくて私を殺せないのか
それともどっちでもないのかな
だって私に殺せない私って何
私は何時でも何処でも好きに私を殺せて私でしょ
だとしたら
私は私に殺せない私じゃない
その何じゃなくて私は私なんだろうか
の何って何？
それはそれを殺せないそれって何？
その何？が何？の儘では
ひょっとして何は私かも知れなくて
私だけは私を殺せないよ
へ戻りたければ戻れて仕舞えそうで
でも戻れて仕舞えたからって
私が私で無くなる他に困る事もなさそうで

私で無くなった私が
無くなった私で居たければ居られるだけで
そりゃ無くなった私だもの
疾っくに殺して仕舞ったかにも
殺せないならそれで辻褄は合いそうで
でもその辻褄は有るにしろ無いにしろ
私と私とで合ってるだけなのも確かで
何？の儘な何にしたら何の事でなくて
私はその何？では無いのか…な私も
何の事でも無くなって
だからって
何の事でもないからそれで私は私って事でもなさそうで
二〇二二年一月七日

白い花なら花の姿など目障りで
白だけを掬い上げ目の底へ落とせないかな

な目の底も生まれ付きかに白く揺れるのは
目に映る様様な白が時を掛け溜まったから
にしてもその白は白より白ずんで醜く濁り
硬く固まってるような散らかってるような
な
汚れて白い布を握って引かされてるのなら
伝わる重みこそ花の散る匂いかに穢れ果て
一塊に横たえられ光りの奥へ堅く隠されて
時を断ち切らない限り取り返しは付かずに
その儘向かう先は白を拒む処と決まってる
あぁ白を拒むなんて有り得ないのに
な有り得なさに因ってだけで
それはそこに少しも動かずに必ず有り続け
耐えられる限りを越えて目を背ければ
断ち切られた時と時が一巡りし繋がるのか
な時の動きに黙って従うしかなくに
時の繋ぎ目の赤く狭まる奥を覗かされると
激しく拒まれながら赤塗れな中を

白の一雫が
時さえ貫き破る凝っと固まった重みを尖らせ
尚も拒まれ続ける儘に
真っ直ぐ刺すように逆さを逆さに墜ちて行く
有り得ないかに目の生える処へに違いない
固まり果てれば白の重みは爆ぜるしかなく
散らばりたくても赤の奥は狭過ぎて
爆ぜた儘に赤の底に重く溜まろう
な目で何を見るのか
それは
見たい限りを見たい限りに
その見果てるまでを見果てよう
それが
時に断ち切られるしかない白の限りに限られようと
二〇二二年一月八日

割れ目を潜り抜けるみたいな事
丸めた身を震わせるみたいな事
木の根を噛み続けるみたいな事
ふと微睡めばどれもそっくり同じだよね
玉を口に含まされてるみたいに
ぶつぶつと謎を呟いてなくちゃいけなくて
と
火に魅入られるみたいな事
恋を打ち明けるみたいな事
息絶えたばかりみたいな事
これらもまぁ
羽を毟り合いながら鳥と交わる事に比べたら
そこそこ似てるけれど
それで玉は呑んで謎を黙り込むしかないのなら
それぞれに何処となく違うのかな
それとも黙り込まされた謎なんて計り知れなくては
どれがどれとも丸きり違うのかも知れないし
でも丸きり違う事なんて

その互いに違い合う限りにはそっくり同じで
だったら謎なんて始めから全くの紛い物に違いなく
ぶつぶつ呟いてる謎も
不味いだけの玉をぺって吐くみたいに吐き捨てれば
割れ目を潜り抜けるみたいな事と
丸めた身を震わせるみたいな事と
木の根を噛み続けるみたいな事も
微睡もうが醒めようがどれもそっくり違う事だよね
でもそっくり違って仕舞っては
どの事がどの事とも見分けが付かなくなって
割れ目を噛み続ける丸めた身を木の根が潜り抜けて
何を震わせてるのやら
二〇二二年一月九日

吐く息は傷付ける
何でも傷付ける刃（やいば）だね

懐手で眺め渡せば
息の刃に切り裂かれたものばかり
それとも己の腕までも
吐く息に切り取られて足元に転がってないか
それとも脚で立ってるかも怪しく
吐く息に切り取られて脚は腹の上に転がってないか
それとも腹の辺りは風が涼しく吹き抜け
腹も吐く息に切り取られて
腹も脚も腕も組んず解れつ風に転がされ
吐く息がその先に切り開く切れ切れな眺めを繋げ
奥行きを与えてようか
それへ向けてまた息が吐かれれば
組んず解れつしてた腕も脚も腹も切り刻まれ
切り刻まれた腹と脚と腕がばらばらに混じり合い
吐く息に傷付けられる眺めは更に広広と切り開かれ
そんな眺めを追って息が吐かれれば
そんな眺めもまた切り刻まれ
奥行きも無くなって何に繋がれるも無くなって

息は切れて息が息を傷付け
息は息に面白いように切り刻まれれば
切り刻まれた息と息は組んず解れつ
ごろごろと転げて混じり合い
そんな眺めの拡がりを追って息が吐かれれば
にしろ直ぐ様
吐く息が吐く勢いで吐く息を傷付けてはそれっ切りで
切り裂かれた息と息と息の転がるばかりな眺めは
独りでに拡がり遠ざかって行くしかなさそうで
な事らしいにしろ
息は息を傷付ける為かに吐かれ続けるしかないばかりか
息に傷付けられた息が息に叛くかに
息を傷付ける為に吐かれる息を傷付け
喉から胸の底へ遡り
傷付ける為だけの刃となって傾れ込めば
息の根も息に傷付けられた息に寄って集って切り裂かれ
いや
そんな事で傷付くような息の根なものか

だって何もかも
その息の根にずたずたに傷付けられて
この世へ躍り込んで来たんだもの
二〇二二年一月十日

道に迷ったのか迷わなかったのか
初めての道ではないけれど
何時もの道でもなく
どっちを向いても似たような眺めで
南へ向かう処を北へ向かったりして
なのに回り道をしたでもなく
何時の間に北は南に直ったか
暫くすると東は東に西に西で
その儘少しも迷わず家へ帰り着けた
薄曇りの白い陽の白い風の白い道で
白く朧な痩せた人の姿が二つ寄り添い

傍らにぼそりと
声が一つ鋭く濃い影を落としていた
それとも影が一つ声を上げていたか
それともあれは人の姿ではなく
北を向いていたのが尖った声で
南を向いていたのが尖った影で
どちらかがどちらかを責め苛むのか
甘えるばかりに凭り掛かりたかったのか
甘えて凭り掛かり責め苛んでいたのかも知れない
何れにしろ
声だけ影だけでは儚く白に溶けて仕舞うに違いなく
激しくぶつかり合って互いを角角しく痩せ細った形に切り断ち
その儘凍り付くかに身動ぎ一つ出来ない
必ず二つで一つな隙なく鋭く尖った姿で立ち尽くす
にしても弾ませたい息をひたすら押し殺すかに
白ばかりな眺めの中に際立つその濃さの孕む
汚げな密やかさは内向きに酷く熱そうで
北から南南から北をずっと遠くまで

北でも南でも無くなる処までも飛び歩いて来て
今さっき立ち止まったばかりなようでもあって
にしてもそんな事までを見透かしたならそれは
もう一つの声と影の痩せ細った姿しか無かろう
それそっくりな鋭く尖った姿の内を覗き込んで
いや
ないもう一つなど見掛けなかった
と白ばかりな眺めを顧みるなら
迷わなければならない道もなく
なので家へ帰り着こう道もなく
ただ一つ鋭く尖った声と影とが
立ち迷える限りに立ち迷い濃く冷え切って立ち尽くし
その足元で激しく入り組む轍の深みに濁った白が溢れ
他には時に距てられたかに
片声と片影が白ばかりに埋もれそうに離れ離れに
走り回れる限りは倒れずに走り回り
白い眺めを見渡せる限りに　白い儘にしてるよね
二〇二二年一月十一日

いきなり轟きは凍った川縁ごと撃ち抜くような山颪で
身近くの匂いが悉く砕かれ吹き払われ
山並みを越えた遠い匂いの遥か棚引くのが見渡せると
匂いは遠過ぎて遠くな儘に
直ぐ近くの硬く突き立つ声に移るようでも
な声こそ直ぐ近くな儘に
遥か遠くから聞こえて来るに違いなく
に
声が背を向ける
そうして
声はその近くも遠くも失えば声までも失って
やはり近くも遠くも失い匂いも失った匂いへ
黙った儘に激しくぶち当たって行くしかない
で
声は匂いに

突き刺さったか跳ね返されたか
突き刺さるのは遠さで
跳ね返されるのは近さ
それとも
突き刺されば近さ
跳ね返るのが遠さ
そのどっちをも声が計れたなら
向けた背を向け戻して声は声を取り戻せよう
なのに黙る声はそのどっちもの隙間に嵌まり
白い罅割ればかりの奥へと墜ちて行くけれど
何これ？
白い罅割れって何？
失われた匂いの影が白く凝り固まってるとか
知るかよ
けどこんな事になるって予め分かってたろう
それともこんな事など避けたい為に
遥か遠い匂いを眺め渡せたんじゃなかったか
いや

遥か遠くから聞こえて来る声なんて
始めから失われた近い声でしかなく
遥か遠い匂いの眺めさえ黙って見渡されれば
声も匂いもその儘に救われてようか
二〇二二年一月十二日

時など棄てられよう
時を棄てる身も棄てられよう
しかしそこまでで
そうして棄てられた事は棄てられない
そうして棄てられた時と身が甦るなら
幾らでも棄て直して時と身を回せるが
時と身は
棄てられない棄てられた事に
距てられる限りに距てられるしかなく
もう棄てられる時でも身でも無くなり

そんな棄てられない時と身が有るなら
棄てられない棄てられた事に
棄てられるも棄てられないも無しに予め含まれ
それがその限りに幾ら時と身で有ろうと
棄てられない棄てられた事にしたら
棄てられない棄てられた事を回すだけのもので
とは言えそんな時と身に回されなくても
疾っくに時と身を棄てた
棄てられない棄てられた事にしたら
何の差し障りもない訳で
とは言え元はと言えば
棄てられない棄てられた事は
時と身を棄てられなかったら影も形もなかった訳で
全ては時と身に依っているのも確かなら一回りして
時も身も棄てて棄てられていない事になろうか
いやそうなるかならないかはどっちに転ぼうか
一回りした時と身など何を遣らかすか知れたものではないぞ
もしそうならなかったとしたら

時も身も棄てて棄てられていない事から棄てられ
それはその儘生きるか死ぬかにも係わろう
とは言え生きる死ぬなどは時と身に比べれば余程
棄てられるも棄てられないも無しに
棄てられるなら棄てられるしかない事なら
時も身も棄てて棄てられていない事の事など知れてよう
とは言えその知れてよう事の他に何が有ろう
それは有る限りの事が有るしかなくに
棄てられるも棄てられないも無しな時と身と繋がって
そんな時と身と繋がる有る限りに有る事など
厭きるまで棄てられる限りに棄てられよう
そうして棄てられた事は棄てられずに
二〇二二年一月十三日

何が鏡なんだろう
剥き出しの濡れた土は緩やかに円く窪んで

土の匂いだけが緊く立ち籠めて
ぐるりと
山と森と坂と崖と草原と川と浜と海と島が見晴かせる
て事は
山と森と坂と崖と草原と川と浜と海と島から丸見えで
そんな何処からも眺められては裸で居るみたいで
窪んだ土の真ん中に震えが来そうに立ち尽くす
何が鏡なんだろう
そんな事が鏡なんだろうか
な鏡に映すと
耳が白く脹れてる
んじゃなく足元の白い土を捏ねて耳の穴に押し込んで
耳を塞いだんだ
冷たい土の粘ってる処を掌に掻き取って握り
それを盛りに盛って
耳朶をすっかり覆う乾き掛けた白い土の塊は
もう拳を三つ四つ重ねた首にも重い大きさで
何が鏡なんだろう

そんな事が鏡なんだろうか
耳はもう耳鳴りの他に何も聞こえなくて
そうしたくてそうしたんだからそれで良い訳だけれど
こんな事をしなくちゃいけないのは
今朝方誰が斃れたって悪い知らせを耳に入れたからで
その誰は同い年で体を壊して戻って何もしてなかった
何が鏡なんだろう
そんな事が鏡なんだろうか
ぐるりと
山と森と坂と崖と草原と川と浜と海と島から眺められ
隠し事一つ出来ず丸裸で足を踏み鳴らし土を耕すのは
もう廃れた古い遣り方なのだけれど
今思えば徒に生きようと焦って徒に死ぬのを願ってた
これはその同い年の誰に任されてた事ではなかったか
何が鏡なんだろう
そんな事が鏡なんだろうか
な鏡に映すと
泥んこで遊んでるだけみたいで何もしてないも同じで

古い遣り方にしろ務めを果たさなくちゃいけないなら
もう陽も傾いてさっさとそうしなくちゃいけないのに
それともそんな遊んでるだけで務めを果たしてるのか
山と森と坂と崖と草原と川と浜と海と島に見守られて
何が鏡なんだろう
こんなほんの短い土の匂いの一日が直ぐにも終わって
そんな事が鏡なんだろうか
二〇二二年一月十四日

なぜ顔は顔なんだろう
なぜ顔なんてものが有るのだろう
ただ生きる為だけなら
目と鼻と耳と口が
見易い処嗅ぎ易い処聞き易い処飲み食いし易い処で
それぞれに働いていれば良さそうなもので
だったら顔は生きて行く為じゃない

だったら顔は死ぬ為になくちゃいけない
死ぬ為には生まれて来なくちゃいけない
つまり死ぬ事は生まれる事でもあって
なので生まれる為にも顔は無くちゃいけない
鏡に映る顔を覗き込めば
鏡は
お前はそこへ向かって死ぬんだよ
と
何処へ向かって死んで行くのか
何処へ向かって死んで行ったら死ねるのか
を
見せて呉れる
もし
目が背中だったら背中へ向かって
目が腹に付いてたら腹へ向かって
死んで行かなくちゃいけないけれど
それではそれで死んだとしても
鼻と耳と口が死んだとも知らずに働き続けそうだ

そんなややこしい事なら生きるのも酷くややこしかろう
鏡に映るのは
今死ぬならその死に顔で
そしてそこから遡る生まれた顔で
（それは顔無しでも生まれて来られようけれど
口だけで生まれて来てずっと凝っとしてられるなら
それは長生きも出来そうだけれど
それでどう楽しく生きられたにしても死ぬのが酷くややこしそうだ）
顔で生まれ顔で死ぬ
そんな顔を鏡に映して日日見定めてられれば
それで何一つ生き死にの他の
ややこしい事に係わらずに済んでられようね
顔を映す鏡のこっちから生きて
顔を映す鏡のこっちへ死ぬのだから
顔はその生き死にの
こっちから行ってこっちへ戻る境な訳で
境と言うのはどんな場合もきっぱりと
ややこしくはない替わりに中中に険しい処で

その境をどんな顔が覗くんだろうって繰り返し顔は覗き込んで
それで顔はそんなきっぱりと険しい顔になって
それで顔は顔なんだろう
そんな顔を互いに晒し合っている
二〇二二年一月十五日

袋の中へ逃げ込まなければ生きられないか
袋の中へ逃げ込んだらさっさと殺されるか
必ずどちらかなのだがどちらか知れなくて
袋は常に危うい
袋は常に危うさに付き纏う
袋が目の前に現れたら
袋が生き死にを分ける
そんな危うさに身を晒しているのは
底の知れない穴を間近で覗き込まされているのと変わらない
そんな袋を常に持ち歩いているのは何故だろう

いざと言う時に生き延びたいのか
いざと言う時に直ぐ死にたいのか
それとも常に危うさを身に携えて
生き死にから目を離さずに居たいのか
袋を覗いても中は何時も空っぽなら
袋の中身で生かされるか
袋の中身で殺されるかは
袋へ逃げ込んだ己が身で決まるようでも知れたものではない
逃げ込んでみたら袋には色色と詰まっていて
それらが生き死にを分けるのかも知れないし
とは言え袋を持ち歩かないよりは増しだろう
行き成り危うさに降り掛かられて
行き成り見知らぬ袋と係わるしかないのでは
何の備えもなしに闇雲に命知らずに
何処に落とし穴が有るか知れない処を歩き回るようなものだ
うっかりしてた訳でもないけれど（してたのかな）
な袋を無くして仕舞った
な事で危うさは何処にも見当たらない

な事が却って危ういのは分かり切っている
何処からか必ず見知らぬ袋が命を奪いに来ている筈だ
それとももう知らず袋へ逃げ込んで仕舞っていて
それでやっと生き延びていられるのだろうか
ならば後は袋に殺されるのを待つだけか
そんな袋の中で生き延びる為の袋を
見付け出して逃げ込んだとして
その袋に殺される事もある
な危うさも切り抜けて
袋から出てみよう
訳もない事さ
お前がその袋だったかにお前の身を裏返せば済む事だからね
穴に落ちたお前が穴だったかに穴を裏返すよりは訳ないだろ
二〇二二年一月十六日

誰も居ないのに

誰も居ないのを分かるのは誰
と尋ねるのは誰
とその誰に心を懸けるのは誰
の心は何処
誰も居ない処に心は有るよね
と答えるのは何処の誰
な誰も居ないのなら
そこは誰の何処
それは居ない誰の何処でしか無かろうにしても
そんな何処では放って置かれる内に何処でも無くなって
居ない誰だけが居ない誰な儘に
何処が何処で無くなろうと
無い何処に放って置かれようと
そんな居ない誰では有る儘に誰が誰で無くなる事は無く
誰も居ないのに
な
事なんて
有るにしても何処に有るのだろう

無い処にしか無さそうだけど
と誰に思えるのだろう
と顧みるのは誰だろう
誰にしろ誰かなら
誰も居ないのに
から始まるここは何処なんだろう
と

ここで
ここがここじゃない処へ行き着けたようで
そんなここではきっと
誰が誰じゃない誰で居られようか
と顧み顧みられるのはどちらにしても
誰が誰じゃない誰で居られる誰である筈もなく
二〇二二年一月十七日

日影の黒さに貫かれ

（黒って熱く透き通り過ぎるんだよね）
曝け出される長く重い時は繋がっていた
その逃れようもなくて耐えるしかない時が褪せ
時は失せ
そんな失せた時なら隠さなくちゃね
と白が遣って来る
日影の黒さに曝け出される限りに曝け出された
そんなそれらを跡形なく隠す白が呼び出すのは
それだけは何を忘れたって忘れない
風の向こうに見晴るかされる
見る度に見知らぬ姿の懐かしい
欠ける事なく何かが欠けた
でも何が欠けているだろう
片目が欠けていようか
片脚が欠けていようか
片腕が欠けていようか
でもそれらはどれも何一つ欠けてない証し
失せた時さえ隠らせた明るい眺めの中から

はしゃぎながら声も無く
雪より静かに迎えられる
でも知ってるよ
少しもそんな姿はしていない
だって姿程要らないものもないからね
そうして何の姿も掻き消した白に降りて来る
ただそんなそれを楽しむばかりなそんなそれ
そんなそれらに次次に声を掛ければ
雪より静かな柔らかな声だとしても
それらはさっさと背を向けて
道も無く来た道を帰って行こう
それを見送る白の奥に失せた時が濁って影が映るなら
また必ず戻って来るしかない時に
独り切りに取り残される誰かの姿
いや独りでも取り残されても誰かでも無い
でもそれさえも見せ掛けのあなたならあなたでしょ？
な呼び掛けの効も無いのなら
何一つ欠けてないのはそれも見せ掛けの

予め時に片身を奪われた
見る度に見知らぬ儘な誰とも異なる姿かと
あなたに見捨てられた誰かを白の外に探すしかないのかな
二〇二二年一月十八日

一つ切りに光りは一つ切りで居られようか
居られるにしろ身を捨てるように
何の姿へも移り変わって行けよう
そんな事にも厭きれば
闇が光りを取り囲み光りは闇に閉ざされる
とは見えようと
一つ切りだろうと光りは闇より遠く拡がり
一つ切りに光りが闇を取り囲んで居ないか
一つ切りに光りに闇が閉ざされて居ないか
光りは闇など照らすものか（穢らわしい）
闇を何処までも透けて突き抜けて行くだけ

寧ろ
そんな闇に照らされ一つ切りに煌めく光り
闇を突き抜け闇を閉ざす光りが煌めくには
闇に照らされるより他にない
そんな光り
光りはそんな一つ切りに極まってよう
闇が幾ら哀れみを求め縋ってもそれっ切り
そうして
そんな闇では
小さな一つ切りに極まる光りに責め苛まれ
光りにしろ闇にしろそんな事にも厭きれば
闇は光りに吐き出され
それは一つ切りでしかなかろうけれど
そんな闇は一つ切りで居られようか
闇なしにも光りが光りなのは見て来た通りだが
光りなしに闇が闇かは見通しは立たず真っ暗闇
闇は闇でも見通しが立たないでは闇かは知れず
でも真っ暗闇の中の闇かは知れなくてそれは何

と自らに尋ねられるなら闇しかなかろうか
一つ切りに
と闇なら闇なりに身を捨てるように
何の姿へも移り変わろう変わろうとは試みても
試みる程に一つ切りでもなければ闇でもないと
そんなそれの儘に何の姿も見当たらない辺りを
すっかり真っ暗闇に閉ざされれば何が出来よう
まさか
闇でもない儘に真っ暗闇の姿へ移り変わろうか
いや　それは移り変わりではなくて
闇が闇の身を捨て
捨てる切りなら真っ暗闇の姿も何も有り得ない
にしても
そんな真っ暗闇を知れるのは闇しかなかろうね
つまり
そんな闇に照らされてしか真っ暗闇の姿も浮かばない
見て来た通り闇に照らされるなら光りだろう
闇ではない真っ暗闇は光りだったんだ

そんなそれを照らして闇は闇なんだ
だったとして
そんな一つ切りに闇は闇で居られようか
居られるにしろ身を捨てるように
何の姿へも移り変われず
そんな事でもただ闇な限りは厭きたりせずに
だってそんな事でずっと光りの真っ暗闇に責め苛まれ
一つ切りでなんて居られる筈のない一つ切りで
闇で居られるに違いなく
二〇二二年一月十九日

光りを切り取ると闇になるのは知られている
知られているどころか知れる事の全てだよね
だって
闇を切り取ると何になるか全く知れないんだから
でも闇は切り取られているのは間違いないよ

切り取られていないなら闇は何処までも闇で
闇とも分からないものね
その切り取られている闇は切り取りようがない
と言うか
闇は幾ら切り取っても闇に変わりは無いのなら
切り取った積もりだけで切り取ってないんだよ
なので
闇は光りを切り取って闇になったんだ
とかそんな
切り取られて闇を闇にしたらしい
光りとやらを思い描いたりする
光りなんてそれだけの事
それだけの事が知れる事の全てで
他に何も知れないのは分かり易いようで中中に難しそうで
だってそれじゃ何処を眺めても
光りを切り取った闇の他に知れるものも無くて
思い描かれるだけの光りでは目に届かなくて
いやそれとも切り取られた闇ばかりなら

光りとも知らず光りは届く限り幾らでも目に届いてようかで
な光りをどうしよう
などうしようがさっぱり当て処なくて難しい訳で
ならどうもしない儘で善いじゃないかって
どうにもしないで居ると
闇塗れな儘の知らない儘に
ずっと光りに晒されっ放しで
目はその光りにすっかり潰され
切り取られた闇の姿も見分けられず
そんな真っ暗闇を見た事もない光りと取り違え
切り取られようのない光りだけの中に居る積もりになって
すっかり闇を見失えば何の形も無いのと同じで
無い形では切り取るも思いも寄らず
右も左も光りに操られる儘では
何をどう思い描くも儘ならず
光りを思い描けも出来ずに
知れる事も全て失われる

ならどうもしない儘で良いじゃないかって
などうもしない儘が全てを難しくして仕舞う訳で
な光りをどうしよう
二〇二二年一月二十日

言葉そっくりに聞き取れても
言葉に聞き取れなかった声が何時も
言葉に聞き取れる声よりも澄んで聞こえるのなら
言葉が声を濁らせていようけれど
言葉に少しも似てもいない声なのに
言葉に聞こえて仕舞うと何時も
言葉もその声も凄く澄み切って聞こえて
言葉が声を濁らせているかは怪しくなるし
言葉に少しも似てもいないだけの声が何時も
言葉に聞こえる声より酷く濁って聞こえるのなら
言葉が声を澄ませているのかなとも思えて来る

な事にしろ
声なら全て言葉に聞き取れたなら
言葉も声も澄むも濁るも無いかな
でもそれでは言葉は言葉を越えて
言葉で無いものまで言葉になって仕舞うのかも
それとも
何の声も言葉に聞き取れないなら
やはり声は澄むも濁るも無かろうけれど
声に聞き取れない言葉は声の中から追っ払われ
澄むも濁るも無いでは行方知れずになるしかないのなら
言葉は
言葉だけで澄んだり濁ったりしなければならないのかな
そうして言葉の中に言葉だけの声を作り出す為に
そうして作り出された声で
聞こえる声を言葉に聞こえる声にする為に
きっとそんな事
なので声は澄んで聞こえたり濁って聞こえたりで
でも聞こえる声を言葉に聞こえる声にするのは

何時も巧く行くとは限らず巧く行ったり行かなかったりで
言葉そっくりに聞こえても言葉で無い声とか
言葉に似てもないのに言葉に聞こえる声とかが
それは入り混じって仕舞うよね
だったら
言葉の中に声を作り出すなんてしなかったらどうかな
それで言葉が行方知れずになるにしても
その知れない行方は声が届かない処の他には無くて
言葉はそこで澄み切ろうか
それとも濁り果てて仕舞おうか
しかし澄むも濁るも言葉には違いない
それとも澄むと濁るが溶け合って言葉は言葉で無くなろうか
それで声は声で有り得ようか
ただの音の連なりでしか無くなろうか
しかしそうして声を失った
言葉で無くなったかも知れない言葉に何の足らない事が有ろう
たとえ声が失われれば必ず言葉も失われるにしてさえも
二〇二二年一月二十一日

尋ねる愚かさよ
答えが得られようと得られまいと
と言うか尋ねるのがもう答えで
尋ねて仕舞うだけで知れない事が失われるのに
それとも
知れない事が失われて嬉しいのだろうか
知れない事を失えば失ったただけ
知れる事への近道でも見付けた積もりになれて
しかし知れるとは何を知れるのだろう
知れる事が知れるだけの
高が知れた事
その替わりに
知れない事が知れない儘に忘れられて仕舞おうね
それとも
知れない事など忘れて仕舞えて嬉しいのだろうか

そうして先を急いで
知れた事から知れた事へと渡り歩くばかりで
そんな速さに身を預けられるのが快いのだろうか
嬉しくて快くて殆ど病み付きで
次次に尋ねたい事が浮かんで来て
次次に高が知れた事の答えへ飛び移って
益益知れない事から離れて行く
とは言え
その先に必ず有る筈の
尋ねても尋ねても知れない事に近付いていると
知らずにも
そう知ってて先を急いでるのだとしたら
それはきっとどうにも止めようも無くて
それを愚かさなんて言ってみても言うだけ愚かに違いなく
だって
尋ねても尋ねても知れない事に行き着きたくて堪らなくて
それで望み通りに行き着けたならそれっ切りなだけの事で
どの途知れない事が失われるのには変わりはない

でも
そんなどの途なんて処から逃れるのも易しい事さ
尋ねるのを已めるだけの事
そしたら知れない事ばかりが溢れ
そのもっと溢れて来る向きが自ずと
どの途も行き着けない
知れない事の溢れて已まないその在処を知らせて呉れよう
二〇二二年一月二十二日

聞いた話しを聞いた話しを聞いた話しを聞かされたせいで
赤い月を霞ませる雪を待ち明かしたか
忘れた
月影は夜通し止まってなかったか
病んだように震えて弱弱しげで
男のような女のような
女を装う男か男を装う女か

しかしそれは月が
か
聞いた話しを聞いた話しを聞いた話しの話しが
か
それとも月も
事に依ったら待たれただけで降らなかった雪さえ
聞いた話しを聞いた話しを聞いた話しの話しだったか
夜は何時の夜か
話しの中の夜なら
男のような女のような
女を装う男の夜か男を装う女の夜か
雪を頼れないなら独りで月と戦わなければならず
それならきっと女を装う男の女のような夜だろう
あぁこんな夜を幾度繰り返したろう
なので聞いた話しも話しも話しの話しも
夜通し月と戦って勝てない限り負けたような
夜と怪しげな裏取り引きをしたような話しばかり
それもきっと月は月じゃなく

何だか知れてたら戦えるような相手じゃなくて
抑もその病んだ生き物のような赤い姿で
月は始めから月が月じゃないのを見せ付けてなかったか
そんな月ならそんな月に促されるかに
そんな月にトドメを刺さずに生き抜けられようか
で殺ったか
忘れた
夜通し寝てない筈なのに
聞いた話しを聞いた話しを聞いた話しの話しが眠りを妨げるのは
一つだけその話しの終わりが伝える
痛手を負った月の今際に残した
男を装う女の男のような夜が
女を装う男の女のような夜に向かって呼ばわったかな
生き抜けられたなら後は死ぬしかない男の名のようだ
二〇二二年一月二十三日

雲間は闇ばかりで星も輝かない海沿いの
真っ直ぐな道が道だけで真っ直ぐに行く
あれが道だと知っているのは
今はもうあの道だけだろうか
賑わっていた昔を思い出せば金切声が渦を巻くようで
金切り声はどれも空の星をてんでに指し示してるようで
次次に指し示されるどの星にも必ず生き物が棲んでいて
てんでに身を嬉しげに輝かせ星の煌めきと降り注がせる
それらは
遠い闇を距てた金切り声へのお返しの贈り物のようでも
その星の生き物へのお返しが金切り声なのかも知れない
なぜって
金切り声は声ばかりが道沿いに犇めいて姿が無いからね
星に棲む生き物達はどれも星の中にぬらり裸な姿を見せ
光ろう光ろうと跳ね回り柔らかな身を拗らせてるからね
それとも
金切り声は思い出の中に湧いた聞いた事もない空耳かな
この世に生きて有ろうとすれば空耳では適わず

くねくね輝き星に棲むより無いのも面白可笑しいけれど
そんなこの世など空耳程にも有りそうに無くて
と思い至るにしろ
びっしりと
あの道に金切り声は満ち満ちて已まないのはどうしてか
星に棲めよう筈も無いばかりに愈愈星に棲みたい憧れか
くねくね拗り始めた金切り声は真っ直ぐな道をも拗らせ
海をあやふやにし星との距たりも有るような無いような
な金切り声こそ星に棲む生き物の姿かと眩しく煌めいて
海を丸丸と明るく輝かせれば海に覆われた星に棲むのは
失われた遠い時の光りの中を今も駆け抜けてようかな
厚い脂の艶めく露わな膚を疲れ知らずに弾ませる…
何だろう
きらきらと息衝く影が闇雲に交わり絡み合うばかりでは
二〇二二年一月二十四日

何時か赤い水を見た
何処でだったか
同じ処で同じ赤い水を見なければならなくて
のべつ赤い砂がざらざらと舞う風が吹いて
ずり落ちそうに低く傾く赤い森を傍らに
上り坂の赤い土をぬるぬると踏み締め
赤い泉の温い水を汲もうとしている
どうもそれは死んでから後の事で
なので色色と赤く見えて仕舞う
汲んだ水に映る目だけが赤を弾き黒く澄んで
その水鏡の黒目の中を覗くと
それを覗いている人の姿は
細くゆらゆら揺れていて
どう見ても私ではなく
直ぐ真後ろに迫って
殆ど真上から水を覗き込む誰かに違いない
な真上を誰が見上げられるか知らないけれど
な真上からなら知らない声が流れ落ちて来る

な声なんて知らないよ
としか聞こえない声が確かに流れ落ちて来て
水に浸み通って行くその水は透き通っている
赤いようでも上っ面を赤く染めているだけで
もう何処もが赤で覆い尽くされていようとも
死んだ目で見ているからに違いない
死んだ目には水だけは何処までも透けて仕舞うんだよね
なんて聞こえる声が水の底から跳ね返って来たかどうか
それともそんな声を探しに水の底へ降りて行くべきかな
死んでるからには何がどうでも良くて何もしないでいると
死んでるからには必ず何をもどうにかせずには居られずにも
な事らに背を向ければ背を向けた背は丸まってようか
と身は透き通った水に沈んだかに
ひょっとして赤いかも知れない目で何処を見渡しても
微かな赤みさえ見付からないでは
何の為に死んだのだろう
と
そんな私を水に覆い被さるように真上から見下ろす

細くゆらゆら揺れているのは誰だろう
何の声も洩らすまいと口を緊く噤んで
その口に噤まれては
声など始めから何処にも無かったに違いなくに
声が無いのなら水の他は何もが真っ赤だろうな
と何時か見た赤い水は
そんな事の死ぬよりも前の見誤りだったろうか
二〇二二年一月二十五日

冬に

光りの中に身を置いているけれど
こんなの何かの間違いに違いなく
冬なら闇ばかりで
春だの秋だのは要らず
夏の光りを待ち望めるなら
時は恙無く過ぎて行くだろうに

薄っぺらな冬の光に取り囲まれて
その光りの軽さに身は浮き上がりそうで
浮き上がれば光りの中に溶けて仕舞いそうで
そんな人の姿の溶けた色が数知れず筋を引いては
殆ど風に揺られもせずに滞り冬の光りになってようね
見渡す限りの光りの中にどれ程の人が溶けて仕舞ったのか
確かに街中なのに光りに烟って見難いが人影一つ見当たらない
間違いとは知れるにしろ何を直せば直るのだろう
と考えて何も浮かばないなら
さっさと身を光りに溶かしたい
その叶わないと直ぐに分かるのは
もう身は浮き上がり少しも溶けずに
光りの筋を踏んでは昇って行くばかり
これには覚えが有るけれど何だったかな
思い出せない内にすっかり光りは足の下で
その光りの上に何が眺められようかと見ても
ただ凍ったような冬の光りの上っ面が拡がって
その上っ面の上には光りも闇も現れず

その上っ面さえ光りとも闇とも見えなくては
顧みられる身は身動ぎもせず時の手前に佇んでようか
そうして
一筋毎に目に浮かぶ冬の光りの流れる色を淡く重ねて行くなら
嘗て親しく見知った人達の姿がはっきりと思い出されるようで
遠く暗い夏の光りの中へ姿の一つ一つを戻して行けてるようで
二〇二二年一月二十六日

様様に響く昼の音に掘り下げられてばかりに
昼が深過ぎるせいかな
探すのを諦めたように目は虚ろに開かれる儘
光りの澱の中に浸って
深過ぎる程に高く眩しい昼の眺めの中に沈み
高過ぎる昼の眺めの底で
昼の深みを測るしかないけれど少しも楽しくない
そんな事してても探し物は見付かる筈ないからね

それも何なのかも思い出せない探し物ではね
でも見付ければ思い出せるかもとか望みは繋いで
それを楽しみに探し続けて来てるけれど
測れば測っただけ深みに嵌まる昼に
溺れるように望みも楽しみも断たれ
にしろ
そうしてもう何も探しようも無いのなら
虚ろに開かれる目の中に
探し物は必ず映っていなければならないし
それを見付ければ
それが何なのか思い出されよう
他に望みは繋げないなら
それを望みに
それを楽しみにしなくてはならないし
それを疑ってはならないし
でもそれって探すのを諦めるのと何が違うの
なんて声に耳を貸してはいけないし
にしろ

虚ろな目に映るものなんて何処からどう見たら見えるのか
を考えて何が見えるでもないなら見えるまで待つしかない
と狭く小さな深過ぎて先の見えない藪が見えて来る
いや
これは見えて来るんじゃなく思い出されて来るんだ
これが探してた物なのか
藪の深みの前で来る日も来る日も目を凝らしていた
藪の深みに耳を澄ませて居たかったのかも知れない
と先に思い出されたならもう探すまでも無いのでは
にしろ藪は狭く小さく
周りに昼の深みなど見当たらなくて
昼の深みって何だよ
と藪の深みなら必ず問い掛けて来よう
それに耳を貸すべきかどうか
そんな
耳の深みだけが藪の深みさえ斥けて独り深みなのが
どうにも見付けられて仕舞ってるようで
深みの底も抜けたように深みなど測りようも無く

二〇二二年一月二十七日

川縁で女が男を怒鳴り付けている
男は殺されなければ済まなかろう
それも寂しい眺めだなと見回すと
他に何も見付からなくて寂しさも増すけれど
そこには何処も光りが満ちていて
光りが寂しさを形作るんだなとは目には知れ
少しだけ賢くなれたかに心は明るくなる
その明るさが曲者さと何の戒めか
ふと呟いたかな唇も寂しい光りに濡れて
遠目にもきっと光りの中を一際煌めこう
それが誰かの目に留まれば
その煌めきが寂しさを形作るんだとは知れるに違いなくても
光りの中にそんな誰かの目の有る筈は無く　いや
と

ずっと遠くだけれど窓が開いて中は真っ暗だけれど
確かに目が三つ揃って煌めいている
三ツ目はどれも縦に裂かれた裂け目のようで
戯れに拡げたり狭められたりして
ずっと遠くだけれど笑い声さえ聞こえて来そうだ
女の怒鳴り声が甲高い笑い声に変わって
殺された男の小さな曲がった背中が川を流されて行く
三ツ目の笑い声も耳に届くまで響いて来て
寂しさにもケリが付き
光りを掻き消す浮き浮きした暗さも望めそうだけれど
そんな事ならさっさと立ち去らないと
この身も暗さに掻き消されて仕舞いそうで　いや
と
そんなこの身だけれど
まさか川に流された訳でもなかろうけれど
開いた窓の直ぐ近くまで来ていて
拡げたり狭められたりしてる三つの裂け目を
真っ暗な中に見上げてはそれより近付けも遠ざかれも出来ず

まさか川の渦に巻き込まれてる訳でもなかろうけれど
その窓の周りを何時までもぐるぐる回ってるようでは
寂しさにケリの付くなんて事はずっと無さそうで
三つの笑い声は見る見る甲高く尖って
拡げられっ放しに晒されてる三つの裂け目を残し
真っ暗な窓の奥へ楽しげに遠ざかって行くのなら
後は
男を殺した女が窓を閉めるのを心待ちにするしかなさそうで
二〇二二年一月二十八日

何を見て見損なってか日は暮れて
見える限りを見尽くせる眺めの中に
目新しい物を望んで何も見当たらずに
見晴るかされれば再び戻って来ないかに
何もかもが見知らぬ姿に改まって遠ざかる
それ一つを除いては

そんな拾い物が一つ手に残れば遣って行けよう
とでも考えなければ遣って行けないよな
と考えて拾い物の使い途を考え倦ねていると
そう言えば今日は
今日の中に有る限りの物が今日を限りに
戻って来られない処へ行った切り
再び戻って来ない日だったかと日を数えても
日数は合うような合わないような
な日数が合うような合わないようなのも
もう今日が戻って来られない処へ行き掛けてるからで
それで一つ物を拾えたなんて
とんだ拾い物を拾ったもんだ
とちょっと嬉しくなるのもこの拾い物の使い途なのか
と戻って来られない処へ向けるように拾い物を翳すと
今日を限りに戻って来られない筈の物が
向こうから全て押し戻されて来るようで
とんだ儲け物のような要らぬ災いでも招いてるような
試しに翳した儘に拾い物を裏へ向けると

押し戻されて来たものが潮の引くように押し返されて
裏にするか表かで戻すも返すも思いの儘
な事では
今日は続きもしなければ終わりもしない
取り戻せも出来なければ失われもしない
もうどうにも動きが取れないじゃないか
とんだ拾い物はとんだ要らぬ災いだった
と決め付けられもしないけれど棄てられもしないでは
拾い物の裏表に先行きを任せるしか無く
にしても拾い物を手放せさえ出来たなら
この身も何一つ戻って来ない今日へと消し去れように
二〇二二年一月二十九日

窓の外が真っ暗で
窓に近付いて外を眺めると
真っ暗な外を眺めているのではなく

まるで目が見えずに真っ暗なのではないのか
だって何処も真っ暗で窓が何処かも分からない
振り返るにしろどっちが内か外かも分からない
それとも真っ暗な窓の外を眺めたのが間違いで
それで外の真っ暗が目の中に入って来て
目の中がすっかり真っ暗になって
その真っ暗な中へしか目は向けられなくなってるのかな
そんな目の中の真っ暗ばかりを見るのを已めて
外へ目を向ければ真っ暗な外も見えるように
なのに目は真っ暗な内へばかり向いて仕舞うらしい
やはり真っ暗な窓の外など眺めたのが間違いで
今更どうなるでも無いけれど窓の外が真っ暗なのは
なぜ
さあね
それともそのなぜから始まってて
なぜから始めて仕舞ったのが拙かったのかも知れない
つまり
なぜ

が真っ暗だったんだ
なぜ
な儘に窓の外なんかに目を向けるから
窓の外もそれを眺める目の中も真っ暗になって仕舞うんだ
なぁんだ　そうか
じゃ　なぜを已めれば良い訳ね
ぇ　なぜ？
なぜ已めなくちゃいけないのかな
ここは
目の中の真っ暗を何処までも内へ内へ向かって見厭きるまで
見尽くすか見果てるか見窮めるか見貫き通すかして
そしたら真っ暗はどうなるか
見られる痛みにのたうち回って
叫び声でも上げるか身を捩らせ捲るかそれでも済まなけりゃ
真っ二つに裂けるだろうよ
根深い穴を開けるだろうよ
そしたら真っ暗のその奥のその先のそのまた奥へだって
真っ暗なら目の光りは降りる処まで降りて行って

そこからどっちを振り返ろうと
この世の全ての真っ暗を操れるだろうに
この世の全てをなぜで埋め尽くせように
二〇二二年一月三十日

何時日が暮れたのか知れないけれど真っ暗なら夜で
遠く潮の引く音も退いて
端から微かに乾き始める浜砂の軋むだけの
波の音さえ届いて来ない静かな辺りなのに
重く粘り着いては撥ねるような弾ける音が煩いなと
眠ってた覚えもないけれど目を醒まし身を起こすと
夜の色を浸み通らせた影みたいな何人かが直ぐ側で
せっせと土を捏ねている
捏ねるには持って来いの土らしいにしろ
捏ねられている土は戸惑ってるに違いない
だって土の弾ける音は酷く苦しげで嫌そうに濁って

捏ねられる覚えは無いぞ！って泣き叫んでるようで
いや
捏ねられた土で造られた物が確かに泣き叫んでるよ
造って呉れなんて頼んだ覚えは無いぞ！ってヤツか
お定まりの科白だよな
産んで呉れなんて頼んだ覚えは無いぞ！ってヤツだ
でもお定まりなのは避けて通れないからで
その科白を弾みに勇み立って
土で造られた物は自らをぐじゃぐじゃに土に戻そう
でもそんなの分かってたさ
と土を捏ねてた何人かは肩を組み砂浜を走って逃げ
疾っくに小さな影の群れで
彼らが造った物に後を追わせるよう誘ってないかな
まんまと企みに嵌まったそいつは
ぐじゃぐじゃな自らをぐじゃぐじゃに直し直しして
それを態と待ってたみたいな影の群れに追い付いて
恨みを晴らすかに姿が無くなるまで彼らを殴り潰し
姿も無くした彼らを全て蹴散らせば

そんな事はまるで何も無かったんだ
そいつは初めっからそいつで
土の匂いなんて少しもさせず
独り浜辺に佇んで息を弾ませ
その険しくこっちを睨む目と目が合うと
そいつと殺し合わなくちゃ済まないと直ぐに分かる
分かってもこっちはまだ土に捏ねられてさえないぞ
なんて言ってても独り言にもならないよ
土を捏ねるなんて事が初めっから無かったんだから
でもそれって嬉し過ぎて笑いが込み上げて来ないから
孰れ土に還るそいつの負けに決まってるじゃないか
なんて甘く見てる内にもう潮が満ちて来て
こっちは直に海へ還されて仕舞うって事か
そんな事頼んだ覚えは無いぞ！って勇み立って
あいつめ
姿が無くなるまで殴り潰して遣るから今に見てろと
真っ暗な砂浜を走ってる
筈

でもどっちへ？　って遠く響くアハハハハ
って笑い声は何処を走り抜けて行くのやら
二〇二二年一月三十一日

二月

声が空っぽだなんて知ってるよ
声など空っぽな心にしか届かないからね
だけどそんなの知らん顔で空っぽな声に従って
空っぽな心は空っぽな声にも隠した儘に
身はその声に流されて
身は空っぽな心に塞がれて
小さくゴツゴツと獣のように固まって
空っぽな心は空っぽな声に擦り替えられて

獣のような身を運び去るのは
空っぽな声に流される空っぽな声で
何処へ辿り着くのかなって
空っぽな声に決まってるよね
空っぽな声が抜かりなく企んだ事だもの
そうして獣のような身を引き受けるしかなくて空っぽな声が
苦し紛れに獣のような身に空っぽな声を投げ付けたって
そりゃ獣のような身だもの
空っぽな声なんて弾き飛ばして
何処へでも風任せに逃げて行けるけれど
何処へ辿り着くのかなって
空っぽな心に決まってるよね
空っぽな心がこっそりと企んだ事だもの
そうして獣のような身を引き取った心はもう空っぽじゃなく
でも空っぽじゃない心なんて心かどうか怪しくて
獣のような身を殺すのか
獣のような身が怪しい心を殺すのか
そんなのきっとどっちもどっちの相討ちで

身は心に満ち心に身は満ちて身動き出来ず心も動かせず
幾ら空っぽな声を懐かしがろうと恋しがろうと
大きくフワフワと獣のような声に囲まれるしかなく
そんなじゃ身も心も互いを満たす儘に空っぽにして
獣のような声なんて疾っくに易易と擦り抜けられてるようで
そしたらもう身は身　心は心で行く先が違うしかなく
身は獣のように先へ突き進み
心はゆるりと後退るけれど
その儘に引き裂かれるなんて事はなくて
ぇそんな　ぁぁ引き裂かれたい
って真っ直ぐな声はそんな願いにたっぷり満ちていて
そんな願いに心はたっぷり満ちていて
でも空っぽじゃない満ちた心なんて心かどうか怪しくて
引き裂かれたい願いを殺すのか
引き裂かれたい願いが心を殺すのか
そんなのきっとどっちもどっちの相討ちなら
身だけがすっかり先で獣のようかどうかもまるで知れなくて
な身では独り自らを更に遠くへ引き裂くしかなかろうけれど

それでは心は置き去りの何の願いも満たされず空っぽな儘で
だけど空っぽな儘の心なんて何の心でさえ居られる筈もなく
二〇二二年二月一日

身が何時も空っぽだなんて知ってたよ
空っぽは入り口ばかりで出口がないよね
なので空っぽに入って行けるのは空っぽだけ
身は何時も空っぽの中に身を置いていて
身だけが空っぽを空っぽに出来たと言えるし
空っぽは身によって空っぽになったとも言える
なので身は見る事も聞く事も出来ないよね
身は空っぽの中に棄てられていると言えるし
棄てられた身がそこを空っぽにしたとも言える
そして何時も空っぽの中に身を置く空っぽな身は
そんな空っぽで身が満たされてれば
何時かその空っぽを身から吐き出し

空っぽから吐き出されもする身は空っぽの外へ出て
空っぽを空っぽで無くせると知っている
そう知っているとも知っている
そうとも知らずに
でも薄薄はそうとも知ってて
その知らずにと知っててをゆらゆら揺れて楽しくて
何も見えない何も聞こえない中で息もしてられよう
だって息程空っぽなものも無くて
ならば息程空っぽで無くなるものも無くて
そんな息が空っぽな中の身の空っぽを
その外へ導き出しても呉れようって思えて楽しくて
なので身は
何時までも空っぽな中で空っぽで居られて
でもそれは
何時までも空っぽな中の空っぽで居られないからで
きっと音が遣って来よう
空っぽに幾ら目を凝らしても空っぽだけれど
空っぽに常に耳を澄ましてれば何時かは聞こえるよ

空っぽが空っぽの外とぶつかる音が
そうして身が空っぽから外へ出れば
身には身がぎゅっと詰まっていよう
で
身はぎゅっと詰まった中に身を置いていて
って　何がぎゅっと詰まってるかって？
身がぎゅっと詰まった身がそれを探し当てるしかないなら
そんな身だけがそれを見付けられよう
そんなそれならきっとそんな身をぎゅっと詰まらせてよう
そうとも知らずに
でも薄薄はそうとも知りながら目を凝らしてれば
身を詰まらせた身は身が身を置いている己が身を見出そう
そうして見出した身と見出された身が一つだと知れたなら
身は何処へ身を置くまでもなく空っぽの外へ消え果てよう
だって身の置き処なんてもう何処にも無いし要らないし
そう遣って身は身一つが空っぽの出口だったんだって
確かにそう知れたなら何も見えず聞こえず楽しくて
二〇二二年二月二日

を忘れたか
と名は聞き取れなくても
忘れてないよ
と力を込めては唇を短く尖った息で弾いて呟いて
懈い足で泥濘む坂をゆるゆる登ってたりしたのが
どうだったのか
足が止まり掛ければ坂は見る見る険しく殆ど壁で
鼻先の白っぽい濡れた土に口付けして
土の柔らかみを吸いたいな
な筈が口が独りでに土から背けられ
左耳が土に冷たく浸かって土の奥の音を聴き取って仕舞う
高くから坂を転げ落ちる雷のような重い響きに妨げられて
却って奥深くへ耳が澄まされ
それは坂の底の古い裂け目が開くような音で
更にはその裂け目の奥で名は忘れてない誰かの叫ぶ声かと

その名を呼びたいけれど唇が言う事を聞かず
動かない唇が石のように裂け目を塞ぐようで
却って裂け目の奥の叫び声が唇へ伝わるのか
その唇の震わす音が忘れてない名を繰り返し
そんな名など知らないと耳を土から剥がすと
見上げられる白い坂に顔が二つ浮かんで来て
左が生きてた顔で右が死んでからの顔だろう
慌てて目を背け右耳を坂に押し付け土に浸け
もう聴き取りたい音は予め分かってる
二つの顔の間に埋まってる筈の骨の音で
音と言うより懐かしい人と交わす尽きないお喋りのようで
高くから坂を転げ落ちる雷のような重い響きに妨げられて
却って奥深くへ耳が澄まされ
それは骨が塞ぐ古い裂け目が開くような音で
を忘れたか
と名は聞き取れなくても
忘れてないよ
と言いたくて言えずそれとも言えても言ってはならず

裂け目の奥で二つの顔が長い口付けを交わしてるのなら
聞き取れなくても忘れてないのは誰かの名などではなくて
生きたと死んだの境で険しい坂を果てなく登る喜びの喘ぎか
それを聴けたならまた懈い足で泥濘む坂をゆるゆる登れように
二〇二二年二月三日

ささくれ立って低過ぎる空は臭うようで
それでこっちへと重く傾き掛かられては
坂はすっかり暗く丸まって丸まる切りで
足元はぎざぎざと足の踏み場もなくては
ぁぁぁぁ縦ばかりだ
ま　縦ばかりなら　一人で
するするする擦り抜けどうにか出来そうでも
狭過ぎるのが行き場を塞がれてるようで
匿した名を呼ばれる声が聞こえなくては
まだうら若い身も塞がれて仕舞いそうで

で聞こえたんだろうか声は
と縦ばかりに耳を欹てるのもどうなのか
丸まる坂の端から端まであれこれ並べて
せめて目は横へ拡げたいな
な望みなど嘲笑うように縦ばかりな中に
籠もるにしろ縦でも横でもない声の塊が
真ん中の縦が一つ裂かれて開いた奥から
掴まれた活き魚のようなピチピチ跳ねる
透けて淡く輝く姿を覗かせ
縦ばかりの縦を全て弾いて
丸まる坂は丸丸と丸裸にされ狭い切りで
でそれ
君は何をどうしたくて何をどうしてるのかな
って声は掛けたいけれど喉が縦に閊えて
苦しい息を縦ばかりに吐き散らすばかり
それ見ろまた何処も縦ばかりじゃないか
でそれ
君は何をどうしたくて何をどうしてるのかな

って声を聞き取る耳もすっかり縦ばかり
でそれ　一人で
掛けたい声を聞き取って何の効が有るのかな
な思いまで縦ばかりな縦ばかりだけれど
そんなのどれも独り善がりな縦ばかりで
でもその独り善がりの効は大いに有って
真ん中の縦が裂かれて開いた奥から覗いてた
籠もるにしろ縦でも横でもない声の塊を
縦一つ見当たらない中に丸裸にして
それは透けて淡く輝く姿な儘に
真上の一つ切りの縦を向き
その向いた儘に真っ直ぐ縦に昇って行くのを
縦に見上げるその縦は
目を拡げて呉れる
拡げた目は低過ぎる空も狭過ぎる坂も突き破って
うら若い身を何処へでも連れて行って呉れようね
声に呼ばれる名は縦の中に一つ切りに匿した儘に
一人で　きっと縦と横を跨ぎ跨ぎ

二〇二二年二月四日

縦でも横でもない声の塊なら縦と横を探しに行かなくちゃ
それともそう見えるだけでそれは
ただ縦と横なだけなら声の塊を探さなくちゃと思ってるか
どっちにしても
何の為に？ならそんな
何の為に？を探す為にだろうね
縦も横も声の塊もその為に設えられた絡繰りなのさ
そんなの分かり切ってるだろ
じゃその分かり切ってるのに何の為に探すかって？
そりゃきっと
何の為にに囚われて
何の為にに苛まれて
何の為にも無くに身を滅ぼしたいからだろうね
何の為にかって？

何の為にから解き放たれて身を滅ぼすよりは増しだからさ
かの為にだろうね　縦と横は互いに囚われてるに違いなく
声の塊からは酷く距てられる儘に孰れ朽ちて行くしかなく
声の塊はそれで
己がどれ程に古くてその古さと同じ程にどれ程に新しいか
声の塊な限り何時までだって新しく居られるのを知れよう
でもこれって酷い話しじゃないのか
声の塊はどう遣ったら身を滅ぼせるのか
何の為に声の塊なのか
の
何の為にから声の塊は見棄てられてるよ
そんな声の塊に出来そうな事と言ったら
酷く距てられてる儘の縦と横に囚われて
果てしない古さと新しさに自ら囚われて
身を滅ぼすでも滅ぼさないでも無くに
声の塊で居ようとするしか無かろうか
かの為にだろうね　距てられてる声の塊に縦と横も囚われ
朽ちて行くしかないのに朽ちて行けずに

これを終わらせて呉れる何かが遣って来るのを待っている
果てしない古さと新しさに貫かれる儘に
それともそうしてそう見えるだけでそれらは疾っくに
それらの為の何の為にを取り返しそれに囚われ苛まれ
何の為にも無くに設えられた絡繰りとして身を滅ぼしてる
話しは酷いも酷くなくも無くきっと話しでも無くに終わる
でも

もしそうでないとしたらそれらは何処の何なのだろう
それを正しく知る声が塊になって囚われているのかな
その声を届かせられる一人を導く為の縦と横なのかな
二〇二二年二月五日

女の造るものはどれも詰まらない
これ見よがしに喚き散らすばかりで
男の造るものはもっと詰まらない
喚き散らしもしない　これ見よがしに

女が男のように造れば少しは増しかな
喚き散らし方をそれなりに心得てるらしくて
男が女のように造ればまた少しだけ増しかな
見せ掛けだけの喚く振りなら巧く熟せるので
でも
行き着く処がそんな見せ掛けじゃ詰まらない
元を絶つには女を殺すしかない
でも女を殺したいなんて弱い男に女を殺せる筈がないし
じゃ誰が女を殺すのか
女などは殺すにも価しないと考える奴になら殺せようか
そんな奴なら疾っくに女を殺して忘れてるかも知れない
そんな奴はもう居たとしても女の居ない処にしか居ない
それが答えか
しかし何の答えなのか
それとも答えなんてどれも何の答えか分からなくてしか
答えでないのかも知れないなら
何の答えか分からずに
それが答えだが

その答えで女を殺せるかだよ
殺せなかったなら嘘の答えだ
とも限らない
抑も女を殺すのが誤りかも知れないし
女を殺せば却って女を生かす事になる
少なくとも女が生きてた事を認めて
それに確かな姿を与えて仕舞う訳で
生きた儘に放って置くのが賢い遣り方なのかも知れない
殺すにも価しなくてしか殺せないなら殺す効も無いよな
とは言え　そんな事だから
女の造るも　のはどれも詰まらない
と来たら　振り出しに戻るだけじゃないか
なので奴は殺した女など忘れて女の居ない処に居るのか
それが答えか
しかし何の答えなのか
それとも答えなんてどれも何の答えか分からなくてしか
答えでしかないのなら
その答えは戻る程な振り出しも打ち消して仕舞ってるよ

何が振り出されて答えに至ったか分からないのだからね
とは言え
女が振り出しなのは忘れようもなく動かないのも確かで
答えなんてどれも何の答えか分からなくてしか答えでしかない
それって
ただ女の尻を追っ掛け追い付けてないだけかも知れない
それで男は見せ掛けだけの喚く振りなら巧く熟せる訳だ
女の詰まらなさに追い付けた位でうかうか悦んだりして
二〇二二年二月六日

持って生まれたもので
女は幾らでも男を騙して痛い目に遭わせる事だって出来る
しかし男は女よりもずっと狡賢い
これも持って生まれたもので
男は懲りもせず騙されながら
女から幾らでも女の持ち物を奪い取る事が出来て

その奪い取った物を活かして面白可笑しく暮らして行ける
そこは女も負けてはいない
女も男から男が女から奪ったのと同じ位に
色色と奪い取る事は出来る
しかし女はそれらをまるで使い熟せない
面白可笑しく暮らせるどころかそれで痛い目にばかり遭う
なぜなら男の持ち物なんて
どれも元元使い物にならない物ばかりだからで　なので
男は男を騙しに来る女の持ち物を奪ってでしか暮らせない
それで狡賢さも自ずと身に付く訳だ
（女だの男だのと言ったって風の向きで引っ繰り返ろう）
持って生まれたもので
男は幾らでも女を騙して痛い目に遭わせる事だって出来る
しかし女は男よりもずっと狡賢い
これも持って生まれたもので
女は懲りもせず騙されながら
男から幾らでも男の持ち物を奪い取る事が出来て
その奪い取った物を活かして面白可笑しく暮らして行ける

そこは男も負けてはいない
男も女から女が男から奪ったのと同じ位に
色色と奪い取る事は出来る
しかし男はそれらをまるで使い熟せない
面白可笑しく暮らせるどころかそれで痛い目にばかり遭う
なぜなら女の持ち物なんて
どれも元元使い物にならない物ばかりだからで　なので
女は女を騙しに来る男の持ち物を奪ってでしか暮らせない
それで狡賢さも自ずと身に付く訳だ
さて
この話しの女とは何で男とは何の事だろう
女だの男だの元元何処にも居やしないのかも知れない
居ても女が男の前に居るか男が女の前に居るだけとか
としたらこの話しは何かと何かの喩えでしかない訳で
例えば
偉い人と付き随う人の　選ばれる人と選ぶ人の
立ち向かいたい人と逃げたい人の　追う人と逃げる人の
奪いたい人と与えたい人の　働きたい人と働きたくない人の

働かせる人と働かされる人の　寝てたい人と起こしたい人の
隣り合う大きな国と小さな国の　群れる国と独りで居る国の
仲の悪い兄と弟の　同じ組の良い子と悪い子の
常に巧く立ち回る奴と言い逃れすら碌に出来ない奴の
罪を犯したい奴と懲らしめたい奴の　笞打つ奴と打たれる奴の
虐めたい奴と虐められたい奴の　犯したい奴と犯されたい奴の
殺したい奴と殺されたい奴の　喰う奴と喰われる奴の
喰うしかない奴と喰われるしかない奴の
しかしどっちがどっちを騙しどっちが狡賢いか分かり難い
ただ強いか弱いか　責めてるか守ってるか
そんな事だけで計れる事など高が知れてる
例えば
持って生まれたもので
空は幾らでも海を騙して痛い目に遭わせる事だって出来る
しかし海は空よりもずっと狡賢い
これも持って生まれたもので
海は懲りもせず騙されながら
空から幾らでも空の持ち物を奪い取る事が出来て

その奪い取った物を活かして面白可笑しく暮らして行ける
そこは空も負けてはいない
空も海から海が空から奪ったのと同じ位に
色色と奪い取る事は出来る
しかし空はそれらをまるで使い熟せない
面白可笑しく暮らせるどころかそれで痛い目にばかり遭う
なぜなら海の持ち物なんて
どれも元元使い物にならない物ばかりだからで　なので
海は海を騙しに来る空の持ち物を奪ってでしか暮らせない
それで狡賢さも自ずと身に付く訳だ
例えば
上っ面だけお友達のアケミちゃんとアカネちゃんの事なら
どっちが面白可笑しく暮らしてられるのか
確かめるには二人から色色と話しを聞かなくちゃいけない
例えば
これを書いている誰かとこれを読もうとする誰かの事なら
どっちも狡賢そうだけれど
騙されながら読まされる事が有るならば

騙されながら書かされる事だって幾らでも有りそうだ
例えば
持って生まれたもので
風は幾らでも雲を騙して痛い目に遭わせる事だって出来る
しかし雲は風よりもずっと狡賢い
これも持って生まれたもので
雲は懲りもせず騙されながら
風から幾らでも風の持ち物を奪い取る事が出来て
その奪い取った物を活かして面白可笑しく暮らして行ける
そこは風も負けてはいない
風も雲から雲が風から奪ったのと同じ位に
色色と奪い取る事は出来る
しかし風はそれらをまるで使い熟せない
面白可笑しく暮らせるどころかそれで痛い目にばかり遭う
なぜなら雲の持ち物なんて
どれも元元使い物にならない物ばかりだからで　なので
雲は雲を騙しに来る風の持ち物を奪ってでしか暮らせない
それで狡賢さも自ずと身に付く訳だ

例えば
巌と波の　波と転げる石ころの　石ころと生す苔の　苔と巌の
例えば
恵む神と恵まれる人の　裁く神と裁かれる人の
殺す神と殺される人の　殺される神と殺す人の
こんなのややこしくて　殺すでも殺されるでも
すっきり決まりを付けたいけれど　ややこしい
例えば
神と神の
（天照大神と八百万の神神の　とか）
尤も神と神まで行って仕舞っては何でも有りかも知れない
そこには人の居処はないのだから人はどうでも好き勝手に
この喩えにぴたりと嵌まる神と神を思い描いて造り出せる
ならきっとこの話しは
そんな神神を造り出して仕舞う人と神神の喩えだったんだ
だってその先に考えられる事なんて無さそうで
後は
そんな人と神神とどっちがどっちを騙しどっちがどっちが狡賢いか

確かめようにもどっちがどっちかその尻尾さえ掴めなくて
なのでこの話しはどう転んでも喩えで有るしかないのかな
で誰がその尻尾など掴まえようとしてるのかな
も喩えだよ
二〇二二年二月七日

まれびとはあれは何の姿も無かろうにも
あれはまれびとなんて言われてるけれど
あれは還って来る私の他にないよ
穢い限り穢い姿なのは
私を私の目から逸らす為だろうね
私が私を真面に見たりしちゃ拙いものね
そんな常には真面に見たりしない処から
まれびとをあれ呼ばわりする誰かの処へ
明け泥む暗い夜の何処だか知れない処へ
とは言えそこはそこにしかない

時も後にも先にも一つしかない
その時へ還って来るまれびとが
還って来る私でなくて何なのか
その一時を限りに肩を触れ合わせる時が
私に還って来られる時でなくて何なのか
そんな何なのかな私でなくちゃ還れない
そうして
知らない何処かなそこで年を数え厭きて
うかうかと歳を重ねていたのは誰なのか
そんなでずっと待ってたのは私じゃない
でも還って来る私を迎える時の中では私
な私と私じゃ私なんて見分けも付かずに
常には真面に見たりしない私は私を見て
そんな見られる筈のない私をひと扱いし
そんな時が過ぎればまた知らない誰かは
歳を重ねた事もすっかり忘れ夜は明けて
またうかうかと歳を重ね直して行けよう
一時から一巡りして始めに巻き戻されて

時はそこにたっぷり恵まれてようからね
その時の外へ去って行く誰でもない私の
穢いも穢くないも無い誰も知らない姿は
影もなく消え失せるしか無かろうけれど
あれは何の姿も無かろうなんてまれびとじゃなく
もう再び還って来ない私も知らない私でしかなく
そんな私の行く処は誰もが真面に見たら拙い処で
清かな限り清かな私は私だけで私だけの私を見て
還り果てれば尽きない喜びに小躍りしてようかな
二〇二二年二月八日

もうすっかり遅くなって仕舞って
道が流れて帰れないよ
どうしよう
と声が訊いてる声を声が聞いてる
なら声は応えるしかないけれど

どうして遅いと道が流れて仕舞うかだよ
何が道を流したのかな
それとも道なんて無くて
でもこんなに遅くならなければ何時も通り越せた処が
思いも掛けず何処にも見当たらなくて
流れた道が流れて行く様がふと瞼に浮かんだだけとか
だからってその流れた道まで消えて無くなったのでは
愈愈声も声に応えようもなくなって
ただ帰れないで遅い時に塞がれて佇むしかなくなろう
そんな事に為りたくなくて
もう為ってるかも知れないけれど
何時もの道がなぜか流れて仕舞ってるのをどうしよう
って
そんな声
なら
流れた道へ向けて呼び掛ける声でしかなくて
流れた道が声に応えるしかなくて
流れた道は見る見る声の近くまで遣って来る

でも流れた道では通れないよ
かと言うとそうとも限らない
流れた道に沿ってこっちも流れて行けたなら
何処へ行き着けるか知れないけれど
道なんて無かったなら帰りたい処も無かったんだとか
そんな事で何処へか行き着ける処へは帰れようかとか
危ういのは分かり切ってても着けるしか無かろうか
でもどう遣って？
なら
流れた道の流れた姿が教えて呉れよう
流れた道しか縋れるものも無ければそうするしかない
流れた道がまた流れて逃げて行くなら
流れた道に掛ける声を途切れさせずに
流れた道を追っ掛けて行くしかないね
流れた道は声にそうまでさせたら逃げるのも煩わしくて
流れた道など已めればそこで渦を巻くしか無くなって
声はぐるぐると渦の目の奥へでも呑み込まれて行こう
そしたら遅くなったとか何処へ帰りたいとか

声が声に訊いて応える声も要らなくなるよね
これって何処でだっけかな
これって何時かこの通りな事が確かに有ったんだよな
二〇二二年二月九日

重い己の屍を幾つも引き摺り持ち帰ったよ
後は全て巧く行くかって位とても嬉しいね
だって一つ一つの屍は生きた証しだからさ
明日を生きる励みにもなるよ
でまた今日も勇んで出掛けては来たけれど
夢のように行き成りに酷く怖い目に遭って
どんな目かって何だかまるで分からない内に
そんな目に遭ってた儘為す術無く独り取り残され
ずっと死なずに居なくちゃいけない酷く怖い目で
死ねないんだから逃げられる処なんて有る筈無くて
身は震え流されて行くようで耳の奥さえぶるぶる震え

そしたら後ろから酷く聞き覚えの有る声が聞こえて来る
死にたいんならこっちへおいでよと誘ってるに違いなくて
死ねて救われても死ねないよりもっと怖い事が待ってそうで
断った積もりなんだけれど何時の間にか甘い誘いに乗っている
もう酷く見覚えの有る処に腰を据え
怖くも無ければどうやら死ねても居ない
ここは何処ですか
見覚え有るでしょ
え？そう言われて仕舞うとうーんさっぱり見覚えが有りません
で　あなたは誰ですか
それは覚えが有るでしょ
そう言われれば有るようでも却ってすっかり覚えが有りません
ま　そんな事ですよ　ところで幾つ持って帰りますか屍を
欲しいだけ差し上げますよ　だって声に応えて呉れたので
と言う口が開く儘に喉の奥が真っ赤に脹らみ
緊く目を閉じ息の止まった冷たい土色の児が吐き出される
いや　こんな屍を欲しいんじゃないんですよ
と言う口が開く儘に柔らかい屍をつるりと頭から呑み込む

いやいや　呑んじゃいけませんよ持って帰らなくちゃ
と言う口がまた死んだ児を産んで
いや　こんな児を産んで欲しいんじゃなく　と繰り返してると
ひょっとして口は二つ向き合ってるけれど胎（ハラ）は一つで
幾つか数えようもない死んだ児らの一連なりが輪を作って
胎から口　口から口　口から胎とぐるぐる回ってるだけなのか
ってその胎を覗こうとして覗けたような覗ける筈もないような
あぁ
こんな事が死んだ儘で居られる事なんだ
ずっと死んでられるのってこの事なんだ
と胎には堕ちたかな
救われはしないけれど死ねたのなら
ま　屍を持ち帰ってるも同じかなと
二〇二二年二月十日

何を忘れてるかを忘れてると分かるには

何かが始まっていなければ始まらない
その何かも始まったとだけは分かっても
分かるのはそれだけで後は分からない
しかし取り敢えず分からなくて構わない
思い出されなければならないのは
何を忘れてるかだろうとは思うが
忘れられてると分かってるだけで
まるでそれは取るに足らない事かも知れない　それとも
取るに足らないと知れなければならないかも知れないが
で　それはそんな事なのかな
必ずそんな事で済むとも限らないけれど一つ確かなのは
始まった何かはその先へ向かって続いて行くしかない事
始まったと知れるだけの先では何処なのか知れない処へ
あぁせめて何を忘れてるかのその何をだけでも知れたら
例えば何かを何処かへ忘れて来たんだと思い出せたなら
その何だったか何処だったかを思い出そうと出来るのに
などと　くよくよしてるのもお構いなしにもうさっさと
始まった何かはその先へ何かを進めていて

そうして必ず
そこが何処だろうと
遣って来るべき物事がそこに遣って来る
さてその
物事である
それは始まった何かとは間違いなく係わってはいよう
何を忘れてるかを忘れてる何かと係わってるかは知れない
知れないなら知れないいけれどそんな事より
先ずはそれで構わない儘にして置くしかないし
とっとと訊いて仕舞うべきだろう
物事クン　君って何ものだっけ？
そしたらその物事は
何かの始まりから君って何もの？までを攫って行くだろう
待ったの声は掛けられてもそれを聞く耳は無さそうだ
こうして遣って来た物事に粗方攫われた事だけが残る
その残った事が残っただけでも良しとしよう
いやもう一つ
何を忘れてるかを忘れてる何かも残ってるんじゃないかな

流石の物事クンも
何を忘れてるかを忘れてる事にまでは目は届かなくて
そうか
思い出したぞ！
何を忘れてるかを忘れてるかを
それは物事クンの忘れ物だったって事さ
或いは物事クンにしたら思い及ばず遣り過ごしただけかな
と分かれば
その忘れ物か遣り過ごされた物は居ても立ってもいられず
物事クンの後を追っ掛けては行くだろうけれど
物事クンにしてもそれは何を忘れてるかを忘れてる儘では
物事クンには追い付いて来る物は全く見知らぬ儘のもので
けれど
忘れ物か遣り過ごされた物にしても
全く見知らぬ儘のものをしか
追っ掛ける効はなくて
息はぴったりさ
二〇二二年二月十一日

周りはゆっくり古びて行く
変わらないものなんてない
でもそんな事は変わらない
古びるものを新しくしてる
幾らでも変えられるのは変わらない
そんな処で変わらず暮らすしかなく
何時の間にそんな己が身に背を向けてたか
なんて事かも知れないけれど
なんて事で済む筈は無いんだ
それはそれは美しいものに触れると
それとも何時の間に触れられてると
真っ暗闇がめらめら輝き躍って擽ったくて
身の底からさらさら噴き上がる血のように
笑いが溢れくるくる流れて輪を転がし回す
あぁ美しいものって必ず輪だよね

輪は幾らでも変わって変わらない
でも止まらない笑いに絡め取られ
身は縛られ弄ばれ血の池に嵌まって溺れてるかも
構うもんか　どうせ周りは
古び綻び萎び乾涸らび鄙び穢び黴びて滅びて行く
何時が何時ともなく美しいものに触れられ捲られ
真っ暗闇だけが輪に輪を掛けて輪を重ねて
重なる輪の奥に真っ暗闇の向こうが穴を覗かせる
美しいものが穴の奥で何をしてるかって？
さあぁね
何処にも美しいものなんて有りはしないよ
とか
耳を澄ます耳に態と聞き取れるかのように
醜いものらが目も口も尖らせ囁き合ってないかな
めらめらもさらさらもくるくるも明るみに晒され
真っ暗闇なんて真っ赤なまやかしの偽りで
なんて事かも知れないけれど
なんて事で済む筈は無いんだ

偽りの真っ暗闇だってどう見たって真っ暗闇だろ
それはまたその真っ暗闇の只中で転げ回り
それはそれは美しい姿で美しさを撒き散らそうね
美しさが美しさを産み殖やし美しいもので溢れて
何時の間にまたそんなものらに触られ捲られれば
美しいものはまた輪を掛けて身の底へと流れ込み
止まらない笑いに捩れる腹は裂け笑い死にだよな
腹が裂ければ恐らく一纏まりに美しいものらは
血と共にあの醜い穴へ流れて墜ちて行こうか
変わらず古びる音色をどくどくと響かせて
二〇二二年二月十二日

遊びに誘ったのに穴が怖いからと断られた事がある
何時だったか
そんな事など無かった時だったかも知れない
友の顔も浮かばなければ何処にも居ない友だったか

と心付くと何時から穴の中に凝っとしてるようで
なら穴を怖がって出掛けるべきかも知れないけれど
出掛けようと誘われたのに断った事があって
だって出掛けたら帰って来なくちゃいけなくて
帰って来たくないから出掛けたくないんだよ
帰って来られる処は必ず穴でしかないからね
穴へ戻るだけなら穴から出てないも同じだろうよ
ただ怖いもの見たさに穴を一巡りしてるだけだよ
でもそんなのは無かった時みたいに昔の事で
見たいものを見たくて一人で出掛けては来たけれど
何を見たかったのかな
何を見たかったのか見付けたくて出て来たのかな
で見ると
止せば良いのに穴を掘ってる人が居るではないか
後ろ姿は何処にも居なかった友の姿に似てないかな
呼び掛けた訳でもないのにその人が向き直ると
その顔は私の顔を鏡に映したような顔で
そぉら見ろ

出掛けたってこんな怖い目に遭うのがオチなんだよ
ってその顔に声を掛けられて仕舞う
ただ声は少しも私に似てなくて少しだけホッとする
けれど似てない程それは私の声に思えてならなくて
声に応える替わりに足元の石を拾って投げ付けた
その人は穴の向こうへ墜ちて消えた
穴の向こうって何処だろうかって穴を一巡りして
戻りたくないけれど戻るしかない帰り道は
見る見る暗くなって真っ暗闇で身動き取れなくて
だったらずっと凝っとしてるのも悪くない
この儘この身は真っ暗闇に溶けて仕舞わないかな
そしたら穴へ戻らずに済むのにな
けれど身は真っ暗闇に溶けたりするものなのかな
と身のあちこちのあやふやな辺りを弄り回してると
この同じ二つの身が絡み合うらしいと分かって来て
その内の片身だけを真っ暗闇に溶かし込まなければ
ここを抜け出せない儘共倒れに違いなかろうけれど
この身は誰の身なのかな

いやその前に抜け出せないならここは全く穴だろう
けれど誰の穴なのかな
それともこうして果てもなく
二つ身が揉み合ってれば誰の身も穴も無かろうか
こんな穴なら怖いも怖くないも無いよ　と言うか
こんな二つ身の儘ずっと離れられずに居るのって
出掛けては帰って来なくちゃいけない穴とは違う
出るも戻るもない穴に疾っくに帰り着けてるようで
二〇二二年二月十三日

心にはずっと
絶え間なしに色んなものが降り注いでる
でもそれらはどれも
心の底へ物凄い勢いで落ちて行って
それっ切り何も戻って来ないよね
心の底なんて言うけれど覗き込んだって底無しだもの

そんな心だったら直ぐにも擦り切れて仕舞いそうだけれど
どうして心は今も心で居られるのかな
それともそんな心なんて疾っくに擦り切れ
それでもそこにはそんなに擦り切れて消え果ててる
そこへまた絶え間なしに擦り切れた心の痕だけが残ってて
それでもまたそれを色んなものが降り注いでるのなら
それでもまたそれを心って呼ぶしかないのなら
心の形は全くぽっかり開いた何もかも筒抜けな穴だよね
少し見方を変えても…
心にはずっと
絶え間なしに色んなものが降り注いでる
でもその心なんて初めっからそれを受け取る為に底無しで
そこへ何が物凄い勢いで次次に真っ逆様に落ちて行こうが
心にはそんなのへっちゃらで擦り切れるも何もないんだよ
だったにしてもやっぱり
ぽっかり開いた何もかも筒　その心の形は全く
で
話しが終わったら寂しいじゃないか
心だってきっと寂しがってる

そんな心ならきっと出来る事を一つ見付ける
それはせめて一つ限りでも
絶え間なしに色んなものが降り注いでる内から
あっという間に真っ逆様に底無しの底じゃなく
心に残るものが欲しいよな
なんて事に望みを懸けようとするだろうね
で
そんなものが一つ降って来て心に引っ掛かってる
それともそれはずっと前から心に引っ掛かってたけれど
それに望みを懸けない儘では心に止まらなかったのかな
それか望みを懸けてもまるで心に止まらなかったものが
ふと目に映ったりしたのかも知れないな
そんな事も有りそうだ
で何が目に映ったかと言うとそれは全く
ぽっかり開いた何もかも筒抜けな穴が
さも物の形をしてますみたいな形で手にも取れるけれど
さてこれに何の使い途が有るんだろうと考えると
幾ら考えてもさっぱり分からない

でもきっと　これ一つ限りに望みを懸けたのなら
望みを懸けるだけなら懸けてられるよ
違うの？
ま　違うような　違わないような
叶わなければ望みは心にはその何の形も残せない
と　言えるような　言えないような
でもその筒抜けな穴にはきっと
絶え間なしに色んなものが降り注いでて
その奥には底無しの底が待ち構えてるらしいなら
懸けた望みを抱いて取り敢えず穴へ落ちてみたらどう？
そしたらきっとそこには違う筒抜けな穴が見付かって
その向こうから誰かが落ちて来るかも知れないよね
その誰かもそれに望みを懸けてたなら
望みが望みを互いに望んでたんだって
そんな事も目に映るのかも知れないし
けれど底無しの底で誰に何が出来るかなんて知らないよ
二〇二二年二月十四日

その穴なら常に覗かされている
その時（とはどの時か知らないけれど）
そこに見えて仕舞うものの姿が見えて来る
姿なら何の姿も目には映ろうけれど
見えて仕舞うものとは何だったろう
穴を覗かされるより前に見せられていたものか
とも思うがそれまでの時は全て穴の中へ流れ過ぎ
今更そんな時の事を穴の中に覗こうにも
狭いだけの暗がりに目は跳ね返され
そこに見えて仕舞うものの姿は断ち切られている
でないとしたら断ち切られているのは
そこに見えて仕舞うものの姿と異なるものなのか
しかしこれはどちらも同じ一つの事で
穴を覗かされているせいで
その一つが一つで済みそうにない事から逃れられない
いや違う

そこは穴じゃないし穴なんて覗かされていない
そこだけは間違いなく穴じゃない
そんなのは見たら分かるじゃないか（何見てたんだ）
じゃ穴は何処なんだ
穴無しには生きて行けないようで
と急いで見回すと見回す何処もが全て穴で
そんなだだっ広いに違いない穴が
そこだけ穴じゃない狭いそこを覗いてる
そこに見えて仕舞う断ち切られているものの姿は
そこに嵌め込まれるように身動き取れないで居る
そこは穴の外な筈なのに身動き取れないのはなぜ
と凝っとその姿を見詰める直すと
断ち切られたんだ
腕が無い
脚が無い
無い腕は何処かと探すと
それを覗いている穴に腕が生えて
狭いそこの動けない姿をがっしり掴んでいる

無い脚は何処かと探すと
その姿を掴んだ儘の穴に脚が生えて
穴はその姿を連れ回している
しかし何処を？　と尋ねて仕舞えば
何処もが穴ならだだっ広いその穴の中を
脚を生やした穴が動き回るしかないけれど
誰がそんな事を尋ねるのか（そんな誰も居ない）
なので
穴に覗かれる腕と脚を失った姿は
腕と脚を生やす穴と一つに
穴が覗いてもその姿に塞がれて見えない何処へか
穴の外をか動き回って
その腕に抱き締められるものでも見付ければ抱き締める
それがそんな抱き締められる穴しかないならどうしよう
も無かろうね
二〇二二年二月十五日

親しんだ言葉を逆さにすると
ぬらりと言葉は肉のように透けて
中で血が逆さに巡っているのが見える
うっかり見過ごしてた辺りが切り開かれて
見える筈のない形だけの穴が口を覗かせるかに
そんなものに目を留めて良い事は一つもなかろうね
確かにぼそり一声でしかなかった筈なのに
血を逆さに巡らす言葉は鎖のように繋がり
身は鎖に繋がれ言葉を奪われ動けないなら
言葉を換えるしかないけれど　どう遣って？
言葉を換えられないなら姿を換えるしかない
と
穴に埋もれて翼を生やす儘に飛び去る姿をしている
見える筈のない形だけに全くこれは分かり易いよな
逆さにすれば必ず真っ直ぐな姿に戻れる姿だからね
などと思う間もなく姿はその通りに飛び去って仕舞った
それを見える筈のない形だけの穴だけが残って見送れば

一つ切りなら形だけでも穴は見えない筈はなく温温とも
中で透けた肉の塊のような身がコロコロと転げているよ
そんなものに目を留めて良い事は一つもなかろうね
そんなものこそ見える筈はないどころか有る筈もないさ
と思う程に思いは背かれコロコロが酷く快くて
転げる身が転げる痛みに叫びを上げるのが聞こえる程に
それがまた忘れてる事が忘れられてる儘かに酷く快くて
でもその快さの中に嫌でも忘れてた事は思い出されれば
逆さに巡る血で身は幾つにも裂かれる儘に翼を生やして
飛び去るかにも連なって舞い戻り
黙って思い出された事を眺めてる
見える筈のない形だけの穴が口を覗かせ開け閉めしてるのを
その口が親しんだ言葉を逆さにした声を上げるのを
なので言葉はどうにも換えようのないのを
けれど逆さを直せはしないにしろ
逆さでは無く聴ける耳に
声が届くのなら
それで

始めから何も無かった事になろうけれど却って必ず
始めから何も無かった事の無かった事は有るしかなくて
その無いと有るの逆さに拉がれないものはない
そんなそれに血は逆巻かずにはいられないかな
二〇二二年二月十六日

何時もの海からの帰り道沿いに
潮風に吹き曝されながら
緊い人の匂いが必ず漂って来るのに
人の姿を終ぞ見掛けない建物の何処からか
カタコトと湿った虚ろな音が微かに響くのに誘われ
裏へ回ると木の枝に懸けられた小さな絵が
壁に当たっては嫌嫌をするように震えてる
絵の縁は傷だらけで朽ち掛けてるにしては
絵の色は抜けるように鮮やかに塗り込まれ
剥がれた痕も見当たらない艶めきに吸い込まれるかに

目を近付けると
目を近付けるまでは少しも聞こえなかった
絵の中より絵の奥からかの音が耳に届いて
音は耳の中でふわりと花咲くかに柔らかい声になって
それは目を近付けても何を画いたのか分からないのを
分からせようとしてるのだとは分かっても
却ってこれは絵ではないのではとさえ見えて仕舞って
絵を見るようにこれを見てはいけないし
声を聞き取るようにも聞き取ってはいけないのかなと
ならどうする積もり？　と
どうにかしろよと迫られてるようで
取り敢えず目を逸らし耳を塞ぎたいけれど
そんなのを見透かすように
風も来ないのに嫌嫌が大きく振れて今にも裏返るかで
いやそれだけは困るんだ！　と
慌てるばかりでも押さえる手も出せないのが歯痒くて
（手は耳を塞いで塞がってるので↓）
ひたすら真っ直ぐな目と耳で向き合おうとするけれど

目の向きはゆらゆら彷徨い耳は手で緊く塞がれる儘で
それで　もしこれが裏返って
そこに
何も無いなら何も見える筈は無いのに
その無いものが見えて仕舞ったら
何も無いなら何も聞こえる筈は無いのに
その無いものが聞こえて仕舞ったら
目も耳も目でも耳でも無くなって溶けて仕舞うに決まってる
そうして何でも無くなって　その何でも無さでなら
何も無いそれと向き合えようけれど　取り返しは付かなくて
いやそんなのはまだ増しだ！　と
溶ける筈もない目と耳で何も無いのと向き合わされて
そんなる目と耳だけはそんな目と耳の儘に残ってようか
後は知らないけれど残らなかったものらはどうなってようか
きっと色ばかりが鮮やかに塗り込まれ
剥がれた痕も見当たらない艶めきに吸い込まれてよう
二〇二二年二月十七日

それを絵と思って見ると硬い石の板に画かれてたって
それを絵と思って見てる限り絵は震えて止まらない
それを絵と思って見るしか見ようがなくては
それを絵と思って見ないで震えてるかどうかは知れない
けれど絵と思って見ないとは何をしてるのだろう
何をしてるにしろ何かを何かと見てるのだろうか
それが色と形ならそれを色と形と見てるようでも
色と形と見るならそんな絵と思っても見られよう
もしも色も形も見て取れずに
それを見るとは何を見るのか
それとも
色と形でない何かにしてさえ見損なわれてようか
それはそれだけを見ようと思えば見えるのか
などとそれを眺めるともなしに眺めてるなら
それは絵と思われない儘に見えてはいようか
な　それとは何か

それを見えていようにも
それを何かとも知れずに
それの何が見えていて何を見ていると言えようか
と　それは空と海に違いない
それが空と海を画いた絵かどうかは知れない儘に
嫌でも空と海なら空に拡がる空と海に拡がる海で
けれど境目が酷くあやふやで
まるで空と海は必ず一続きでなければならないようなら
それは空と海などと二つに分けて言うのは誤りで
それに相応しい一つ限りな言い方を
それが絵なら絵を画いた通りに言い出せなければ
誤りは直せないけれど
誤りを直さない儘にしても何の障りも無さそうで
それで空と海が見えているかが幾ら疑われようと
そんな疑いだけが見えているかも知れなさそうで
それでそれがそう見えているならそれだけの事だ
けれど
舟の姿が

淡い影のようでもその通りな色と形を見せているのが
見えて仕舞えば舟は震え出し嫌でもそれは絵だろうに
その絵の舟の為に空と海は画かれなければならないと
思い至れるにしろ少しもそんなように見えはしなくて
ただ絵の舟さえあれば空と海は画かれなくて構わない
それは初めっから空でも海でも無かったのではないか
それを空と海に違いないと見えて仕舞ったのは
絵の舟にそう見えるように仕向けられてるだけで
と　そんな絵の舟の企みが見えて仕舞うと
見えるのはその企みだけで
舟の姿は絵から消えて舟の姿だった絵も消えて
その何もが絵とも色とも形とも見えなくなって
絵から消えた絵に色と形の消えた色と形が
それはそんな通りに見えるなら見えて来て仕舞おうけれど
見えて来て仕舞うものを見ていられるかはまるで知れなくて
そんな見失われてると変わらない見えて来て仕舞うものを
見えてると知れるように見ようとするなら見続けるしかなく
それは嫌でも見ようとする丸ごとが震えて来て

震えはこの先何が起こっても震え続けるしかなさそうで
その震えのせいでそれは
見失われてると変わらなくもその震えな儘に
見えて来て仕舞うしか無くにずっと見続けられる儘で
そこに
一つ限りに見続けて已まなかったしこれからも已まない
私だけに見えないのが私だけに見える
そんな見えなくて見えるものを
きっとそれは見えるも見えないもない震えで
そんなそれだけは絵と見るしかない絵として見続けるしない
そんな私の身はもう
この世の果てまで逃げても絵からは逃れられない
な私を囚われの儘にして震えるしかなくて絵は絵に違いない
二〇二二年二月十八日

一息吐くと空と海と舟にしろ

淡い影の舟は
水の上に浮くのか水の下に逆さにでも浮くのか
水の底に沈んでるなら淡い影とも見えなかろう
空も海もそんな舟と係わるのを嫌って押し黙り
空と海の境目は相変わらず酷くあやふやで
その遠いあやふやな辺りは空でも海でもなくて
空をも海をもその間に有るもの全てまでも
呑み込もうと柔らかい口を真横に広く拡げてる
きっとこんな事はまるで違う
試しに逆さにしてみようか
と思うだけで海の水は石のように硬くなる
海の水は石かも知れない
試しに逆さにしてみよう
すると
上に昇った海の水はあやふやな辺りへ呑み込まれ
あやふやな辺りから下に降りた空へ吐き出された
らしい
瞬く間の事で水の動きは見て取れなかったけれど

空はすっかり海の水の下に沈み空とも見えないで
水が乾上がった海の底が広広と空に見上げられる
きっとこんな事はまるで違う
それとも何時も通りな事なのか
試しに逆さを逆さに元に戻してみようか
と思うだけで空を沈める海の水は石のように硬い
空を沈めて海の水は石かも知れない
試しに逆さを逆さに元に戻してみよう
すると上に来た空の海の水はビクともしない石で
下に降りた海は乾上がった底を晒しはするけれど
海の水を失っても海には違いない
な水の全く流れ込まない海の何が海なのか
は知れた事
水の上でも下でもなく舟が浮かんでるからね
逆さになのか逆さの逆さになのか酷くあやふやに
そんな形（なり）で
舟は
海と空の少しもあやふやじゃない

海と空をくっきりと距てる
柔らかい口を真横に広く拡げる境目へ進んで行く
きっとこんな事はまるで違う
疾っくに舟は砕け散ってよう
舟の影に見えたのはきっと石の匂いで
空の海の水は石の儘に足らないものを求めるかに
（確かに空の海の水は石なのに石の匂いがしない）
自らを砕き舟の形をした石の匂いへと落ち懸かり
いや　空から落ちて来るのは何だろう
底の抜けた海の水の石より重い渦を巻く連なりか
何か知れないけれど落ちても落ちても落ち已まず
それを容れる海は何時までで経っても満たされずに
空にも海にも石の匂いだけがむんむんと溢れ返り
空と海の境目はその石の匂いに遙かに遠ざけられ
きっとこんな事はまるで違う
と嘲笑ってようけれど　嘲笑うなんて
何も知りもしない癖に知ったか振りしか出来ない
哀れな奴のする真似さ

二〇二二年二月十九日

きっと何かが足らなくて
空と海の境目だけが有る
で空も海も無い
としたら
空と海の境目は無いと無いの境目で
無いと無いの境目だなんてものを
どうして空と海の境目と言えたのか
にしろ
空と海の境目だけが有るしかないのはなぜ
は知れた事
舟が浮かんでるから
空と海の境目に舟は浮かぶだろうか
浮かぶのかも知れない
浮かぶのならきっと浮かぶのだろう

空と海より恐らくは手前の水の上かに浮かぶなら
空と海の境目だけが有るのではなくなって仕舞う
舟が浮かぶ為に必ず水が要るのなら
空と海の境目と同じ一つの事として水は無ければならない
それとも水など要らず舟が舟だけで舟を浮かべられるなら
舟はそれで良いにしても　それでは舟は舟だけで浮かんで
空と海の境目は何とも呼べない何ものでも無くなるだろう
いや
そんな舟の後ろか奥かに何とも呼べないものが拡がるなら
で空も海も見当たらず　にしろ他の何も入り込めないなら
そこを見当たらない空と海を使ってどうにか呼ぶしかなく
それで　空も海も無い中に空と海の境目だけが有ると言う
一つ限りな姿が嫌でも現れて来て仕舞ったのではないのか
ただその姿は　そのようにどうにか呼ばれるのがやっとで
もう一つしっくり来ない訳だが　しっくり来ないと言えば
これは…　しかし舟だろうか
空も海も無くて空と海の境目だけが有ると言えてなければ
舟らしき形（なり）をした淡い影でしかない

この先は舟に答えて貰うしかなかろうか　舟かも怪しくに
（↑舟の答え？）
ま　そんな事にしろ
舟らしき形をした淡い影の舟は
浮かんで舟とも決まってないし
空も海も無いからって　そこが
空と海の境目だけが有るとも決まってないよね
ま　そんな事で　そんな事らは漂っては居ようかね
（ぇそれで↓答え終わり？）
で　漂うそんな事らって　どんな事らなんだよ？　って
果たして尋ねて善いものか　にしろ誰が誰に尋ねるのか
誰が善し悪しを決めるのか　善し悪しって何の事なのか
などと　あれこれごちゃごちゃ遣ってるのは　どうやら
空と海の境目だけが有るとも決まってない
その決まってない辺りらしい　淡い影は黙る切りで
と
この絵は画かれ損なってるよ　きっと何かが足らなくて
って　逃げを打つ声が聞こえ

な足らない何かが逃げを打つんじゃ漂うしかなかろうね
な何もかもが漂うそんな姿を　画かれ損なってるも何も
この絵は何の足らないものも無く画き尽くしてるようで
ぇでもどう遣って？　なんて尋ねちゃいけなかったんだ
何もかもが足らない私の影が淡い影と一つ限りな姿では
二〇二二年二月二十日

あなたは白い手紙を開いて仕舞う
だって私がその手紙を送ったから
あなたは手紙の眩しさに目を背けながら
あなたの心に就いて白い限りに書かれてるのを知る
だって私が手紙にそう書いたから
それともそんな事はまるで違うとしたら
手紙は独りでに眩しく輝く浜の縁を滑り抜け
手紙が待ち遠しくて渇く心に苛まれ海鳴りに苛まれ
夜な夜な海を見に来るあなたの目に留まったのかも

でも昼は暗い
そう知ってるのは私とあなただけなら
浜まで手紙を送ったのは私の他に居ない筈
でも昼暗いのは暗い水が溝の底をそっと流れる為で
それは先に逝った人達の慰めになってる筈
なのであなたは昼をするりと擦り抜けては
明るい夜の海へ息を弾ませ易易と足を運び
振り返れば丘の頂で誰かがあなたを呼んでるけれど
明るい夜の中でその誰かの姿が一際輝けば
遠くてもその誰かの唇の動きが一一読めて
賭け事の為の決まり事がくっきり頭に入る
で後は賭ければ賭けた通りに起こる事が起ころうね
だって私が手紙にそう書いたから
賭けってそれはあなたの心の定めに決まってるよね
だって私がその手紙を送ったから
古い女を殺し損なった自惚れに酔うような目付きで
浮き浮きとあなたは私の待つ処へ滑り込む
滑り込むんだよ

そうしなきゃあなたは
私が取り置いて並べたあなたの心へは辿り着けない
それらは透ける薄い石で出来た丸い箱に容れられて
少しずつ色を違え死んだように凝っとしてるけれど
たとえ屍になったあなたから見ても心は死なないよ
どの心もあなたの知らない内に墜ちて来たんだから
それを拾って詰めた丸い箱はこうして積み上がって
そんなあなたの心では渇くばかりだろうね
で後はあなたの心の定めに従うなら従うで
賭けには決まりを付けなくちゃいけないね
ほらほらあなたの目に触れ色付く箱はゆるゆる震え
閉じ込められた儘の心は直ぐ出たがってるようだよ
（と私は消える）
あなたは片っ端から箱を開けてみるけれど
出て来るのはどれもあなたの心じゃなく
どれも余所余所しく立ち去って行こう
それをあなたは望んでたんだろうね
だって昼が暗いのをそれでやっと忘れられようから

それであなたの心のどの一つが賭けに勝てたのかな
二〇二二年二月二十一日

聞こえて仕舞う声だけが聞こえて仕舞う
聞きたい声も聞きたくない声も聞こえない
耳の中に何時からか白い水が溜まり
耳は耳を澄ます事を忘れさせられたか
それとも白い水に耳は耳から追い出されふわふわ浮いて姿もなく声を探してようか
目が真っ先に声を見付け耳がそれに取っ付く
まるで見えて仕舞う声だけが見えて仕舞うかに
何かに目が留まれば何かは必ず何か声を上げてる
目を開けてる限り目に入るものは何だって喋ってる
目を閉じると瞼の裏の声の他は何も聞こえないけれど
瞼の裏は眠いしか言わないので眠くなる
眠いので一眠りして目を醒ますと

仰向けの胸の上で小さな白い蛇が白い舌を出して黙ってる
なぜか酷く静かだなと思うと
眠ったせいで厚くなった胸さえ闇は透ける程に染み通って
白い蛇が白い舌を出すのしか見えないからで
なぜお前だけが黙ってるんだよと危うく尋ねそうになって
すんでのところで已めたのは白い水が耳の中でざわめいて
ここぞと狙い澄ましたように蛇の替わりに声を上げそうで
その声は必ず耳の奥をずたずたに破り裂こう
と
するすると白い蛇は闇の胸を降りて姿を消した
死にに行ったのだろう
そう声を上げるのは耳の中の白い水しか有り得なくて
でも耳の奥は裂けたりせずざわめきも収まる替わりに
その短い声は白い蛇の姿で耳をくねくねと這い出して
遠い塒へ帰って行くような後ろ姿が目に映ってる限り
死にに行ったのだろう
は谺のように繰り返され
塒へ帰り着けたのかその姿がやっと消えると

死に行ったのだろう
そう声を上げるのは耳の中の白い水しか有り得なくて
その短い声は白い蛇の姿で耳をくねくねと這い出して
と繰り返しが白く繰り返され白く繰り返されてる内に
きっともう遠い畤は白い蛇の群れで溢れ返ってようか
跳ねる身は白い水音のようにびちゃびちゃと打ち合い
なら
死に行った切り死ねてないじゃないか少しも
なら
死に行けないこの身こそ疾っくに死んでないか
だなんて考えて仕舞ったが徒で笑いが止まらなくなると
耳の中の白い水はすぅぅっと引いて行くらしく
堰を切ったように空っぽですっかり軽くなった耳に
聞きたい声と聞きたくない声ばかりが穢げに溢れ返って
聞こえて仕舞う声だけが聞き取れなくなって仕舞ってる
愚かしい
こんなじゃ死ねてる筈なんて無いじゃないか死ににも行けず
と白白と途切れ勝ちにも続く笑いを堪え声に出来たかどうか

あぁ聞こえて仕舞ってた声の清かさ！
その向こうへなら死にに行けたような
二〇二二年二月二十二日

飲む水を間違えているけれどそれは
飲む水を間違えたと間違えて違う水を飲もうとして
飲む水を間違えて飲もうとしてる水は
間違えて飲む水なのは間違いない
と間違えたと間違えて違う水を飲むのは
飲む水を間違えているけれどそれは
呼び水を注いだ覚えもないのに
水には水の成り行きが有るのか
水は必ず向こうから繰り返し繰り返し遣って来る
まさか吐く水は間違えようは無かろう
吸う息は間違えても吐く息は間違えようが無いように
いや息は向こうから遣って来る訳じゃないからね

間違えるなら吸うも吐くも間違えて仕舞おうかな
水と息では間違えるか間違えないかは違う事だよ
なら息なんて息の始めから間違えてるに決まってると
それを間違いと間違えようが間違えまいが
吸うも吐くも止める訳には行かないだけの事で
なら水だって飲むのを已める訳には行かなくて
必ず向こうから繰り返し繰り返し遣って来る水に
間違えてるとか間違えてないとか決めるのが間違いで
でも飲む水を間違えたのが命取りなんて事も有る訳で
なら飲む水を間違えたのが命拾いなんて事も有る訳で
息と同じで間違えてるに決まっていると間違えてれば
その間違えてるのも間違えてるに決まってだけかもね
な事にして遣って来る間違った水を飲むなら間違いと
飲んでも飲んでも飲み続けなくちゃいけないのを
間違え続けてると間違えてられるのは
そんな間違いで命取りと命拾いの水を取っ替え引っ替え
命取りは命拾いかとも分からない儘に飲んでは吐いて
そこからちっとも先へ進んでないからだろうけれど

間違えた水を間違えたなりにも飲んで生き延びてるなら
生き延びてるのを間違えてるに違いなかろうね
それとも生き延びてるのを間違えてると間違えるにしろ
どうとも生き延びてるのだけは吐く訳には行かなくて
なので水は向こうから遣って来るんじゃなく
常にこっちから迎えに行ってる事かな
その常な事が常に間違ってるなら間違ってようけれど
そんな常から間違ってるなら間違いに間違いは無くて
そんな間違いない間違いを間違えても間違えるだけで
そんな間違いを迎えに行かなければ命も立ち行かない
そんな常な繰り返しを繰り返すしかないのは
そんな間違いを間違えてると間違えてられるからでも
そんな間違いを間違えてられるからでもなくてそれは
そんな間違いを生き延びさせる間違い無さに違いなく
そんな間違い無さが繰り返し間違いを間違わせる訳で
そんな間違い無さこそ間違いない間違いにしない限り
どんな間違いも間違われ続けるしかなくに水は飲まれ
どんな水も間違いを間違えようがなく間違って水では

そんな水からちっとも先へ進めずに水を飲み已むなら
そんな水に拾われる命は始めから水に取られて命で
そんな水だけが有る何の間違いもない全てが間違いで
二〇二二年二月二十三日

跪いて深そうな狭い水溜まりを覗き込むと
真っ赤で
水溜まりじゃなく血を吐いたんだ　泡立ってるよ
なら楽しく晴れ晴れと先へ進めようけれど
と言うか今の今まで吐いた血で足元はぬるぬるしてたのに
水っぽい風なんかの霙混じりに吹き抜けたせいだろうか
嫌でも真っ赤でもぬるぬるな儘に漣の立つようかでも
冷たい手で緊く縁を抑えてる水溜まりでしか無くて
家なんかに住んでるせいだ
獣の目をぎらつかせてたら真っ赤に溜まれば必ず血だ
うかうかと家で背を丸めて絵なんて画いてるからだ

それで出来る事と言ったら春を縮める位だろうか
麗らかな陽など何時まで待っても来ないように
春の眺めなら幾らでも暗く短く画けるからね
（夏も秋も冬も元元暗くて巧く行かないよ
中でも夏の暗さには秋も冬も霞んで仕舞う
血を吐きたい奴は概ね夏を待ってようしね）
な夏を思い描きながらに春の眺めに
どぎつい白や黒の色をもりもり塗り重ね
肉厚に丸丸と盛り上がった春の姿は始めから
黒白な塊だけの私の姿をせっせと写してたようで
あぁ赤を同じ一塊にぶつけて遣る
なんて少しも思った訳じゃないけれど
真っ赤な雷を春の周りにぐるり巡らせれば
もやもやした誰かの姿なんて弾き飛ばせそうで
でも手は滑ってないなら血が出るまで唇を噛んだか
真っ赤な一塊が私の似姿に叩き込まれてる
でも唇なんて少しも噛んでないし
なら落ちた雷が黒白な頭に突き刺さって

頭だけじゃない黒白な身も雷は貫き股から抜け
それが足元に真っ赤に溜まって渦さえ巻き始めそうで
真っ赤は雷の色か抜き取られた誰の血の色か
まぁ血を吐く手間も省けたって訳か
な事で冷えた身を起こすと
何が真っ赤なのか
目の中を
白と黒に刺し貫かれては
至る処黒白な塊の誰な姿がぬるぬる粘り
已めさせるには血の色を血眼で探し回るしかなかろうね
二〇二二年二月二十四日

知らないとだけ知っている知らない言葉を知っている
そんな事だけで何とかなろうか
と知れようが知れまいが
その言葉を繰り返せば繰り返せるとは知っている

数えようとすれば三つで（繰り返されるのは常に三つだよね）
数えようとしなくて数えられて仕舞うなら七つかな
数えようとされて数えられる三つと
繰り返されてるからには自ずと数えられる三つと
その三つと三つの間に挟まるなら
そのどちらにも数えられなくてそれが数えようとされる
それは数で有るしかないかにも数かどうか知れない儘に
にしろ数えようとされて仕舞って数えられるしかなくに
もう一つで
合わせて七つ
でもそんな数えるなんて事は知らなくて構わないし
そんな事ならそんな事でそれより知りたいとも思えないし
思えなくて構わないとも知っている
そんな言葉を繰り返してさえいれば
言葉だけが浮き上がるようにクルクル回って誰も寄せ付けない
そんな事ならそんな事なのだが
それで済むかと言うと済むどころか未だ何も起こってもいない
と言うか起こる事など高が知れているので

何が済むとか当てにされる事なども要らないのかも知れない
と当てにされるされないに拘わらず
済まない事が済まない儘なのは動かせない
なのでクルクル言葉だけを回しているのも面白いんじゃなく
取り敢えず済まない事と済む事を篩い分けたくて為てる訳で
なのに済まない事がそれを妨げる
尤もそうして妨げられるお蔭で済まない事を見付けられる
とは言え見付けられたところで済まない事は済まない儘で
ただ済まない儘な事だとしか知られない
それに就いてそれより知ろうとしてもそれがそれを妨げる
まるでそれを巡ってでしか言葉もクルクル回れないかのように
さてそうなると
済まない儘な事は済まない儘な事だけで事を済ませるしかない
クルクル回る言葉はそれを促しも引き止めもしないけれど
済まない儘な事がそんな言葉を回して事を済まそうとするなら
言葉は黙ってクルクル回り続けるに違いない
だってそうして済まない事が晴れて済まされさえすれば
知らないとだけ知っている知らない言葉も要らなくなるからね

言葉は言葉から解き放たれる
な事が叶うかどうかはそうなってみなければ分からないけれど
下手にそんな望みに囚われるから済まない事は済まない儘かなど
そのせいで言葉も何時までもクルクル回る儘でしか居られない
のでも無かろうけれど
だって知らない言葉をクルクル回すなんて何時でも已められる
筈
なんだけどクルクル回る言葉だけじゃ何一つ已められないよね
だったら数えられる三つの言葉は三つで回ってるようなだけで
三つと三つじゃない七つ目のもう一つが怪しくて　この一つが
何一つ已められない処で独りでずっと回ってるしかなさそうで
済まない儘な事をあれこれと考えて済まなくなって仕舞うのは
この七つ目のもう一つを数えようとして
でも数えられなくて　でも已められないからかも知れないよな
ん！
とっ分かったなら
さっさとその七つ目を無かった事にして仕舞えば済みそうで
そしたら知らないとだけ知っている知らない言葉なんて

知らないか忘れるか頭に入らないか無かった事にも出来よう
そうして知ってる言葉だけで知らない誰かとも話しも出来る
但し知らない誰かに話しが通る知ってる言葉を知ってれば
の話しだけれど
でもそれで
済まない事が済まない儘よりもっとややこしい事になって
済まない儘な事が済まない儘でも済まなくなって
これは危ないぞとぐるりと一つ怪しい何処かで一回りして
知らないとだけ知っている知らない言葉を知っている
なんて事から　この話しが始まったのなら
知らない誰かに話しが通る知ってる言葉と
知らないとだけ知っている知らない言葉を秤に掛けて
どっちを取るかから　この話しは遣り直せようか
なんて事で済まされようか
二〇二二年二月二十五日

諍いの合間に
うっかり見えて仕舞ったものだけが
うっかり見えて仕舞っている
うっかり他に見えるものなど探そうなら
諍いの中へ巻き込まれてエラい目に遭うのがオチで
まるで
うっかり覗き穴を覗いたばかりに
そこから覗けるものしか見えなくなって
でもその覗き穴は他の誰にも知られてなくて
うっかり見えて仕舞ってるにしろ
それだけ見えてれば諍いを掻き分けては行けそうだ
とは言えこれは目の話しで
うっかり覗き穴を覗いてしか目はものを見られない
然もそれが誰にも知られない覗き穴で
然も何時もうっかりしてられる訳でもないなら
目に見えるものなんて酷く狭く限られて
見えたり見えなかったりだよ
これでは掻き分けても掻き分けても諍いばかりだね

なので
耳を澄ませるんだ
耳は目よりずっと
広く見渡し遠くを見通し深くまでを見透かせるよね
（覗き好きの目と違い声や音が耳に入るのが強みで）
それだけじゃなく
うっかりとも見逃したんじゃ命取りになるものにも
耳を届かせる事が出来る　と言うか
そんなそれを見付けその姿をくっきり見て取る為に
耳は常に欹てられ
そんなそれを必ず目の届かなかった処から掘り出し
直ぐにも取り除かなければ命も危ういって事だよね
とは言えこれは耳の話しで
耳が見詰められるのは取り除ける限りのものまでで
なまじ取り除ける程にくっきり見えるのが災いして
くっきり見えないものまでは耳も届かせられなくて
うっかりともうっかりでなくとも見損なうしかない
けれどそれは見えてたんだ

見えてたからにはきっと何かなものの姿で
目の覗く覗き穴の狭い奥の目の届かなかった処かに
耳にも届かないのを良い事に丸裸な姿でも晒すかに
なら
何がその見えてたものを見てるんだろう
目には光りしか見えないし
耳には声や音に聞き取れる事しか見えないなら
それを見えてたのは光りも声も音も知らずに
目の奥のそのまた耳の奥に匿われて
禍禍しかろうと取り除こうにも取り除けずに
それでも必ず見て仕舞うものを見て仕舞うようなら
それが見てるものだけがそれを取り除くしかなくて
その為にだけそれは見てるものを凝っと見詰める儘
その見てるものが襲い掛かって来る姿に変わるのを
飽きもせず今か今かと待ち望んでようか
とは言えこれはそんなそれの話しで
うっかりともうっかりでなくとも見えてたものとは
それを見てるそんなそれにそうと見えるだけの事で

それはそう見られる為にそこに有るのでもないなら
それが何の姿に変わるも変わらないも話しにならず
それは話しの外で何をしてるのかな
諍いの種でもせっせと撒いてようか
二〇二二年二月二十六日

嘘をすらすら声にするには先ずその前に
嘘でない事が嘘でない通りに辿辿しくも
うっかり声にされていなければ
声は何も言い出せないよね
だけど声に嘘でない事なんて言えようか
声が求められれば必ず目の前に嘘を見付けて
その目の前の事を有りの儘に言い出して
そんな嘘をしか声に出来ないんじゃないかな
（「これは声だよ」の声だけは嘘じゃないかも）
なので嘘を見付けられない人は口が利けない

（ひょっとしたら「これは声だよ」だって
そんな嘘を見付けて吐かれた嘘かもね
今から声を出そうとして見付けられた声は
もう嘘の声でしかないのかも知れない）
なので嘘を見付けられない人は声すら出せない
そんな人の（まるで思い及ばないけれど）
嘘を吐かずに幸せで居られるのを祈るしかない
ま　そんな人の事はそれとして
目の前の有りの儘の嘘をうっかり声にする声は
「この声は嘘を吐いてるよ」と
言わずもがなにも必ず言ってるのなら
その限りでは嘘は吐いてなくて
でもその声の次にすらすら嘘を声にする声は
「『この声は嘘を吐いてるよ』は嘘だよ」と
嘘なんて言ってないよって顔で嘘を吐いて
でその声はその嘘の通りに嘘しか言えなくなるけれど
元元その積もりで
つまり嘘をすらすら声に言い出す為に声にしてる訳で

そうなったらもう
嘘を見付けるも何も声に言い出せば何でも嘘になって
嘘塗れで有ればこその幸せを得られる
「幸せは嘘の中にしか無い」は
嘘じゃないので声には言い出せず
そんな嘘か嘘じゃないかを見付ける事も要らなくなり
ま　そんな人の事はそれとして
目の前の有りの儘の嘘をうっかり声にした人は
「この声は嘘を吐いてるよ」と
嘘は吐かなかったのに
その嘘を吐いてる嘘を吐かなかった声を嘘にされて
（それでもう声は
嘘にされる嘘じゃない嘘を探すしかないけれど
目の前の何処を探してもそんなの見付からなくて）
それっ切り目の前の嘘を声に言い出せなくては
口も利けないし声すら出せない
かと言うとそうでも無く
口が利けて仕舞うのを恨めしく思うしかない儘に

何処を探しても見付からない嘘にされる嘘じゃない嘘の
その見付からない事を声に出し続けるしかなくて
その声は嘘を吐くでも吐かないでもなく
何も見付からない目の前の姿に似てなくも無いにしろ
何も見付からない目の前の姿なんて何処にも見付からず
二〇二二年二月二十七日

箱を開けると土から生えたように
口を利く為の口だけが上を向いて
蜜のような涎それとも
涎のような蜜を滴らせ
口はその蜜の涎に埋まりそうに溺れそうで
喉の奥が覗けば強い限りな薬でも欲しがるように
脹らんだり縮んだりで声を欲しがってるに違いなくても
何の嘘も言い出せないでは声など望めず
疾っくに強い限りな薬が効いて

死んだ振りだけなら楽楽と熟せそうでも
もう一つの箱が開けられて
喉を尖った刃で刺された死んだ児に転げ出られては
死んだ振りなど何の効もなく走って逃げたいけれど
口だけでは為す術も無くて
死んだ児の姿を嘘に見立て
その見える儘の様を嘘塗れに立て続けに言い続けて
死んだ児を生き返らせたと極め付きの嘘まで辿り着けば
死んだ児なんてもう要らなくて
嘘塗れな声が薬の効き過ぎなのか掠れ声で言い立てられ
でも掠れ声じゃ嘘丸出しで嘘を吐いてる事にもならずに
なら声は途切れるしかなかろうに途切れずに
少しも嘘じゃない事しか言えなくなってないか
そんなの言える筈ないのにと
もう一つの箱が開け直されると
嘘を吐けない声を放り込むのにはぴったりかに空っぽで
かに見えて少しも空っぽじゃ無く
嘘でも嘘じゃないでも無い空っぽにしか見えないものが

さらさらと流れる水のように詰まってて
さらさらと流れる水のように声も愈愈掠れっ放しに
その箱から溢れるのとそっくりに喉の奥から溢れ出て
蜜のような涎それとも涎のような蜜のように口を塞いで
口は溺れて息の根が止まるしかなかろうに止まらずに
少しも嘘じゃない事しか言えなくなってる声なのか
土から生えた尖った刃のように上を向いて震えて
それだけがそこに児を刺したい姿で取り残され
そんなの声じゃ無いなら無いで震えながらに
嘘に叛いた報いかに強い限りに一つ限りな
嘘でも嘘を嘘には出来ない嘘とは異なる
刺せば刺す程に死んで甦る児のような
塵芥にも劣る穢いものが溜まってる
そこに泡のように湧いて出てよう
それでも嘘でなくては何だろう
二〇二二年二月二十八日

三月

嘘でなくては何だろう
とは誰の声だろう
とは誰の声だろうとは誰の声だろう
とは誰の声だろうとは誰の声だろうとは誰の声だろう
とは声を出せない誰かの声であるしかなかろうね
声を出せない誰かの声だけが
嘘でなくては何だろう
と息を潜めて押し殺されている
なら少しもそれは声じゃ無くて
なら少しもそれは嘘じゃ無くて
でも誰がそれに耳を傾けられるだろう
嘘じゃ無い声を出せない夜は短い
嘘じゃ無い声を出せない命は一夜限りに短いって

そうと決まってるからね
でも決まってるからには決まってるだけで
決まってるだけなからには必ず変えられる
抑も一夜にしたって嘘でなくては何だろう
でも嘘であるからには声を出せない誰かが
息を潜めて一夜限りの嘘じゃ無い命の声を
誰かの耳に届けようとしてようか
でもそれだって
嘘でなくては何だろう
とは誰の声だろう
とは誰の声だろう
とは誰の声だろう
な声などきっぱり振り捨てて
命は短い夜の中へ踏み込んで
な声とは異なる声を聞かなくちゃいけない
な異なる声は誰にも知れない処でしか聞かれない
死んだように眠るように箱に入って横たわるなら
そんな処へも辿り着けようか

なそこでなら　こっそりと
な異なる声は踊りながら語られる
仲間内だけで楽しみながら歌われる
仲間が何時誰に殺されたか
何時また殺されるか知れないか
血塗れの思い出は嘘も嘘じゃ無いも無い
な思い出と来たのでは　嘘でなくては何だろう
なんて疑いなど疑わしい程に疑わしくも斥けられ
なので歌って踊りながら
それ一つ限りに嘘では有り得ない命の遣り取りに
楽しみながら　その身が夢では有り得ない程に身を任せ
一夜の夢かに嘘も嘘じゃ無いも無くに
殺すか殺されるしか無くて誰にも知れない処で
殺すも殺されるも知れないかに全くそうするしか無くに
嘘と嘘の遣り取りなら嘘であろう筈も無い中へ
声など聞かず何を知れないも顧みず
楽しみだけを頼りに躍り込んで行く
命を一つそれ限りに

二〇二二年三月一日

食う奴は食われる奴なら食われる奴は食う奴
な事では少しも無くて
食う奴しか居ないなら食う奴しか居ないし
食われる奴しか居ないなら食われる奴しか居ない
な事かどうかも怪しくて
食うと食われると二つの事が有るのでは無く
食うと食われるは一つの事なら
食うも食われるも無い訳で
ただそれだけが一つの事として有って
そのそれだけとは
ただそれだけで有ろうとする奴が
ただそれだけで有ろうとするだけの事で
その為にそれはそれを食ってそれに食われて
それがそれを食い尽くせば

（それとも食い尽くしたところから始まって
食い尽くされて姿も無い奴の姿が現れたとか
尤も始めが何時かなんて鶏と卵でしかないが）
それはもうそれに食われようも無いのなら
それはひたすらそれで無いものを食わなければ
それの儘では居られなくなる
（…それともこうも言える
腹さえ食い尽くしても口は残る
口を食う口は無い
その口だけが食うのならその口は食われない
口は口で有る為に独り果てなく食うしかない）
そんな
始めからずっと変わらずにそれの儘なそれで
それはただ辺り構わず食える物を追い続ける
食われる奴など食う奴の為の幻と変わらない
いや
恥ずかしげもなく
つい分かってるような口を利いて仕舞ってる

抑も
二つの事を知れるのは一つの事しか知れないからで
二つの事は一つの事でさえないなら　事でさえ無い
上っ面に騙されるな
と言えるのも
一つの事でさえない二つの事しかないとしか知れないからで
ここは見知らぬ果てであり（食うだけの口にとってと同じに）
そうと知れればその一つの事しか知れなくて
でもなぜそうとしか知れないかは謎だろう
謎を知ってる奴だけが何も知らない
だって謎なんて知れないどころか有りもしないから
なのでお前が
食うだけの口だろうと口を利くだけの口だろうと
それしか知れない一つの事の幻を追ってるのに変わりはない
けれどこれも分かってるような口の口に違いない
同じ口で有るからなのか　却って
食う口とは何一つ分かり合えずに
二〇二二年三月二日

東風に選ばれた森の匂いに惹かれていた
奥深さが怖くて森へ入った事も無いのに
なぜかその遥か森を見渡す眺めは目に浮かぶ
それともそんな森に心を囚われるのはなぜかって
それを知ろうと森の匂いを片時も忘れられないのか　せめて
その手掛かりを森の匂いに求めずには居られずに　でもなぜ
そんななぜなら森は森だからとしか答えは無さそうにしろ
そんななぜさえ消えて仕舞った
そんななぜさえ消えて仕舞って
なのにこの世は何も変わらず消えて仕舞わないのはなぜ
だなんて　ただ言葉を弄ぶようでも
なぜがなぜかを綾なす綾に巻き込まれ
だけどそれって森より奥深く怖そうだなんて
どう間違っても考えたりしちゃいけないよ
何も変わらない消えないこの世なら

何も変わらない身を身の程に携えて
何も変わらない消えないこの世の行き果てよう処まで
消えて仕舞った森の匂いを探しに行くしかなかろうね
けれど
森の匂いの失せて
何も変わらず消えもしないこの世とか
何も変わらず消えもしないこの身とか
森より奥深く怖そうだなんて考えようと考えまいと
何も変わらず消えもしないのは　ただ
変われなくて消えられないからだよね
変われなくて消えられないなんて嘘に決まってるよ
嘘でないなら嘘でさえなくて
嘘で嘘でない森の匂いだって香らせられようかね
あぁ　まるで違うんだ
こんな言葉を弄んで何になるんだって言いたいけれど
いや　そんな事を言っても言わなくても何も変わらない
だったらこの言葉からして嘘塗れで
嘘塗れだって言う言葉だけは嘘じゃないにしても

な嘘じゃない言葉に微かに森の匂いを嗅ぎ取れるにしろ
な匂いはその匂いな限りまた消え失せるしかないのなら
それでもまだ嘘じゃないと言い張る言葉などまるで嘘で
その嘘が嘘を綾なす綾に身を投げ入れ
な身では身も嘘に違いなかろうけれど
な嘘を丸ごと森の匂いに変える嘘に賭けるしか
失われた森の匂いを失われた儘にでも甦らせる術は無さそうで
二〇二二年三月三日

言葉は卑しく卑しさは卑しい儘に絆になる
な絆などが犬に喰われたとか言う噂が
明るみを誇る風が巻いて届いたらしい
もう夜へ戻れないのもそのせいなのか
言葉の卑しさが闇を遠ざけ夜を失わせたか
それとも夜など始めから無かったに違いない
始めに夜が有ったなら必ず戻れる途は思い描けように

ま　失われたにしろ始めから無かったにしろ
戻れない夜なら戻るしかなかろう
な為に始めからずっと夜は有り続けた筈
今ここで夜が生まれたかに
と何処を顧みようと見回そうと夜など見出せる筈もなく
小鼠の群れのような光りの粒を数知れず道道に走らせて
行く先は昼の明るみばかりに埋め尽くされているけれど
行く先って何処？
確かに片脚は踏み出されていようけれど
その儘力無く何時からかずっと固まって
とは言え踏み出された片脚の向きに
小さな家と庭と庭木とがすっかり光りに侵され
白く輝く縁取りに囚われて
見えている儘にこちらに背を向けるかに
戻って来るのが遅過ぎるのを恨んで
儚げな憎しみを力無くもありありと表してよう
にしろ近寄れず行き過ぎられず掠め去れず
うっかり裏手へ回り込もうなどとすれば

目が合って仕舞うのは誰と誰なんだろう
その誰と誰は光りに侵される家に辿り着くまでは
同じ一人だと思われてたに違いなくて
でも目と目を合わせて仕舞っては
一人は夜へもう一人は夜の外の光りの中へと
互いに互いから逃げ去るしか無かろうにしろ
逃げ去るしか無いなら逃げ去れずに謀を巡らし合っては
どちらがどちらへ戻るべきかを巡って
命の遣り取りでもしてそうな目付きで一言も口を利かず
そうして居ればずっとそうして居られるかに
その儘に消え果てるしか無かろうか
いや
幾ら黙り合おうと黙る訳を分かって黙るなら
再び言葉の卑しさの絆に望みも繋げようかな
黙り続けるのも卑しさの内なら口を利いてるも同じだろ
とも割り切れば跪き疲れた身を投げ足元の土を舐めては
家の裏手に拡がる光りばかりが沸き立つ見知らぬ眺めへ
見知らぬ眺めなら深く馴れ親しんだ眺めにも違いなくに

二つの骸から激しく目を逸らして懐かしく思いを馳せる
こんな事なら忘れてただけで何時かも繰り返してたかに
懐かしさの明るみこそ夜を奪う謀を企てたとも誇らしく
二〇二二年三月四日

そこに見えるからって海を見詰めたりしてたのが間違いで
海なんてうっかり目に入ってさえ危ういよ
それも何時だって別れ別れに二人揃ってと来ては尚更にね
それは海は必ず馴れ親しんだ顔を映してたろう
まるで海の顔みたいに
でもあんなのは慣れ親しむ程に誰の顔でも無かったのさ
目に入る限りの海の眺めは何処からでも
海のほんの端っこを覗かせてるだけで
海をすっかり丸ごと見たりは出来ないんだよね
目に入る限りの海の眺めなんて
有りの儘の海の姿とはまるで違ったもので

そんな見える筈の無い海の姿を
見えないなりに見えてるかに見て見損なってるだけさ
でつい凝っと見詰めたくなったりして　見詰めてれば
海をすっかり見てる積もりになったりしては
そう分かっててさえ危ういに決まってよう
でも病み付きなようではもう逃げられず
いや　少しも病み付きなんかじゃない
もう始めから決まってた事みたいに
だって海を見詰めて仕舞うのって
何時だって必ず二人なんだから
仲良く骸を二つ並べるしかないみたいに
必ず離れ離れに　互いに互いを知らない儘に
同じ処から同じ海に映る同じ顔を見てるのに
二人はまるで見ず知らずな間柄で
なせいで目に入る限りの海の眺めに囚われる切りで
あぁ　なぜ骸を並べるように二人なのか
見える筈の無い海の姿が二人を二人にして仕舞う
海に囚われる限り二人は二人に囚われるしかない　いや

見ず知らずな間柄かどうかだって知れやしないね
何も知れない位に恐ろしく互いを知れ合ってるかも知れない
だって二人なんて全く一人なんだから…と言いたくもなるし
全ては一人に起こる事が起こっているだけなんじゃないのか
な事では
別れ別れになのに一人一人じゃなく海を眺めるしかない儘に
もしそんな二人がうっかり海辺で顔を合わせたら
きっとどちらもが互いの命を奪うしか無かろうね
な互いの命と言っても一人の命でしか有り得ずに
二〇二二年三月五日

白が選ばれる為に選ばれた白は白に囚われ
白を逃れられない　だって白だから
な白に宛行われたのは鎖と藪と溝で
鎖は食う為　藪は清かに息を吸う為　溝は孰れ溺れ死ぬ為
な白に魂は有るのか

とはまた何とも愚かな問いで
なぜまたこんな愚かな問いが問われなければならないかが
なぜまた今更に愚かにも問われなければならないのか
どうなのか

忘れた
忘れて取り返しが付かなくて問わなければならなくなって
ならば忘れた事が事の全てなようで
忘れられたからそれは白でしか有り得ないのかも知れない
いや　一つ思い出したぞ
白は白と呼ばれるより早くから白と呼ばれてて
白も白と呼ばれて白と呼ばれる身を賭けるかに
呼び名に応えてたって
なら白の魂は白なのか
とはまた何とも愚かな問いで
とは言え何とも愚かなのは何だろう
問いばかりが愚かなら分かり易いけれど
白の魂の白が問いを撥ね除けるなら
愚かさは行き場を失い問いは愚かでさえ無くなり

おろおろと白の魂に縋ろうにも
おろおろと問いでさえ無くなり
白で有るしかない白には白の魂が
その忘れられた事など何の事でも無くに
鎖と藪と溝を縁（よすが）に独り消える事なく
その魂にそっくりな姿を
その魂にそっくり映して
あぁ　そんな白では何がどうなんだろうね
と問いたくて問えなくて問い損ねた問いの欠片などが
白の魂の姿に圧し潰され
白の足元の白い土にでも埋もれて行くようなら
せめてその白い土に跪き
白の姿を抱き留める振り位なら出来ようか
白い土に口付けする真似なら出来ようかね
とはまた何とも愚かな問いでしかなく
白の姿に撥ね除けられるしかなかろうけれど
白はそうして係わるものの全てを撥ね除けて白い姿だったか
ともまた何とも愚かな問いで

白など仮の現し身でしかなく
いや　それも違おう
な白を白としか知れないのが許せなくて
な白としか知れないのはなぜ？と問うしかない誰かの目に
そのきっと虚ろなばかりで白くもない姿が
その魂まで呼び出して白く映るだけで
二〇二二年三月六日

白など探してた訳でも無いのに白が見付からない
見えて来た向かう先が白ばかりだからに違いない
見えて来たら向かう先へ辿り着けないと分かって
辿り着けなくて向かう先は愈愈白むしか無くにも
その白に目は弾かれ見付けたい白を見付けられず
目に映り込む白ばかりの眺めの白は見る見る穢れ
知らず足を引き摺るなら凭り掛かるしかないのは
波打って南へも北へも傾いて穴だらけの壁の端で

いや波打つも穴だらけも壁の染みに映る白の影で
壁を食み出た白の影の一筋を片手で掴んでるだけ
な身では壁の縁へ倒れ込むしか無かろうな姿なら
倒れ込むけれど足を引き摺る身とは係わり無くて
足を引き摺る儘にも佇むように傾く身を立て直し
壁の縁の直ぐ奥へ消えた姿を瞼に硬く留め置けば
目に映り込む白ばかりの眺めの白は白を抜かれて
穢ればかりの眺めは見付けたい白に塗り込められ
な眺めは何が失われたかだけを晒し更にまた穢れ
な穢れた白の穢れに晒されるのは暈けた人の姿で
な姿だけが白を弾いて色も拒み穢れた眺めに独り
眩しい白に塗れても白と係わらないかに鈍く輝き
穢ればかりの眺めを浄めてさえ行きそうに佇んで
な自らを危ぶむかに曇る顔を有らぬ辺りへ向けて
その目を白ませてさえきっと探していよう
もう一人居る筈の同じ姿を
あぁそれならここに居るんだよと声を掛けようにも
向かう先へ辿り着けなくては声も逸れるばかりかな

な声の行方を追う誰の姿も
白んで白しか見ない目には打ち消されよう
そのもう一人を探すのは
そのもう一人でしかなさそうで　なら
もう一人でもなく
にもただ一人でもなさそうにも
そのただ一人の姿を穢ればかりの眺めに添わせては
それでも一人じゃないのを一人で確と分かってれば
そのもう一人の姿を繰り返し掠め見ては居られよう
二〇二二年三月七日

穢ればかりの眺めに目は馴れるにしろ
穢ればかりの眺めを血が耐えられない
穢ればかりの眺めの中の血という血が
穢ればかりの眺めから少しでも離れようと空へ昇ったか
な真っ赤な夕陽を浴びて古い泉は火の熾るようで

穢ればかりの眺めの中をその湧き水が淀めば
西の空に流し込まれた血の色に映え真っ赤で
いや
湧いて出ているのは水じゃなくて火なんだよ
その一元の火によって
空を覆って淀む血という血の重みが支えられてようね
これは今に始まった事じゃ無く
目なんて火と水とを見誤る位の事しか出来ないんだな
にしても火と水が目を欺くからで目は責められないね
目なんて当てにならないなら耳を澄ますしかないよね
だって耳を幾ら澄まそうとも何も聞き取れないからね
耳なんて何の使い途も無いからこそ耳を頼るしかない
何の使い途も無くて耳は耳の重みだけで耳で居られる
な重みだけの重みだけなら
火に支えられる血という血の重みとも向き合えよう
血という血の重みだって何の使い途も無かろうから
二〇二二年三月八日

目は水に溶けて仕舞ったかな
目は水に溶けても目で居られるなら流れに流れて
その目に見えるものだけなら見続けてられようか
知らない
知らないとも知れない
でも
耳は耳の重みを燃やし
耳の重みに燃える根を深く張って
その重みの燃える音ばかりに耳を澄ませてようか
そうして
何の音も聞こえて来ない中を覗き込めば
その底に血という血が蟠り行き先を見定められず
己を見出せず自ら行方知れずなような振りをして
でも穢ればかりの眺めからは逃れようも無かろう
穢れに似せた淡く柔らかな影に血の色を濁らせて
ならもう行く先は確と見定められてよう

けれど
耳の重みの燃える根が重しになって
凝っと動かず黙り込んでるのはなぜ
「確と見定めた行く先なんて間違いなく何処でも無いからさ」
それが血という血の蟠りの耳に届く答えにしろ
耳はそれの何をどう聞き取れようか
と
それを遠巻きにも眺めてられるのは水に溶けた目しか無くて
直ぐに何処へか恥じ入るように流れ去っては行こうけれど
何処へ？　なら
確と見定めるなんて事は要らなくて必ず何処かでしかない筈
な事など耳は知らないとも知らなくて
血の濁る色が耳の重みと重なれば
その真上と真下に火柱の貫かれる姿なりの幻にさえ耳を塞ぎ
血という血の重みの燃えても尽きない熱さに耐えようと
血という血の重みの火に比べればずっと冷たい耳の火で
耳の重みだけは燃え尽きないように
何処でも無くはないそこで根を張る儘に居るしか無かろうね

二〇二二年三月九日

世の光りは世の光りだけで満ち足りている
なので他の何も少しも求められていない
要らないお前がうっかり姿を現しても
瞬く間に光りに溶けて消えるだろう
但し一つだけその消えた痕を残す
置き棄てられたように汚れた耳で
それとも耳の姿も消され耳の重みだけかに
頑なに何も聞こうとしなかった報いかに
にしろそれを見る目は光りに溶け跡形も無く
耳の重みの在処は耳の重みにしか知れない
かどうかも誰に知れよう　抑も
耳の重みは耳の重みを耳の重みと知れようか
と言うか
耳の重みは耳の重みだけで耳の重みで有り得ようか

有り得たとして何の為に？
かどうかも誰に問えよう　抑も
お前の消えた痕が一つ残っているだけだろう
それを耳の重みと知るにしろ
で耳の重みの何が知れたのかな
それが耳の重みにしろ中身など
その何ぞとも知れない謎ばかり
その何ぞな謎が重しで重みで
な重みに耐えられるのが耳しか無くて耳の重みかも
と何も聞こうとしない耳の謎が少しは解けたようで
耳は謎の重しを重みと受け取る為に耳だったのかな
でもその謎だって耳の重みの謎と来ては
始めから終わりまで耳の事でしか無かろうね
だったら世の光りは世の光りだけで満ち足りているなんて
まるで怪しくなって
世の光りからして少しも求められていないのかも知れない
要らないお前がうっかり姿を現しても瞬く間に消えるのは
それは世の光りに溶けるからじゃなく

耳の重みのせいで何の姿も許されないからで
耳の重みには世の光りさえ要らないなら
耳の重みからは何を眺められようか
二〇二二年三月十日

白だけが形で
としたら白の他は全て闇で
にしても闇も闇なりに形なら闇は白いかな
と闇が白いように
海辺からの海の眺めは白い
黙りこくる海の頑なさを映すように
な海は何処から来たのかと問えば直ぐに
白から来た
と決まってる答えが足元から湧き上がり
白い砂浜が海の先の岬まで続くなら
それでもまだ深い水の色でも揺らめこうなら

海は形を失い
白より外の闇に埋もれた辺りに沈んでように
海の姿は幻かとも
それでも
海辺からの海の眺めは白い
黙りこくる海の頑なさを映すように
な白は何処から来たのかと問えば直ぐに
白から来た
と決まってる答えが白から湧き上がろうね
それはつまり
そこに白はずっと始めから白で
そんな白は何処から来たのかと言う問いが後になって
何処かから遅れて遣って来たって事で
問われるとすれば問われるべきなのは
その遅れで
（…何処からかなら白で無い処からに決まってるからね）
その遅れが
形を失っても白い眺めの儘の海の姿になって

岬を潮は静かに回り込み広広とした砂浜を侵して削って
誰かを海辺に佇ませるらしい
確かに遅れもまた一つの形なら
誰かにしたって遅れて来たせいで海辺に佇む姿で居られようし
誰かを含めた海辺のこの眺めには何の欠ける処も無さそうだし
いや違うよね
遅れもまた一つの形なら
海と誰かの姿は白いだろうか
この眺めを一つに繋ぎ止め海の頑なさを幻にしない為に
重しのように横たわる岬は果たして白いだろうか
とまた更に遅れた問いが問われようね
その問いの形をした白が
誰かを含めた海辺のこの眺めを全て白に塗り込めて
形ばかりで形の他には何も無い
そんな眺めが眺め直されるなら
この眺めには何の欠ける処も無さそうにしろ
形に棄てられ答えのない答えばかりが
重しのように横たわってそうで

二〇二二年三月十一日

知ったか振りな顔付きで
倦まず弛まず血豆の足を引き摺り
絶え間なく淫らな言葉を吐き散らしてる奴
姿は見るに耐えない
声は聞くに耐えない
姿は火を吐く（生かすからには殺す火）
声は水を吐く（生かすからには殺す水）
奴だけが易易と火と水を操って
生かして殺す技を軽軽と身に付けている
だなんて言い草は
知ったか振りも出来ず足を引き摺った事もない奴の
まやかしに違いなくても
この世はそんなまやかしに溢れていて
だって奴の他の誰もが

そんなまやかしに塗れてるのが快くて
そんなまやかしに命を奪われるかも知れないけれど
そんな危うさこそ痺れる程に快くて堪らない
だなんて言い草こそ
知ったか振りも出来ず足を引き摺った事もない奴の
まやかしに違いないぞって
まやかしから逃げようと思えば思い通りに
まやかしの外へまで逃げ切れようけれど
まやかしの外がすっかりまやかしに取り囲まれてるんじゃ
まやかしの中の危うさに身を晒してるよりもっと危うくて
だって
まやかしの外じゃ
まやかしの中にこっそり身を潜めても居られないどころか
まやかしに直に直ぐにも命を狙われて逃げ場はないよ
何でこんな事になったのかって元はと言えば
奴だけが易易と火と水を操って
生かして殺す技を軽軽と身に付けている
な奴のせいなら何が何でも奴を呼び出し

まやかしを焼き殺す火と
まやかしを押し流す水と
渦を巻くそんな火と水の助けでも借りて
逃げ場のない処から逃げる話しを纏めるしかないかな
後が怖いのなんて分かり切ってるけれど
もう何のまやかしも利かないのは却って望みで
奴が独り占めしてる生かして殺す技の火と水の謎にしても
必ず何処かに曝け出されてるのが見付かる筈さ
だなんて言い草は
知ったか振りも出来ず足を引き摺った事もない奴の
まやかしに違いなくても　ただのまやかしに違いなく
二〇二二年三月十二日

人は人を殺し
そしたら黙ってたって人は人に成れる
互いに人を人と認め合える

なので人を殺さない人は未だ人ではない
人にとっての神の始めの言葉は
殺せ！　の一言で
例えば
犬にとっての神が居るかどうかは人には知れないし
その犬の神が犬に言葉を語るかどうかも人には知れない
けれど　もしそんな事が有って
犬にとっての神の始めの言葉も
殺せ！　の一言だったにしても
犬はきっと他にも色んな声や音を聞く耳を持っていよう
時偶始めの一言を思い出して殺し合うかも知れなくても
それは何時もは他の言葉に紛れて大人しいもんだろうね
ところが人の耳と来たら　人でなしでもない限り
犬には聞こえる色んな声や音はさっぱり聞き取れなくて
ただ
殺せ！　の一言しか聞き分けられなくて
手っ取り早く殺せるのは同じ顔した隣に居る奴って事さ
問い‥人とは何か

答え‥人は隣の人を殺して人として生きられる生き物である
けれど
同じ顔した隣に居る奴さえさっさと殺せるのなら
他の生き物を殺すのも訳ない訳で
問い‥人とは何か
答え‥人は何をだろうと辺り構わず殺すだけの生き物である
直に手を下そうとは思い定めないだけで
のべつ
殺せ！　の神の声ばかりにうっとり耳を傾け
それに従ってだけ心穏やかに何時もの通りに
どんな人も人で居られる人なのであった（笑）
二〇二二年三月十三日

忘れられないなら忘れようとされるけれど
忘れられては忘れられようとされなくて
忘れられたって消えて無くなる訳でもなしに

忘れようともされないのでは
足を引き摺ってる癖に引き摺ってないような振りで
血豆の血にモノを言わせる羽目に陥って
血なら何のモノを言うかって
耳を傾けられるならまだしも
（だって血は
聞きたくもない忘れられてた事を喋り散らかそうから）
耳を背けてるとも知らずに
モノ言う血を黙って遣り過ごしたりするものだから
黙った儘ではそれは
言葉では歯止めが利かない羽目に陥って
何を忘れられてたかを忘れようとされない儘に忘れ直し
なのでそれが何なのか
血に聞くしかない血の声がさっぱり聞こえないでは
聞こえるまで血を追い求めるしかなくなって
まるで血に嘲笑われてるかなら血にさえ叛き
聞こえないなら見える筈もない火と水とかの
渦を巻いてるに違いない中などを突き進んで

そうして生かして殺す技を軽軽と身に付けて
更にその技に浮き浮きと磨きを掛けられよう
で　どうしよう？
あぁ　その
で　どうしよう？　が欲しかったんだろ
で　どうしよう？　だけが
忘れられたって消えて無くなる訳でもなしな
そんなそれさえ消えて無くして見せて呉れようからね
そこには
忘れられないより前の
忘れられたよりもっと前の　そんな
より前のもっと前も始めから見当たらない
その喋り捲る声が聞こえに聞こえる火と水と血などが
そっくり同じ形（なり）で湧き上がって已まないかな
込み上げる笑いに何時までも身を任せてられて
もう小賢しい何の技さえ要らないよね
二〇二二年三月十四日

笑いが込み上げて已まないのは偏に
何も変わらないのを目の当たりに出来てるのが嬉しいからで
何も変わらないなら時など要らず始めも終わりも要らない訳で
心が塞いで仕舞うのは全てそんな時の流れに打ち拉がれるせいで
そんな抗いようもなかった時を払い除けてられるのなら
それは可笑しいばかりの眺めが眺められるって事かな
で　そんな眺めの中に誰もが放り込まれ
何時もの事なら時をそろりそろりと手繰り寄せるかして
何時もの何もない時を取り返せようけれど
行き成りに時は引っ剥がされ血祭りに上げられ
可笑しいばかりの眺めしか眺められないのでは
誰もが等しく時の外で　それとも時を踏み付け
てんでに踊り出そうけれど
てんでにしてはどれもそっくり同じ踊りで
だって誰もが同じ笑いしか笑えないからね
誰もが同じに笑えて　同じ笑いから逃れられないなら

誰が蔑み蔑まれようと　もう上も下も無くて
（今は亡き何時もの静かな穏やかな時の罪が暴かれたって訳だ）
なので誰もが誰をも蔑み蔑まれる儘に終わりは見えずに
どっちを向こうと向かされようと蔑み蔑まれるばかりでは
どっちを向くもなく果てもなく果てもない向きなら向けよう
そっちに何が見えるかって？
だから
時の流れが及ばなくては古くも新しくも為らない
何も変わらない眺めの中で心は躍る
な心を何が躍らせるのか
込み上げる笑いの尽きない先にそれははっきりと
それ一つ切りに目眩いてうっとりと
変わり続ける筈の世が何も変わらないなら却って
儚い現し身は根刮ぎ変われよう望みが沸き立って
のっぺり誰もが誰もの心を蕩かし渦巻いてようね
二〇二二年三月十五日

二人しか居ないのなら首を刎ねられるのは二人の内の一人で
どちらかは始めから決まってる
その決まってる一人の為に首は刎ねられる事になったのだから
とは言え　どちらの首が刎ねられるかは
首が刎ねられてみなければ分からない
そんな事もある　と言うか　そんな事しか無かったりする
なぜかと言うと（当たり前だが）この話しには
二人の他に首を刎ねるもう一人が居る筈だからで
そのもう一人が二人の内のどちらの首を刎ねるか決めたにしろ
その思い通りに首が刎ねられるとは限らない
なぜなら二人は姿形がそっくりで
思い違いやら行き違いやら色色な事が起こる
で
首が刎ねられ
その首から飛び散った血は何を語ろうか
その首が二人の内のどちらの首か分かろうか
その首は取り違えられたもう一人の首では無かろうか

うーん　どうもはっきりしない
そんな事もあると言うか　そんな事しか無かったりする
首を刎ねられなかったもう一人から直に話しを聞けようか
で君はどっち？
「さあね　でもそれを聞いてどうするの？
もう首は刎ねられて仕舞ってて一人しか残ってないんだよ」
君の首を刎ねると決めてたなら君の首も刎ねないと
「ぇまさか　首を刎ねられるのは二人の内の一人だよね
一人しか居ない一人の首を刎ねて何になるの？」
君の首を刎ねると決めてたなら君の首も刎ねないと
「何を決めたか知らないけれど首を刎ねられるのは断るよ
それでも首を刎ねようって事なら逃げるしかないね」
君の首を刎ねると決めてたなら君の首も刎ねないと
一人だけの君にはもう逃げられる処なんて無いよ
逃げられるのは二人の内の一人で居られる内だけさ
二〇二二年三月十六日

強いから勝つのではなく勝つので強い
弱いから負けるのではなく負けるので弱い
どっちがどっちかは終わってみなければ分からない
勝つとは負けた者から多くを奪い取る事であり
戦いは必ず始めから勝つ者の為の戦いでしかない
この勝つ者の為の「始めから」が勝つ者の為の正しさを請け合う
勝った者の正しさが
負けた者から多くを　或いは全てを奪い取る
なのでその正しさは
負けた者からどれだけ奪い取れたかによってしか計れない
勝った者がその自らの醜さを知るなら
そんな醜さは戦いが終われば無かった事かに消される
勝った者がその醜さを知りもしないのなら
正しさは始めから美しい（負けた者はそれを黙って受け容れる）
勝った者は美しさを自らの正しさの内にしか見出せないから
（いや
それこそが醜さではないかなどと言ってみたところで

それは負けた者の虚しい言い草でしかない）
とは言え戦いに於いては正しさは常に醜く
であるなら誤りは常に美しくなければならない
（つまり正しさの醜さの為に美しさを強いられる）
勝ち負け即ち奪うか奪われるかが全てなのだから
嫌でもそれは二つで一組なのだから　逃れようはない
なぜ負けるのかなら
正しさの醜さを呑み込む強さが敵より劣っているからで
弱さとは正しさの醜さを貫けない事とも言える
正しさの醜さに耐え切れず
何処かで見ず知らずの美しさへ逃げ込んで仕舞う
そんな美しさが奪い取れるのは美しさの虚しさだけで
全てを奪い取る正しさの醜さからは何一つ奪えない
二〇二二年三月十七日

正しさの醜さを醜いとは見えないどころか

美しいとさえ見えて仕舞えば
この世は浮き浮きと楽しくて
その人は必ず勝ちを収め易易と暮らして行けようね
けれど
正しさの醜さを醜さとしか見えなければどうしよう
正しさの為に正しさの醜さを受け容れられようか
勝ちを収めるには他に途はないと分かっていても
けれどそうしてみたって
正しさの醜さを美しいとしか見ない敵には敵わない
それでも戦うのなら何と戦うのかな
正しさの為に正しさの醜さを受け容れてるようでも
そうじゃなくてもう
誤りの美しさに誘われて
その美しさの為に戦ってないだろうか
いや
こんな話しは何にもならない　だって
どっちがどっちかは勝ち負けが決まるまでは知れないから
正しさの醜さに負ける前に

うっかり誤りの美しさの誘いに負ける事も有りそうだ
ただ
必ず負け続けるという人も居て　きっとその人は
正しさの醜さを醜さと見た切り目を背ける事しか出来ず
戦う前から誤りの美しさへ逃げ込んでようね
そんな事では
正しさの醜さを美しさと取り違え
喜び勇んで浮き浮きと
その醜さの美しさの醜さに身を任せ
なので醜さも美しさも始めから忘れてるようなもので
正しさとだけ戯れ遊んで
そんな自らに酔ってられる敵に敵う筈は無いよ
二〇二二年三月十八日

危うい事が積み上がって
な危うさの積み上がりは危うさが直に崩して遣り直し

でまた危うさが懲りもせず燻るように積み上げられる
さてこんな事を続ける事は危ういのか危うくないのか
危うさの極みは危うさを遠ざけ危うさを忘れる事で
当たり前に楽しく暮らして心が弛むなら
これ程に危うさに身を晒す事はないよね
寧ろ
日頃から危うさを積み上げては崩し
危うさと戯れて居られるなら　それは
危うさを手元に置いて操っている訳で
危うさが思いも寄らず脹らんで
手が着けられなくなるのを取り敢えずは防いでいよう
なので
当たり前に楽しく暮らして心が弛むのは
その儘に驕りであり
必ず何時かその報いを受け心は踏み躙られよう
その何時かを賢しらに引き延ばしも出来ようけれど
とは言え
誰がその驕りから逃れられよう

危うさを積み上げては崩してるのも
その驕りが危うさを甘く見て心は弛み
危うさを出し抜いて賢しらに危うさを操れば
危うさを突き破る事だって出来るかも知れないぞ
とかそんな驕りを更に高ぶらせてるだけで
二〇二二年三月十九日

人を人殺しと決め付けるお前が人殺しなんだよ
て事はそう言ってる奴も人殺しな訳だが
と言ってしまえば身も蓋もなくて
だったら人殺しは相身互い
さっさと人を殺し合えるよう皆で努めましょう
で話しは終わって
憎むべき敵は叩き殺すしかない
しかし敵とは誰か
ほぼ鏡に映る自らの醜い姿ではないか　つまり

自らの姿を映す鏡を叩き割ってる訳だ　で
醜い姿を映せる鏡は取り敢えずは失われた
とは言え
そんな鏡は至る処に見付かって次次に手に取れる　で
その度に敵を叩き殺しては行けようけれど
醜いだけの自らの姿を殺し続けるのは辛い
そこで
「汝の敵を愛せよ」
しかし敵とは誰か
ほぼ鏡に映る自らの醜い姿ではないか
さてそんなものを愛せるか
汝の敵が汝を愛するなら乗れる話しかも知れない
しかし自らの醜い姿に愛される自らとは？
自らの醜い姿に耐えられるのは
叩き割れる鏡に映る限りだろう
そんなものが鏡から抜け出して
そんなものに愛されてどう遣って遣って行けよう
汝を愛する汝の敵など居ないし居て欲しくもない

とは言え殺し続けるのは已めるには
「汝の敵を愛せよ」の他に途は無さそうだ
すると鏡に映るのは
「汝の敵を愛せよ」に耳を貸さない自らの醜い姿である
それが敵である
そんな敵は殺さなければならない
そんな敵なら幾らでも喜んで殺せよう
殺せば殺しただけ「汝の敵を愛せよ」に近付けるのだから
さてそんな事で
「汝の敵を愛せよ」とは
「汝の敵を愛せよ」に逆らう敵を殺す為の言葉だった
「汝の敵を愛せよ」を心に留め置けば心置きなく敵を殺せる
「汝の敵を愛せよ」によって心は守られ要らぬ憎しみからも解き放たれる
「汝の敵を愛せよ」は常に敵を求めて戦いの場を駆け回っている
二〇二二年三月二十日

殺し合いに酔えば罪も消せるかに
担ぎ上げ褒め称え煽り合う
命が差し出されない限り
何も始まらず行われず終わらせられない
語り得る事は戯れ言でしかないが
戯れ言と分かって居ればこそ
戯れ言は無くてはならず
命は差し出され続け
そうして戯れ言に酔ってれば罪も消せるかに
そんな旨みに味を占めた奴らばかりで
担ぎ上げ褒め称え煽り合う
殺し合いを楽しもうが忌み嫌おうが
罪から目を背ける為の旗は掲げられる
旗の下に集まって叫ぶなら罪も消せるかに
な事より
誰の命が誰に差し出されたのか
誰が奪い取り奪い取られたのは誰か
孰れそれは炙り出されようけれど

炙り出されたところで後の祭りで
誰が嘆き悲しみ誰の高笑いが止まらないにしろ
その誰をも操る神が始める力を持ってるにしろ
神が終わらせる力を持つかどうかを誰が知ろう
神にも知れないか神の知る事など知れないかで
そんな神の為の祭りに酔えるのは一夜限り
そこで屠られる命ならさぞ尊かろうけれど
来る夜も来る夜も殺し合いは続いて行けば
屠り続けられる命はゴミであり穢れであり
そんなものを喜んで追っ掛けたがるのなんて
屍を金に換える遣り方を知ってる奴らだけで
そんな卑しい生業を見下す浄らかな人達には
始めから穢れたゴミなど目にも入らないよね
じゃどうするかって？
次の祭りの夜まで待てようか
残りの時なら神は計れようか
二〇二二年三月二十一日

棄てられた名を拾おうなんてのは
穢らわしい嫌われ者しか居ない
だなんてのは
拾われた名をしゃぶり尽くす為の
そんな事をのべつ言いたがる奴らの何時もの喩えで
その為に穢らわしい嫌われ者が指差される
な事で
名もまた喩えでしか無くなれば
喩えが容易く裏返されるなら名も容易く裏返り
名を与えられた者は裏の名に執濃く付き纏われ
先行きも知れず転げて行くしかない
だなんてのも
嘘と真を裏と表に擦り替える奴らの何時もの喩えで
けれど
嘘も真も裏も表も
先行きも知れず転げて行く為の手立てでしか無くて

とは言え
そんな手立ての他に何の遣り方も無かろうか
なので名は棄てられ
それを拾う者は穢らわしい嫌われ者しか居ない
な事にされて仕舞うけれど
だなんてのも喩えで
こうして喩えが繋がって行くしか無いのなら
そんな喩えの連なりを串刺しにして突き抜ける
穢らわしい嫌われ者だろうと誰だろうと
誰も拾えない名が求められなければならない
しかし
誰にそれは名と認められよう
誰にも認められない名は名として有り得ようか
そんな名の為に名を試す値打ちがその名に有るか
だなんてのも喩えだ
を断ち切るには
そんな名を試されてしか名で無い名を
何の先行きも知れず試すしかなかろう

尤も
な事では先行きは知れていて
その名は
誰の耳にも穢らわしい叫び声か血塗れの呻き声かで
嫌われるしか無かろうけれどさぞ迷いも無かろうね
二〇二二年三月二十二日

穢らわしささえも喩えでしか無いよ
喩えしか操れない奴らには　けれど
な事では
正しさにはそれは耐え難い
も喩えな
な喩えは隠されなければならない
なので穢らわしさは嫌われる
正しさが穢らわしさと向き合えば
正しさも嫌でも喩えに連なるしかなくなる

しかしそれでは
正しさは穢らわしさの裏返しでしかないぞ
と言う喩えに正しさは絡め取られる
その耐え難さが正しさから見た穢らわしさの姿なら
な事が正しさの拠り処でしかない訳で
な事に正しさは耐え切れない
な事で
正しさは必ず歪む
歪みの無い正しさは間違いなくまやかしだろうね
歪みの無いまやかしなど高高
美しさへの薄汚れた憧れでしか無かろう
正しさはそんな薄汚れた憧れとは遥かに距たってようね
正しさの歪みと戦えるのは誤りだけで
誤りだけが正しさの歪みを免れられ
正しさを撃てる
とは言え
撃たれる正しさは撃たれる程に歪みを増して
婀娜っぽい科さえ作り始めれば

誤りの怪しさも霞ませて仕舞おうか
な事を隠す為に
穢らわしさの喩えなど疾っくに棄てられてようか
正しさの歪みだけが何を吐くも呑むも思いの儘に
独りでに転げ回って行く
二〇二二年三月二十三日

優れた身振りが優れた心であり
善い心は善い身振りでしかないなら
な身振りを身に付けた優れた善い心は
な心をその身振りによって幾らでも振り翳せようね
な心の歪みだけが優れた善い身振りに磨きを掛けられ
な自らを磨き上げた歪みが優れた善い心を振り翳せば
心も身振りも劣るとされて悪い処に屯する間抜け共を
幾ら惨く細切れに切り刻んだところで
それは正に優れた善い心の為した事で

ならば必ず優れた善い事に違いなくて
な正に必ず優れた善い事を為すのなら
な行いなど殺せば殺しただけ光り輝く
神を真似る事とどれ程の違いが有るのかな
一皮捲れば婀娜っぽい科を作ってるだけなのにね
でも優れた善い心はそんな事は疾っくに知ってて
その知ってるのが優れた善い心の弱みで
弱みは変えようはなくタダでは済まない
何を遣らかすか優れた善い心を怯えさせ恐れさせ
な恐れは幾ら払っても心の歪みに絡み着いて来て
それを振り解く身振りの
形振り構わない身振りは
もう優れても善くも無く
殆ど裏返しにされた婀娜っぽい科に一人で囚われ
孰れは戯けた姿を晒し笑い者になるしかなくても
墜ちたとは言え神を真似たなら人には戻れないのかな
二〇二二年三月二十四日

私達は二人だったんだ
な筈がどうもそうでないらしいなら
私は二人だったよ
かと言うとどうもそうでもないらしいなら
誰か知らない　それとも
誰でもない誰かな二人なようだね
それもまるで違う二人で
けれど二人なのにまるで違うなんて事が有るのかな
まるで違うなら掠りもしない一人と一人な筈なのに
ならば間違って二人になって肩を並べてたらしいね
二人の内の一人は何時も独りで何をするのも一人だよね
もう一人は独りじゃないので何時も誰かと何かをしてる
なので独りの一人はずっと何時までも変わらない
独りじゃない一人はあれこれ色色と変わって行く
けれどそれが何時の間にか
変わらない一人は一人なりに一人切りで変わって行けて

変わって行く一人は変わるばかりで少しも変われなくて
なので
生き残れるのは何時だって独りで一人だけだよね
それでやっと
誰か知らない誰でもない誰かは私を私と知れようね
でもそんな私はそんな私目掛けて消えて行くしかないよ
それでやっと
それが二人の私達だったと知れて
二〇二二年三月二十五日

幾つまで数えたか
な数なんて幾らでも取り替えられるし
何処で何を数えたかも
暫くすれば忘れられようけれど
何時から数えてるかは
忘れたにしても取り替えようがなくて

その何時からの時によって
数を数えられるし
数えずには居られなくさせられていて
なので何を幾つ数えようと
その何時からの時に囚われ
その時を繰り返し数え直してるだけで
な事から逃れようと
何処かへ数えられる何かを探しに行ったり
数えた数を増やしては憶え込んだりしてみても
数はただ一つ
その何時からの時しか数えられてはいない
な事は分かってても何処かへ何かを数えに行って仕舞う
そのただ一つをただ一つで無くす遣り方が一つだけ有る
いや
有るかどうかは酷く怪しくて
その怪しさに肖ってただ一つの怪しさの
その怪しさの中にただ一つの時を溶かしたら
それでも溶けた時を数え直せようか

数え直せたとしても溶けた時を一つと数えられようか
で
「な事を考えてるから何が怪しいかも怪しくなるのさ
君は数なんて少しも数えていないよ
だって君の言う何時からの時が何時かを
君は少しも知らないじゃないか
知らないものは数えられないさ」と
その何時からの時が語り掛けて来るなら
もう何時からの時なんて何処にも無くて
それとも有ったにしても
始めからその時が時を一つと数え尽くしていて
それよりは数えようも無いか数えたところで一つでもなく
数えるのもさっさと已めて仕舞えようね
二〇二二年三月二十六日

時を数えているのなら

必ず数え始めた時が有る筈
それともそんな時など無いのかな
それとも時が有るのと時が無いのとでは
その有るか無いかの他には何も変わらないのかも
なら
有ると無いにしたって何も変わらないに違いない
そんな時など数えられようか
数えているとしたら
時を数えるとは何をしているのかな
と
時が一つその姿を現す
それとも疾っくに姿を現してたろうか
必ず姿を現さずには居られないかに
と見えてそれはただ
時を数え始めた誰かの似姿に成り切れなくて
溶けるようにその誰かを消して
後に何が残るかなら時しか無さそうなだけで
一つの時の姿

だなんて話しはきっと後付けで
その一つの時の姿なら見覚えが有るどころか
来る日も来る日もその脇を通り過ぎてた筈で
その脇を通り過ぎる為にだけ
ただそこだけを後先も無く通り過ぎてた筈で
だなんて思えてならないのも後付けかも知れなくても
一つの時の姿は思い出しようもなく旧くから
ずっと直ぐ隣に冷たく姿も見せずに居続けて
そんな時の姿が紛れもなく直ぐ隣で光りと影を纏って
にしろ　光りは影へ影は光りへと裏返ってるらしく
にしろ　そのようにしか姿を現せないだろうな
だなんて親しげな眼差しなんて投げたせいで
そいつはすっかり一つでも時でも姿でも無くなって
嫌でもそいつの身をぬるぬる弄らずには居られないにしろ
少しずつ分かって来るのはそいつは隣になんて居なくて
な隣はと見れば
疾っくに焼け焦げたかで焦げた匂いだけの空っぽで
そいつと二人で空っぽな焦げ臭さを見詰めるしかなく

余りにずっとじっと見詰めたせいに違いない
時の姿の他には何も無くなってるけれど
つまり何を数えるも無くなってるけれど
二つの時が交わらずに擦れ違ってるのは命にも係わろうか
と
な命は時の数え始めから別れ別れに二つだったと知れて
そうと知れれば命の数は時の外へ押し遣られて戻れない
それを二つと知ってたって今更何をどう出来ようか
な今更だけが擦れ違う二つの間で何処へ行く当ても無くし
二〇二二年三月二十七日

時が数えられるなんて疾っくに嘘と知ってるけれど
な知れる度な薄っぺらな嘘なら数えられるんだよね
重ねられ束ねられてるのが目にも見え手にも取れる
でもそうなればそれは嘘でも時そのものじゃないか
なんて話しは直にぼやけて崩れて忘れられようとも

目にも見え手にも取れる一束ねが
時の焼け跡っぽい辺りに残されてるのをどうしよう
どうにかする手掛かりが欲しくて
時は何処だ？
と尋ねて仕舞うけれど　そんな問いは有り得るのか
有るにしろ酷く間の抜けた問いで
だってもう何処だと問われた時を
うろうろと探し始めて居ないかな
時の焼け跡っぽい辺りの周りをぐるぐる廻ってれば
行方知れずの時を見付け拾えようかなんて目付きで
な辿辿しい足取りも
ここが時の外なら二つに裂けて
一つはふらふらと焼け跡に踏み込んで
時の嘘の一束ねをそっと捲ってしまう
捲っても捲っても嘘なんかじゃない時が映し出され
遥か昔まで確かに数えられて仕舞うのをどうしよう
数えちゃいけなかったんだ　数は嘘であって欲しい
だなんて願ったら今が丸ごと嘘になって仕舞おうか

でも手遅れで嘘じゃない時の数が今へと突き刺さるで
な時の数に刺され今から逃げたくても逃げられない
もう一つの足取りは辿辿しいにしろ
影まで消すように静かにそっと時の焼け跡を見離し
数え尽くされた時の外へ向かって進んで行くけれど
時の外へなど辿り着ける筈もなくて
時を数えよう数えようと数え損なう
疲れた足取りは今にも途切れそうで
二〇二二年三月二十八日

時は必ず二つ見付かるけれど二つは
離れても寄り添っても結ばれても裂けてもなくて
どちらがどちらか見分けられないけれどまるで違って
でもどちらかの時を間違いなく選んでは
その時の中で生きなければ姿形を持つ者として生きられない

それとも違う二つの時を身を裂かずに生きられようか
などと怪しい試みにうっかり身を乗り出したのはどうなのか
なんて思うのは誰なのか
まさか私で有る筈もないなら
ずっと私の隣に居た奴だろう
奴は私の隣にだけ居て長い間何をしてただろう
なんて思うのは誰なのか
まさか私で有る筈もないなら
私の隣に居なかった奴だろう
な奴と奴なら申し合わせたように欺き合って
二つの時を同じ一つの時かに生きられようか
けれどそれで何の姿形を持てようか
なんて思うのはもう私の他に居ない
けれどその私は
私の隣に居て居なかった奴と向き合うしかない私で
私の隣に居て居なかった奴の姿形なんて怪しい限りなら
その私も怪しい限りにしろ却って
その怪しさを纏ってやっと揺るぎなく私は私で居られそうで

なんて思うのは誰なのか
私の隣に居て居なかった奴の他に誰も居ない
けれどもう二つながらに
その誰も居ない向こうへでも時は引き払われてそうで
後に残されるのは誰なのか　も無かろうか
二〇二二年三月二十九日

思い掛けず　ふと
美しいと見せ掛けて醜い女が語り掛けて来たら概ね姉だよね
概ねと言う事は概ねを外れる事も有る訳で
でそれは
醜くもなく女でもなく語り掛けて来るでもなく姉でもなくて
でも美しいと見せ掛けては居ようね　それとも
美しいと見せ掛けずに居られるものなど無いのかも知れない
見せ掛けだけの美しさに囲まれるのが見せ掛けで無いのなら
それは心安らぎ穏やかに楽しく日日暮らせよう

いや分かったぞ
姉でもないのになぜ姉か
その丸丸と白白と背を尖らせ跪き
終日強い陽の光りに曝され色褪せ汚れ崩れ果てた東を向いて
獣の血を匂わせる砂を敷いた幅だけは広い道に口付けしては
街に染み着いた古い時を溶かして赤い瞳の内に流し込もうと
醜く口を歪ませ土色の涎を垂らして見て来た事を呟いている
で
姉でもない姉は何を見て来たかと傍らに蹲って耳を傾けると
何も聞き取れないけれど聞き取れない程に耳に流れ込むのは
聞き覚えが有り過ぎて酷く遠くに響いて聞こえる何かの音で
それに女の声は少しも含まれてないとだけ分かれば　なので
その覚えの有り過ぎる響く限りは遠くてきっと直ぐ近くには
女は一人も居ないとは分かった事にはなるのか　と　そっと
耳を澄ませば澄ませただけ遠い音を鳴らす男共の影が躍って
躍り逸る程に影には女の姿が土の匂いのように纏わり付いて
纏わり付くなら姉より姉の中に隠って姉の姿を引き破る母で
自らの鳴らす音に傷付くばかりな哀れな男共は息子達なのか

など近過ぎてまるで覚えのない事を思い巡らしてそうなら
母に与えられた限りの時など塵のように遠い彼方へ吹き飛び
にしろその遠い程に塵の舞う音かな時を伝える微かな音なら
それは耳の間近で鳴り続け距てられた時の姿を描き出しては
血で結ばれた時を狂い無く測り戻らない距たりを埋めようか
二〇二二年三月三十日

ほんの一眠りで
人が産まれて長生きして死ぬ程の時を越えられる事もある
時を越えて独り違う時に入り込むのは難しいようでも
ふとそうなって仕舞って居たのなら
一眠りどころか一つ息を吐く程に容易くて
と言うか
その容易い一つの息を吐けなければ
どう足掻いても時は越えられないのだが…
などと思い巡らそうと時は疾っくに頭から擦り抜けて

違う事を細細（こまごま）と考えているに過ぎなくて
と言うか
時に就いての考えなどはどれも
時とはまるで違う事を考えているに過ぎないのだろう
とは言え何かを考えようとすれば
時に就いてしか考えようとも出来ないのはどうしてか
と時とは違う何かを見付けようと周りを見回すと
独り時の姿の欠片も見せない時の姿が姿を現して
他に何も見付からないのなら
そのただ時とだけ隣り合って
これまでずっと生きて来たと思い知るしかないにしろ
な時に語り掛けられるでも触れられるでもなし
する事もなくふと眠りに落ちそうにでもなったのか
その眠りらしき暗さか重さを断ち切るように目を瞠ると
どうやらこっちと隣とが入れ替わってるようで　つまり
こっちが時で
隣は時とだけ生きて来た誰かで
その誰かの姿をどのようにか動かさなければならない時が

凝っとこっちから見詰めて居る
時の中の誰かの姿はただ時の外から時に見詰められてだけ
その姿として動くに過ぎなくて
そのただ一つの時によって時の外から一つの時に囚われて
な事ではその誰かに出来るのは
時を失う替わりに時を越えたと思い込む事しか無かろうね
いやだからこれも時に就いては少しも何も考えてないんだ
ただ一つ限りの隣とだけ逃れようもなく隣り合ってしか
生きて来られなかったのを目の当たりにしてるだけで
二〇二二年三月三十一日

四月

隣なんて何処にもないさ　だって

君は何処も見えてなくて　なのに
それを隣なんて言ってるんだから
そんなの直ぐにも分かるだろうよ
と
隣が口を利けるならそんな事しか言わないだろうけれど
そんなの疾っくに知れ渡ってると思うけどね
で隣が口を利ける筈もなくて（だって何処にもないなら）
誰の声が何処にもない辺りから聞こえて仕舞ったのかな
それとも知れ渡ってる事を言うのに誰の声もなかろうか
にしても知れ渡ってるなら何処かでは知れ渡ってなくて
知れ渡ると知れ渡ってないの継ぎ目を見付けられる筈で
でもそこを隣だなんて間違っても間違っちゃいけないよ
でもどう見てもそこしか隣はなさそうと間違えちゃって
な隣でない間違えた隣が隣になって隣に囚われて仕舞う
継ぎ目は継ぎ目なだけで間違って口を利いたりしない
な継ぎ目ではきっと継ぎ目な儘に黙り込む裂け目だろう
と継ぎ目を裂け目と見誤るようでは隣でない隣の思う壺
と直ぐにも分かろうと隣にはそんな壺しか見当たらない

壺の思う壺の壺な君は何者？とか戯れに尋ねてみようか
それこそ思う壺の思う壺で思う壺の姿だけが全く隣だよ
いや分かったぞ
そんな始めから何処にもないのが思う壺なら
どの途その壺に嵌まって身を以て中を満たすしかないな
とか今更分かるにしろ疾っくにもうそうしてるって訳だ
けれどきっとその壺を満たす筈の身こそ空っぽで
壺の中へ継ぎ目か裂け目を闇雲に放り込むのがやっとで
な継ぎ目と裂け目にしろ
継ぎ目は見え過ぎて見えなくて裂け目は見えなくて嫌でも見える
と
裂け目は見え過ぎて見えなくて継ぎ目は見えなくて嫌でも見える
との
二つの見え方がどっちともなく揺らいで　その内の
一つの見え方が見え過ぎて見えなければ
もう一つの見え方が見えなくて嫌でも見える
と
そんな事の目にも止まらない速さの入れ替わりでしか

壺の空っぽは埋めようも無かろうか
とまた
その埋めようが無かろうと有ろうの継ぎ目と裂け目が見付けられ
な継ぎ目と裂け目にしろ…
と同じような事がずっと繰り返されて行きそうだけれど
そんな繰り返しはそれっ切り何処にも起こらなくて
その何処でもない辺りを目の当たりにするしかないなら
そこに隣は間違いなく
継ぎ目と裂け目を絡み合わせてこっちに向かって絡み付いて来る
空っぽな壺の底にはもう穴を開けて隣の隣へも抜けて行こうかな
な丸丸隣だけが有って隣の他など何処にも無い
な抜き差しならない姿を妖しく晒して処狭しと横たわってようね
二〇二二年四月一日

暮れる街の焼け跡とも見紛う黒と白との眺めは耐え難く
立ち去ろうとしてた誰かの影でも探そうと

それとも血か肉の僅かな匂いでも嗅ぎ取ろうかと
何処をとも構わず振り返らずには居られなかったにしろ
な何処をも振り返り損なう替わりに
黒と白に全ては馴染んで仕舞うけれど
黒と白に馴染むのは黒と白に定まって
黒と白に浸み通る時ばかりで　眺められるのは
黒と白に定まって動かない時ばかりで
にしてもどちらの時なのか
見て来た通り（え？何時）
時は二つ有って
何処だろうと何処かに身を置く限り
必ずどちらか一つの時の中に居なければならない筈
な筈　なんて言える処に身を置いて居られるのなら
そこは二つの時の継ぎ目か裂け目か
な処に身を置いた積もりの人でなしなら神でも真似て
時だなんて出来損ないな　なので黒と白に浸み通るばかりな
継ぎ目か裂け目に距てられて根を張るかに身動きも取れず
孰れ腐るか頽れるか溶けて消える

焼け跡を立ち去ろうとしてた誰かの影にも醜く劣る
暗くぼやけた二つの眺めを二つ共に吹き払って
神ならら身を置けよう時の外へも出て行けようか
二つの時などを見て仕舞う病を癒やしたかに
再び時などと向き合おうなんて思いもせずに
あぁ全くそれで構わない
と確かな答えに行き着けたかに身を顧みると
立ち去ろうとしてた誰かの影が一つ切りに
二つの時を二つ共に生きて来ていて
それでここにこうして来て
時より確かにこうして居られるんだな
と見ると
二つの時それぞれの
立ち去ろうとしてた誰かの影の何時も隣に居て
二つそれぞれにそれぞれの時に馴染んで凝っとしてる影が
誰かなんてそっちのけで生温かく血の繋がった影と影とで
少しも向き合わない儘に互いの隣など影も無くに繋がって
時の中の命と命の遣り取りかに黒と白とを遣り取りしてる

二〇二二年四月二日

暮れる陽は病を癒やせなかったかに震えながら
響きながら　落ちもせず
振り返ると（振り返っちゃいけなかったんだ）
でも何処を（でも何処をなんて嘯いちゃいけなかったんだ）
にも振り返れば何処が何処だろうと見えて仕舞う眺めが
行き惑う影の屍の積み上がったかに聳え
にもそんなのは疾っくに病んだ陽に浅い穴を幾つも開けられ
薄っぺらくふらふらと自らの暗みを嘲りながら
にもそんな眺めこそ払い除けようもなく立ち塞がろうね
と
振り返り過ぎて振り返る前に戻るより戻り過ぎれば
すっかり夜の向かい風に向かって立ち向かうしかなく
見えて仕舞う眺めより見え過ぎて乾いた涸れた眺めが
夜の奥行きを裂いた明るみにくるまれ酷く静かに

時を除けて除けられた時の前からずっとその儘だったかに
動き始める
あぁ　何が動き始めるかって　時より前からで
と目を凝らしたのか目を凝らせられるのか　どうなのか
に落ちもせずに消えた陽を真似るかに
どうなのか　の底へでも消えたくても
消えるにはただ落ちるしかなさそうで
動き始める
あぁ　だから何が
と再び尋ねて仕舞ったなら二つ並ぶ影でしか無かろうね
な影の何がと何がは互いを眺め尽くし一つの肉に溶けるようで
時は何時の間に抜け目なく押し戻されて来てたのか　それでも
そんな時をもし剥がせたなら（剥がせる筈無いよ）
動き始める儘に動き始めるばかりに凝っと動かずに蠢く肉は
二つの影を引けば絡み合う二つの丸裸で
除けられた時の前なら絡み合えない筈の
夜の奥行きを裂いた明るみに透けるかに薄く距てられた
明る過ぎて姿を映し合い過ぎる絡み合いを楽しんでそうで

そんな時をもし剥がせたなら（疾っくに剥がせてるよ）
病む前の陽に晒される熱さに悶えるような顔付きの　いや
顔付きなど有り得よう筈も無い（顔は時に刻まれて顔だから）
あぁ　喉が渇く　涙が涸れて開けてられない程に目が乾くように
だって目を凝らせる筈なんて無い
剥がされた時のずっと隣だった時の眺めに目を凝らしてるから
だなんて嘘で　凝らせない目を騙し損なって
に嫌でも動き始める儘に眺められる儘なのは
必ず知りようのない隣を生き抜いた若い二人でなくちゃいけない
だってその時に産まれたなら二人に似た潰れたような顔付きで
産まれた儘に隣の時へ（時にしたら時の隣へ）放り棄てられ
病んだ陽に灼かれ年を経ては薄っぺらな顔を見知ってるから
二〇二二年四月三日

行った事もない遠くまで取りに行って（それとも行かされ）
見知らぬ儘に元元手元に有ったかに取り戻し

戻って帰って来なければならないのなら
それは失われる筈のない時しか無かろうかな
と遠い目を遠くへ向ける振りをしても
そんな時など取り戻せる筈は無くにも
それはそんな事で身一つにとっての一つ限りの時で
とは必ずしも限らないけれど
と限らないのは必ずしも時ばかりではなく
必ずしも時ばかりではないのなら
名を与えられる限りの何でも構わないようでは
何かあやふやに親しみに満ちた
そこはかとない憎しみでも漂い始めそうなのを隠せない
取りに行って来て呉れと頼まれれば断り切れない絆の
絆と絆の繋がりが時を紡ごうなら　紡がれた端から
な時で　な時を　失わせてようかと思えてならなくて
などと
行ったり来たりを繰り返してそうな処にだけは時は無く
なので取りに行くか行かされるしかないのかな　とか
手に取れば若返る事さえ出来そうな

少なくともそう思い込むしかない時に違いないにしろ
例えば昨日と今日が同じに見えて仕舞おうなら
そんな若返りの時など何処の誰に届けられよう
二〇二二年四月四日

絆は取り戻しようもなく断ち切られてるにしろ
古い筈の束ねられた時を手に取れば
褪せていた色も鮮やかに甦るのは何故なのか
醒めない夢の中をずっと生きた来た事にでもして
醒めないながらにも夢を夢と知って
醒めない夢を醒めない夢で一から考え直そうとか
醒めない夢の姿を垣間見ようとしても
時の束ねに目を落として立ち尽くし
古い筈の時を捲れど捲れど
見出される時は生生しくも止まった儘では

醒めない夢が遂に醒めない儘に崩れ去って行くかにも
この今ばかりが見る見る古びて行くようで
な事は有り得ない
有り得ても有ってはならないなら何かが間違っている
と
な間違いから取り敢えず目を背けようと
何処だろうと顧みられる辺りを顧みると
生生しくも見出される時は
止まった儘なようで更に古くへ更に鮮やかに若若しく
巻き戻されて行くしかなく
な時を巻き戻しているのは
な時の中で絡み合う誰かと誰かの血より濃いかの絆で
な絆の強さに敵うものなど無かろうなと見直せば
時は更に激しく荒っぽく若若しさに打ち拉がれるかに
巻き戻されて行くようでも
な時など何処へ向かって巻き戻れよう
何時へ向かって遡れようか
などと考えるのは誰なのか

と問う誰かと問われた誰かが
時のこちらと時の向こうに距てられた儘に向き合って
うっかり目と目を合わせたか（目と目は似過ぎてる）
なら危うさを分かって直ぐに目を背け合ったか
再び思い出す事も有り得ないまでに互いを忘れ合えば
その内のどちらかなら必ず
取り戻しようもなく断ち切られた絆まで
再び立ち戻れよう望みも湧いて
あぁ　そうして
湧き出して已まない望みこそ時なんだ　と再び
見出される時の何と見窄らしくも鈍く汚れ果てた様か
二〇二二年四月五日　鈍（のろ）く

人は死ぬと何時から死ぬのだろう
死んだばかりではまだ少しも死んでないのは言うまでもない
弔いが繰り返されたところでまだ少しも死んではいない

死んだ人が誰だったか忘れられるか取り違えられてさえ
死んだ人は死ぬに死ねずに
かと言って死にたいとも死ねるのを待っているでも無さそうで
その頃にはもう疾っくに死んだ人を知る人も残らず死に絶えて
そしたらもう何時から死ぬも何も死ぬ為の時が失われてそうで
死ぬ為の時が失われたら死ねる筈もない
と果たして言い切れるか
却って死ねる筈もないのが死ぬ事なのかも知れない　いや
かも知れないとはまた何とあやふやな！
死ねるか死ねないかは黒か白かだろう
その境を魂が何時までも彷徨うなんて話しは世迷い言だね
と言うか魂の話しなど始めから少しもしていない
問われているのは人は死ぬと何時から死ぬのかだ
（その何時から死ぬのかという問いが誤りなのは有り得ない
問いが問われる限り必ず問いは誤りなく有り得て有り続ける）
さて
かも知れないあやふやな死を
あやふや故に死ねたとしよう（死ねないならその儘死ねないだけ）

あやふや故に確かな死を死ねた死んだ人は
今頃何処でどうして死んでいるだろう
いや
少しばかり先走り過ぎている
そして酷く遅れ過ぎてもいる　なので
少しばかり戻らなければならないし
努めて追い付かなければならない
何時の何処へかも知れず
な知れない何時の何処へかへ向かって
誰が？　と問われるなら
な誰が？が　と答えるしかなくに
で　その誰が？　は
死んでもまだ死んではいない人の他に見当たらない
（その　他に見当たらないその人には）
そしてその人は必ず
死のうと思って死にに行く人でなければならない
（ここが分かれ道　この道↓を取らなければ
人は死ぬと何時から死ぬのかの問いを手放すしかない）

そして
あやふや故に死ねたとしようなどと言うあやふやさは
あやふやにでもきっぱり斥けて
とは言え　しかし何を思えば死のうと思えるのか
を知れないのなら知れない儘に
何時でもない時の何処でもない処で
死んだ人の死んでいるのを見付け出さなければならない
（ここ↓が目指す道の終わり　何時からは知れない儘でも
その何時からと言う問いはここでここから消えて無くなる）
でもどう遣って？
見付かるのは死んだ人の死んでいるのが見付からない事だけで
死んでも死んでいない人は
何時でもない時の何処でもない処を通り抜け　それでも
死のうと思って死に行けているのかを問うしかないけれど
何に向かってそれを問えようか　それを知れないのなら
死に行くのと死に行けないのとどちらがどちらかも知れず
にしろ　そのどちらか知れないとは知れてようか知れてないか
とはまたも何ともあやふやな　もうそんなあやふやは耐え難い

あぁ　あやふやに還るのだけは避けなければ！
それには死んでも死んでいない人を已めて仕舞えば良かろうか
そしたら黒白極まり　よもや生き返る筈もないなら死ねようか
それを確かめるには　死んでいる死んだ人を
死んでも死んでいないのを已めた人が見て取るしかない訳だが
見て取れたか見て取れないか　またあやふやなら
なあやふやが消え失せて死んでいる死んだ人を見て取れるまで
死んでも死んでいないのを已めるのを繰り返して行くしかない
けれど死んでないのを已めるとは何を繰り返しているのだろう
その何をかをも分からない儘に　ただあやふやに立ち向かって
にしろその分からない儘なのは
分からない限りには何のあやふやさも無いのには違いないなら
な繰り返しだけは弛まず繰り返されては行けよう
で　死んでも死んでいないのを已めた人は
その繰り返しに巻き込まれては抜け出しては巻き込まれ
な繰り返しを弛まず繰り返し繰り返しては
死んでも死んでいないのを已めた人の儘では居続けられようか
後はそれを死のうと思って死にに行けていると思えるかどうか

などと何を思うも覚束なさそうなら死にに行けるも無かろうか
死んでも死んでいないのを已めただけで
人はどうして死ねようか
仮に凡ゆる死に方が試され思いは遂げられ死んでみたところで
見る間に　そんな事を眺めて居る
死んでも死んでいないのを已めた人に立ち戻るだけではないか
死んでも死んでいないのを已めた人が
死んでも死んでいないのを已めた人にすっかり見失われる儘に
そんな人の失せた眺めだけが繰り返されて行くしかなさそうで
けれどそれでせめて
人は死ぬと何時から死ぬのだろう
の問いだけは手放さずに居られようかな
にしろその手は何処の何時の誰の手なのかな
二〇二二年四月六日

あぁ時など長過ぎて使えない

けれどそれは長い時の話しだよね
使えない時の話しなんて要らないよね
使える（かも知れない）時はどれも短過ぎる
短過ぎては少しも使えないどころか
まるで目にも止まらないではどうしよう　寧ろ
まだ長過ぎる時なら何もしないで居るのには使えるよ
何にも使えない長過ぎる時を凝っと眺めても居られるよ
そうして体は溶け出して時へ長く延びて延びて行くね
心はそう容易くは溶けなくて心と時の境目辺りで淀んでる
で体と時は互いが互いの虜で飽く事なく交わり続けるなら
それに付いて行けないい心は体を時に奪われそうで心砕かれ
長い時を向こうに回し短い時を体との境目に翳したくても
そんなお誂え向きの短い時など何処から持って来られよう
など戯れ事か戯れ事にも劣る嘘を捏ね回してられるのも
長過ぎる時に体も心もどっぷり浸かってるからそれとも
な体も心も長過ぎて使えない時から生まれただけのもので
ならどうしようも何も
使える短過ぎる時へ体も心も捨て飛び移るしかないけれど

なら何が飛び移るのか
などと考え及ぶのは長過ぎる時の中だけで
何だろうと短過ぎる時に委ねて仕舞えば片は付く
まるで目にも止まらないとはそんな事だろうかね
いや
始めから時を見誤ってる
時は短い限りに短くてしか時じゃない
と見て取れれば　短い中に時の長さが有ろうが無かろうが
時は長さじゃ無い！　とも時を眺められよう
そしたら短い限りに短い時も長さから解き放たれ
時が時を使える限りに燃え盛るように使い倒して行く
そしたら時など時で無くなるまで擦り切れて無くなるかな
そんな時をずっと黙って時など忘れて見てられたなら
まるで目にも止まらないとはそんな事だろうかね
二〇二二年四月七日

どうやら時を遡ってるかな
時を知るには時を遡るしかないから
けれど時を遡るとは何をしているのだろう
などと考えてみても　と言うか
などと考えてられるのかも怪しい限りで
な限りにもどうやら遡れる時には辿り着けたらしくに
なその時だけが拡がるらしい辺りを恐る恐る見回すと
な見回された時は幾ら見直そうと何も遡られてなくて
つまりこの今の時にそっくりで
しかしそっくりと言うのは
そっくりな二つが有ってそっくりな訳だよな
と心付いて仕舞うのはどうなのか
心付いた心はどちらの時の心なのか
それともまた違う時が心を心付かせているか
な心の事など何時しか忘れられて
何を忘れたのかも忘れてふと目を落とすとそこに
どうやら遡られた時が束ねられて風のせいか
ぱらぱらと捲られて行くけれど

目を近付けて覗き込んでも
どの時も同じ姿で婀娜っぽく科を作るように色付いて
その儘にこの今の時に何事も無かったかに繋がっては
そのどの時からもこの今の時からも弾き出されたかな
忘れられた筈の心が繋がって仕舞う時を見詰めようと
目を凝らそうにも何時の時から何時の時へ心は向くか
まるで知りようも無いと心付く心は
それは何の心かと心の中を覗き込み
少なくともその心の底までも何の時も見当たらなくて
それは心に時が失われたか時に心が失われたか
な心の事など何時しか忘れられて
この今の時から再び時が遡られない限り
この今の時は消え失せるに違いないと
な時の為に時が時を遡って行くらしい
な時は時を知れようか　と心付くのも時に違いなくに
二〇二二年四月八日

時が時を越えてしか
時は時を時とは知れない
けれどこれは少しも時の話しでは無かろうね
時に知れた時はもう少しも時じゃ無いとかね
けれど時はこんな事を已められなくて時なら
こんな事を已めて仕舞えば時で無くなる訳か
どうやら誰かが時にそれを分からせたらしい
時はこんな事を已めて時で無くなったらしい
なのでそれを見てはアハハハハとか笑うのは
時じゃないなら時に遅れた時で無しで　その
時で無しだけが時が時で無くなった跡に残り
我が物顔で時との境目だった辺りを撫で回し

さて

時で無しは時で無しを越えられようか　抑も
時との境目を撫で回すにしても
時との境目と分かって撫で回しているのか　尤も
時との境目を越えたところで時は時で無い訳だが

ならば
時との境目は時で無しにはただ時で無しの境目でしかなく
それでは何の境目にもならない　かと言うとそうでも無く
境目は時で無しが時で無くなるのに遅れた境目だろう
時が時で無くなる時に遅れてる事が時で無しの全てな訳だ
ならば
時も時で無しも無くて遅れだけが境目の手前辺りに有って
遅れる儘にその境目までも辿り着けずに遅れ続けるばかり
遅れから見れば全くそうだろうけれど　時から見れば
な遅れが遅れ続けて時を進め
時で無しを進んだ時に遅らせ続けていると見えるかも
にしろ　時など疾っくに無いのなら
な遅れが何を遣らかすか
にしろ　遅れしか無いのなら　ただ
遅れは遅れに遅れるばかりで
遅れが遅れを越えて遅れを遅れは遅れと知るのなんて
夢のまた夢も遅れしか無いのなら夢も無く　とは言え
そんな夢も何も無い先行きに優る先行きも無いんだよね

遅れを遅らせる為に何も無い先行きは必ず無ければならず
その遅れを遅らせ続ける何も無い先行きと遅れさえ有れば
遅れは遅れを越えて行こうと出来るよね
何も無い先行きこそ一つ限りの望みで
二〇二二年四月九日

一人は有り得ない
血を継ぐ二人でなければ有り得ない
しかし何が？
と見れば
眺められる為に設えられたかな
眺められる限りに眺められる顔が一つ眺められる
その顔は必ず血を継ぐもう一人の顔に繋がるに違いなくに
と見ればそう見てるだけから進めずに
顔は何時までも一つ限りかな顔付きで
と見れば

その顔付きは浮く顔と沈む顔の二重で
浮く顔は色が抜けて上辺を繕っても老け込んで
沈む顔は張りのある色に溢れて浅黒く若若しい
にしろ二つは距たる程に間違いなく一人の顔で
一人で二つな限り凍ったように動きを止め険しい儘で
血を継ぐ筈のもう一人との繋がりを頑なに拒むらしい
「どうやらそれは
殺す為に人を一人買わなければなりませんね」
とは誰の声か　血を継ぐ二人には声など要らない筈で
にしても声の通りに事は進められて行くらしい
予め檻に入れられてた男が引き出され胸を切り裂かれ
疾っくに手遅れかな鈍く解そうな手付きでゆっくり
二重の顔の一人を取り囲むように血が塗られて行く
けれど塗る程に血の色が遅れを際立たせるばかりで
もう一人は先へか後へかどちらかへ酷く時を距てて
血の匂いの届かない暗がりを腫れた脚で彷徨き回り
二人の時の境を探す程に彼独りが時に遅れに遅れて
その先行きに全く何も無いのを明らかに見て取ると
そこに

血塗られた壁に囲まれる二重の顔の女が身を横たえ
時を二つ行き来するでもなく独りで二つの息を吐き
いや違う　そこはそこじゃない　その女は知らない
いや違う　その女なんて言える女の姿も見ていない
「どうやらそれは
殺す為に人をもう一人買わなければなりませんね」
いや違う　俺は女の時の外へ抛り出されたからには
いや違う　俺は女の時の中で胸を裂かれ血を流して
いや違う　俺は女の時を知らないからは血を継いで
女の血を継いだからは血の他は全て先行きの妨げで
な先行きに何も無いのが俺のただ一つの望みなんだ
二〇二二年四月十日　鈍（のろ）く

脚に就いて考えているなら要らない事で要らないなら
脚を切り落とす事を考えて仕舞うけれど要らない事で
脚は要らないなら脚の事など忘れれば済む訳なのだが

脚から始まって居ては脚を忘れても始まりが脚なのは
動かない
動かない脚
脚だけが動かない他には何もなくて始まって仕舞えば
動かない脚を動かない儘にでも動かそうとしなければ
始まりでそれは終わるにしろ
始まりで終わって始まりも終わりも動かないでは脚は
有っても無くても構わないようなものでそれを拒んで
脚は痛み出す　それとも
痛み出す脚から始まったのを知らされるのか　つまり
脚が動かないも始まりが脚なのも
動かない始まりが痛みだったのを見誤って居ただけで
痛みでは要るも要らないも考えるも考えないも
切り落とすもない
切り落とせない痛み
切り落とせない痛みでは何をどうしようもないのなら
どうしようもない儘には始まりは直ぐには終わらない
始まりは痛みに引き摺られ痛みの儘にも動いて行こう

けれど何処へ？
痛みの儘に痛みに引き摺られ痛みの他に行く先は無い
痛みで始まったせいで始まりは何処までも始まりな儘
動かない
動かないけれど始まりで終わるのではなく動いて行く
動いて行くのが動かない
動かないのが動いて行く　それはそれが
痛みだから　なのか　それとも
痛みはただ痛みでしかなく
痛みを痛ませ始まりを始まらせ終わりを終わらせない
痛みを引き延ばす　そんなそれは
脚　それとも
脚でないとしたら
脚を脚の痛みの儘に置き捨てて
脚など疾っくに切り落としたかに忘れ果てて
始まりが始まりな儘にただ終わらずに動いて行くか
始まりを始まりな儘に動かして行くか
そんなそれが　置き捨てた痛みを顧みて

始まりは終わらない
始まりは終わらない痛み
痛みはそうして何時でも何時までも遅れ続けては
その何もない先を終わりなく思い描いてる
それっ切りに何も動かずに動かせずに
二〇二二年四月十一日

思うに「夢を見る」と言うけれど夢にしても
モノを見るには目を開けなければならないよ
夢はモノを見る目の届かない何処からともなく現れ
夢として独りでに何事かを遣らかすばかりで　こちらとしては
夢に迷い込んで成り行きで夢に付き合わされるばかりで
その夢が何事かを遣らかす何事かの動きや形　または
その夢に付き合わされる誰かと誰かの姿なら　それを
その少し手前辺りから見ているような積もりにはなれても
その少し手前辺りにモノを見る目の有るのを確かめた事にはならないよ

そんな夢を見てた　そして
眠りから醒めそんな夢を振り払いモノを見る為に目を開ける
さてそのモノを見る目とやらは何を遣らかすのだろう
などと考えるのは誰だろう
と　その目覚めた誰やらは目の奥に姿を潜ませていて
目の奥から目の外に眺められる諸諸を覗き見ようとしている
そうか
覗き見なんだ！
モノを見る目とやらの遣らかす事は　そして
その目とその奥に潜んでる誰やらはずっとその儘なのだから
目を覚ましてる間は幻に惑わされ目を白黒でもさせない限り
モノを見る目と誰やらは常に相謀って覗き見に励んでる訳だ
そんな夢を見てた　そして
そんな夢を見る儘に見慣れた街を大股でずんずん歩いて行く
そんな夢を見ながらにも見る目が見てるとは確かめられずに
とはつまり目の奥に潜んでる誰やらもどうにも怪しい限りで
とはつまり見慣れた街は少しも覗き見られてる眺めじゃない
それは流れるように

モノを見る目の届かない何処からともなく現れ
モノを見る目の届かない何処やらへ過ぎて行く
何処からや何処やらと来ては覗き見の付け入れる隙はなくて
な事より
見慣れた街を大股でずんずん歩いて行ける眠りとは何だろう
などと考えるのも夢だよなと粗方分かりながら考えていると
これは必ず何処か何処だか確かに知れる処へ行き着けないと
何処やら知れない処へぶち当たるまでずんずん歩くばかりで
命に係わるエラい事になるぞ！　と
恐ろしさがどんどん募って来て　苦し紛れとも
夢の中に目が芽のように芽吹き（覗き見の目じゃないと直ぐに分かる）
恐ろしさをがっしり掴み抑え込んで放すまいと
その目は眠りの中に深く根を降ろし広くびっしり根を張り巡らし
目は更にその根の力に力を得て
夢の中へと強く鋭くずんずん突き刺さって行く　と
これは何の目だ！　ぐんぐん伸び続ける芽のような
と突き刺さって来る目を抗い拒む眠りに厳しく問い詰められては
眠りから醒めそんな夢を振り払いモノを見る為に目を開けないと

けれどそんな目は　それとも　どんな目にしろ
目は眠りに深く突き刺さった儘　夢の中に置き残して来たようだ
そんな夢を見てた
な夢から醒める夢もそんな夢に奪われては
目はその失われた夢に突き刺った儘にも
その限りにはその目の見る夢へ惑えようか
それともそんな夢でも見られたならなと
そんな夢を探してるけれど何も見付からず
そんな夢を見てる
二〇二二年四月十二日

見慣れた街を見慣れぬ街かに終日歩き続け歩き過ぎ
何一つ得るものが無いなんて事で帰る道はぐるりと
裏返して仕舞いたい程に粘っこく延びて延び過ぎて
やっと見えて来る見慣れぬ隣に囲まれた家は何処か
縮んで帰り着くのが躊躇われれば益益縮み見慣れぬ

どの隣も溶けて闇へ透けるようなら着てる物も溶け
上は裸で硬く筋張った体が微かな風に当たるのさえ
膚を刺されるように痛い
ぬるぬるぬると膚に纏わり付かれるように痛い
違う痛みが二つ…だなんて数えたりしちゃいけない
だなんて声からして違う痛みから滲み出て来るかに
二つ…だなんて数えて仕舞うから違う夢を見るかに
二人
二人の姿は少しも似てなくても溶けた隣に映る影は
そっくりなら双子で双子から互いに目を背けられず
双子で
一人
違う一人が二つ…
だなんて数えたりしちゃいけない
だなんて声からして違う一人から滲み出て来るかに
二つ…だなんて数えて仕舞うから同じ夢を見るかに
偽り欺く
何を？

双子なのを？　一人なのを？　双子で一人なのを？
けれど　何を？　なんて尋ねて仕舞えば必ず嫌でも（嫌だ）
二人
選りに選って双子で二人とは！
もう取り返しは付かず上だけ裸がせめてもの慰めで
だって家を背の片割れは獣のように丸裸じゃないか
そんな処で待ち構えて俺を家に入れない積もりかよ
だなんて声も掠れて跪けば片割れの股の間から覗く
縮む家は見慣れぬ隣と見境が無くなって見境も無く
隣も隣もその隣も覗き見て覗き捲っても隣は溶けて
溶けるばかりで粘っこく延びて延び過ぎて何処まで
隣か見境が無くなって何を覗き見るも見ないも無く
偽り欺く
何を？
膚を刺されるように痛いのを？
ぬるぬると膚に纏わり付かれるように痛いのを？
な痛みが二つだなんて数えたりしちゃったのを？
二〇二二年四月十三日

日暮れに抑も前を向いて歩くのが間違いで
家へ帰り着きたいならひたすら後退らないと
と心付くと
帰り着きたいより家が燃えるのを見たかったのかな
と振り返るより先に隣が燃えてるのを見付けて仕舞う
隣が静かに燃えている
隣だけが物音一つ立てず息を潜めるように
凝っと火は燃える自らの姿に見蕩れるように
この空きっ腹の底へまで火は燃え移りたそうに
今この時を狙い澄まして燃え始めたに違いなくに
なこの時さえ擦り抜けられれば係わらずに居られる
なこの時に火に囲い込まれるように行く手を塞がれる
けれどそれで何が起こるでも無いのが火の遣り口なんだ
な事より歩きに歩いて空きっ腹の効は一つも無かったよな
燃え移れるなら燃え移って空きっ腹を燃やして欲しいもんだ

な事を考えもしない内に帰り着いた家の中で凝っと息を潜めて
な何が息を潜めるのかな
家の中は空きっ腹そっくりに空っぽなんだけど
それとも家の中より暗い火に掛かる鍋物でも煮立ってようかな
物音一つ立てず息を潜めるように
物音一つ立てず息を潜めるようなのは燃える隣だ
昔の事のようにそれが思い出されれば
何故それが思い出されて仕舞うのか腹立たしくて
火に幾ら焼けても姿を変えない火の中の隣の姿が頭に焼き付き
けれどそれっ切り何が起こるでも無いのが火の遣り口なのは
もう幾度も嫌と言う程思い知らされて来たと思い出される
けれどそうして燃やされて忘れられて来たのが何なのか
一つも思い出されないのが腹立たしくて家を飛び出す
けれど辺りをぐるぐる回って走り続けて仕舞うのは
隣が一つも見当たらず家も見失われ燃える眺めは
何処だと探しても走る足は滑るばかりなようで
物音一つ立てず息を潜める
な何が息を潜めるのかな

家の外も空きっ腹そっくりに空っぽなんだけど
だなんて惚けた言い草は通らないぞ
けれどそれっ切り何が起こるでも無いのが火の遣り口なのを
物音一つ立てず息を潜めて遣り過ごせるのはどうしてなのか
燃え果てた火の姿が遡られるように
今この時が狙い澄まされ後退って行くからかな
それで何を加えるもなく
その儘に委ねるだけの事で
二〇二二年四月十三日

空きっ腹の愛おしさには身も捩れる　身を捩れば
空きっ腹を思いの限りに撫で摩ってられるように　そんな
空きっ腹は空きっ腹なんて言葉では言い表せない　にしろ
空きっ腹な程に腹の中には甘く重く蕩けるような
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきが
隠されてる

隠されてる　の愛おしさ
隠されてるの他には愛おしめる何も有るものか　あぁ
隠されてるの中へ溶けて消えられるなら全てを擲とう
（溶けて消えるのだから全てを擲つに決まってる訳だが）
けれど空きっ腹に繋がる口も喉も塞がって開かないでは
身を捩るばかりにしろ身を捩る何の効も無く
いや
身なんて捩ろうが捻曲げようが何の事も無く
寧ろだらりと腹這いに身を延ばしに延ばし
空きっ腹に隠されている光りも延ばして
延ばした身に延ばした光りを浸み渡らせて行こう
なら空きっ腹の身に光りは満ちて
身が空きっ腹かに光りに溶けて
いや　それでは
隠されている　が何処かへ消えて仕舞おうか
なら光りに溶けた身を何処かへ隠せばどうなのか
でもどう遣って？
と考えるより先に顧みられるのは

身を光らせる光りの空きっ腹に背いて僅かに暗い縁に映る
もう冷たくなって動かない時の欠片の再び温く溶ける様で
その溶けた時の中の光りに溶けた身の
露わに晒された汚れた姿を隠そうとして隠せずに焦る褻れた…
褻れた何？　と時を遠く跨いで尋ねられようなら
それは空きっ腹を抱えて　空きっ腹に身も心も奪われて
空きっ腹だけで生きて居るお前が闇でも真似るか浅はかに
光りに溶けて横たわる汚れた身に覆い被さり
その身を隠そうして隠せずに焦る褻れた様で
いや
全くそれで構わないさ
褻れたお前の姿はお前には少しも見えないだろうけれど
お前は全く光りに溶けて横たわった身を汚すしか出来ない
その身に纏わり付く…
纏わり付く何？　と時を遠く跨いで尋ねられようなら
溶けた時はぐるぐると渦の真ん中へ落ちるように巻き戻り
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきの中に
それはつまり空きっ腹の中に　息絶えてお前はずっと

隠されてる

二〇二二年四月十四日　窶（やつ）れた

海は底に
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきを
隠してる
のが災いして
海の水は海の向こうへ流れ出て已まない
その海の海の裂け目を塞がなければならない
けれど海の水が海の底の光りを嫌う限り
水はまた幾らでも海の縁を破るだろうか
破れて已まない海の縁　そこを
逃げて已まない海の水　海の向こうへ向こうへと
それを
海の底で
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきは

嬉しがり楽しがり海の涸れるのを待ち遠しがって　そうなれば
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきも
つるりと乾上がった海の底で跡形無く消え去ろう
な事は直ぐには起こらないけれど
な兆しを
隠してる
のが災いして
海の外で水と光りは常に危うく啀み合い脅し合い
背き合い再び戻らず離れ合う時を待ち望んでいる
あぁそんな中へ踏み出そうとする
身の張り裂ける喜びをどうしよう
張り裂けた身の喜びに浸り切ろう
海なんかよりずっとそこは還るべき処で
にしてもそこは
隠されてる
隠されてるからそこへ還らなければならない
けれど
隠されてなければ還る処ではないとも言える

けれど
そこへ還るしかなくて海が耐えられる限りの水の重みを耐えて
光りのたっぷりな脹らみのまろやかな揺らめきを
隠してる
ならもう踏み出して戻れずに直ぐにも事は起こって欲しい
それとも疾っくに事は起こっていても時だけが動かなくて
何を時は見てようか
な時を凝っと見詰める喜びの微かに穢れて行く様に戦いて
それは何の兆しかと
二〇二二年四月十五日

私は…
と言い出したからには誰だろうとそれは私で
なので誰だろうと私のその誰が
誰のその誰から誰の外へ走り去る姿を追って
私で…

と言い直したか言い淀んだかもあやふやならば揉み消して
それを見付ければ私は私で…な私の外を外と知れるだろう
な火を…
と言い出したからには何だろうと必ず見付けられよう火で
なので何だろうと火のその何が
な火と燃えてようその…
と言い直したか言い淀んだかはあやふやで間違いなく火で
な火を遠くも近くもなくに距たる限りに距たる辺りに眺め
息を吐くのも儘ならないかと心付けば
それ切り息は尽きるかに一つ吐く息は
まるで息では無さそうなら息とは異なる何かを吐き出そう
でなければならない
でなければ私は私はと言い出される前から私かに生生しく
酷く私で有り続ける私でしか無かろう
でどうなのか
はひたすら火に係っている火は燃える儘に冷たい色を晒し
息とは異なる何かが喉を破り酷く激しく吐き出されるのを
こっそり楽しげに静かに待ってそうで（あぁ火の冷たさ）

けれど目を凝らせば火の影に紛れて火より冷たい足取りで
こっそり火を逃れ焼け焦げた偽りの姿を暗がりに溶かして
潮風に塗れ荒海の底まで逃げ切ろうかな勢いの一人の姿が
見失われ忘れられ忘れられた痕も潮風に吹き曝されて失せ
入れ替わるかに火より熱い足取りで火を囲む幾人かの姿が
火の影を出入りしながら火を離れないと決めたかに彷徨く
と火の眺めは定まったようだね　なら
きっともう一息だよ
息とは異なる何かを吐き散らせるのは
火の影より暗い空にそれがぶちまけられるのも目に浮かぶ
けれど一つだけ妨げなのは
酷く私で有り続ける生生しい私がそれを待ち焦がれる姿で
な私を火で焼き尽くして忘れられたらそれがずっと私な私で
な事など産まれる前から分かってたさ
なので私はそんな私を忘れられずそれはそれに辿り着けず
それな儘で有るしかないよ
の何がそれなのかも動かない火よりもあやふやに
あやふやな儘にもそれはそれを妨げ偽りの私が幅を利かす

私を忘れられない私など私で無いどころか誰でも有り得ず
そいつは己の血肉を貪り尽くし骨身にまでしゃぶりついて
その産まれる前からの火そっくりな味でも舌に転がそうと
直ぐにも吐き散らさなくちゃいけないものを呑み込んでは
火を遠くも近くもなくに距たる限りに距たる辺りに蹲って
しゃぶり尽くされた己が火に投げ込まれるのを夢見てよう
それとも火を囲む幾人かで疾っくにそれは遣り遂げられて
残るのが私を忘れられた私ならその私はそんな私は知らず
そんな私がぶち破られて火の影より暗い空に私とは異なる
私の姿のぶちまけられてるのを詳しく見て取れようけれど
でどうなのか　の何がどうなるでもないのを堪え切れずに
私は…
と言い出したからには誰だろうとそれは私で
二〇二二年四月十六日

呑むとか吐くとか言う話しは嘘でなければならない

従うしかない火の嘘に打ち拉がれ水を求めるように
な嘘を辿り構わず振り回せる為に
な嘘をその時限りに振り回せれば
その時限りの姉の顔を真似た（な姉の顔は何時もその時限りだ）
なぜか何時も独り貧しい母を（な母は何時も姉に真似られ母だ）
その時限りに助けなければならない息子のように起き上がり
で何処から起き上がったんだっけ（な息子は起き上がるだけさ）
とずぶ濡れの身が温温と温かいなら水の中からだろうなとか
水を呑むとか吐くとか言う話しが喉まで出掛かるのを呑んで
いや　な話しから嘘なら　な嘘を振り回せば
従うしかない火の嘘にも打ち拉がれようかと
火の影を探しても火の影が濃く揺らめいても火は見付からず
火の影なんてどう間違っても必ず嘘じゃない
必ず嘘じゃない火の影なんかにうっかり微笑み掛けられては
呑むも吐くも儘ならず何の嘘話し一つさえ許されず儘ならず
幾ら探し直せど同じ火の影ばかりとは　いや
な話しなら　火の影は嘘じゃないと思い込ませたい嘘話しで
嘘のように水は潮のように退いたなら

嘘話しどころか抑も

呑むとか吐くとか言う話しは嘘でなければならない
が始めから嘘ではないのかと手探りする手は穴を探すけれど
呑んだり吐いたりの穴でも話しの穴でも嘘の穴でも無いなら
まさか火の影の底へ落ちて行くなんて穴だけは困るんだけど
な憂いを見透かされ火の影にくっきりと微笑み掛けられては
あぁそれって母の貧しさそっくりの
貧しい母の似姿そのものじゃないか
な火の影の微笑みが見る見る幅を増す水の流れに溶け拡がり
その向かう先に必ず火が見出されなければ
打ち拉がれ従うしかない嘘はその時限りのどの時の外へとも
失われるしかなかろうか　母と共に
な母は何時も姉に真似られ母で
息子はその時限りの姉の似姿に
何時も通りに起き上がるだけさ（と嘘でも嘘を呑んだりして）
二〇二二年四月十七日

煩わしい事を言う　その
煩わしさの強さに付き随いたくて
煩わしい強さは何にでも穴を開けて行く穴で
とは言え穴が穴を開けられるのは穴しかなく
とはつまり煩わしさの前にはただ穴だけが開いている
かのような煩わしさは強さだけで穴で
必ずその穴を見失わず煩わしい事を言い続ける
ひらひらする似姿の為に
ひたすらに何処までも奥へと穴は予め穴と知る為に
煩わしければ煩わしい程にひらひらする強さに酔うように
酔うようならもうすっかり酔いは回って
酔いが回るなら何処までも奥へと春の眺めは拡がり尽きず
春までがひらひらするなら何の似姿か
だなんて戯れ言を口走る口から覚えず笑みも零れよう
ひらひらする春よ　だなんて戯れ言の続きは
けれど酷く湿っぽいようで　ならば
春の眺めの行く先に堀の水の乾上がってるのも見えないか

見たいもんだ　なぜならそれは…　と
煩わしい事を言う　その
煩わしさの強さに付き随いたくて
終わらない春の時の重みに沿って
終わらない春の時の重みに弛んで垂れ下がるような眺めは
ひらひらする似姿の為に春だろうよ
とこれは戯れ言なんかじゃないぞと戯れ言を押し通しては
ひたすらにひらひらする時の重みに滑って降りて行こうか
そうしてみたいもんだ　なぜならそれは…　と
煩わしい事を言いたいけれどその先が出て来ない　アハハ
とこれはひらひらする似姿の為にすっかり酔わされたかな
とひらひらする似姿の為に戯れ言なら言えようけれども
けれど戯れ言なんてさっきから一言も口に出来てないよな
ひらひらする似姿にはひたすら煩わしい事しか言えなくて
全くそれはそれでひらひらする似姿の為にはそれで良くて
終わらない春の時の重みって何だっけって口籠もろうなら　つい
ひらひらする似姿のひらひらなんてしないぴたりな姿さえ
春の限りの何処とも明るい奥に煩わしさの限りも楽しげに

ひたすらに明明とも見留められようか

二〇二二年四月十八日

道でも無いのに（それともその辺りの何処もが道なのかな）
道と呼ばれる傾く空き地を住み処にしてる
貧しい女を一人知ってた
筈なんだけれど忘れてる
道と言う名は空き地ではなく忘れた女の名だったかも知れず
道と言う名だけが耳の奥底に尖った匂いのように刺さってて
道という名は耳に残しても忘れた女を忘れようと頭を振ると
激しく回る風に渦巻き逆巻く黒髪の中に
砂の一粒の形をした潮の香りを探すかで
香りを撮み取り忘れた女を忘れても黒髪が残って仕舞うのは
どうなのか　な
どうなのかも忘れて仕舞えばどうなのか　と
一粒の砂の味のない味を舌に転がしては

道と言う名が間違ってようかと舌に転がす砂の一粒を噛むと
重い胸から湧き起こる荒荒しい力への恥じらいが湧き起こり
黒髪が渦巻くも逆巻くもどうにもならないならそれだけの事
だなんて空っ惚けちゃいけなかったんだ
口の中を鋭く緊い潮の香りが拡がり溢れ
鼻を刺し喉を刺し耳の中まで刺し込まれ　耳の奥底に
尖った匂いのように刺さってる道と言う名を激しく追い詰め
頭の中の何処かの骨が破れては口と耳の奥底が繋がり貫かれ
道と言う名の奥に違う名が匿われてるのはもう隠し切れずに
けれど名はまるで知れない
忘れた女の名に決まってる
そうはっきり思い込めたなら終わりに出来るのに　でも何を
（だから女をだよ）
と傾く空き地を住み処にしてる潮の匂いぷんぷんの誰かから
そうはっきり言われたのなら終わりに出来ように
な空き地もぐらぐらと白っぽく怪しくなるようで
女の名だけはもう隠し切れないのなら必ず突き止めなければ
怪しい空き地と共に何もかも流されて仕舞いそうで　傾いて

そうかそれで始めからずっと傾いてたのか　でも何時から？
なの古くからの傾きが頭の中の骨の破れ目へ傾れ込むようでは
女の名はまるですっかりその古くからの傾きその儘に呼ばれ
それってまるですっかり
あぁ重い胸から湧き起こる荒荒しい力への恥じらいその儘で
早恥じらいは力を削ぎ荒荒しさを削ぎ厚い胸も削り削いでは
名は呼ばれるようで切り裂かれ傾きの先へ抛り棄てられては
知られる儘にも渦巻き逆巻く黒髪の奥に粘り着いて離れない
二〇二二年四月十九日

唇は棄て言葉を無くし日は過ぎて行く
とは言え数えればまだほんの幾日かで
それより前は何時も腹を空かすように
己の言葉にも飢えてたろうか　忘れた！
唇は棄てても耳は棄ててない筈なのに
何の言葉も耳に入って来ないのは快い

それとも唇を棄てれば耳は耳を已めて
ただの空っぽな穴になって仕舞おうか
それも快いのは幾日も空きっ腹な儘に
食うのを忘れてられるのと同じ快さで
身も心も快いその快い身の足元辺りに
硬い石でも燃やして震えるような火の
硬い音が微かに届いて耳も耳にではなく
空きっ腹へにしろ唇を棄てれば腹さえ
腹を已めただの空っぽな穴そっくりで
ならば耳と腹は空っぽな穴で繋がって
微かな火の音を静かに響かせてようか
にしろ火の音とは何なのかと考えると
幾日か前までは火を食っていたのでは
と思えてならなくて火など食い厭きて
それで唇を棄てたのが朧に思い出され
火を巧く食う唇の技も朧に思い出され
唇や腹と一纏めに棄てられ怒っている
にしろ火は今更そこで何を為たいのか

と推し量るのは棄てた側で火にしたら
火の成り行きで燃えるしかなかろうさ
などと
穴の中の火の音の響きを係わりのない
煩わしい事なら放って置こうだなんて
仮初めにも思っちゃいけなかったんだ　だってそれで
穴は穴ごと火の音の響きへと落ち込み
穴に続いて快い身も心も火へ墜ちれば
硬い石の上かで快さも燃えて灰になり
何が残るかって灰より惨い事にきっと
唇と腹が喜び勇み甦り卑しく浅ましく
言葉と食い物を探し回り貪り喰おうね　同じ過ちは犯すまいと
抜かりなく火も火の音も踏み躙っては
二〇二二年四月二十日

空きっ腹に透けた産毛が生えて来たと思ったら知らない内に

空きっ腹の中はすっかり野兎の毛並みで被われたかのようで
それなりに見映えがして目を楽しませて呉れてはいたけれど
暫くすると斑に禿げて来てそれは目を背けるだけの事だけれど
抜けた毛が何処へ行ったかと探すと頭の隅に一纏まりに溜まり
鳥の巣になって鳥は卵を温めて居たようだけれど卵だけが残り
卵は見る見る脹れ頭の中はすっかり大きな卵で中が透けて見え
雛はもう何時でも殻を破って出て来られそうなの丸まった切り
凝っとする儘なのはどうやら嘴が無いらしくだとしたらこれは
鳥ではなく蜥蜴か蛇か蛙か獣か人の児らしいにしろ暫くすると
空きっ腹に収まったらしく児の姿は失せて透き通ってるだけの
中が空っぽな卵の殻だけが疵一つ無く頭をすっかり独り占めし
いや殻もすっかり透き通り殻など始めから無かったに違いなく
すっかり空っぽな卵の形は更に脹んで恐ろしい勢いで脹らんで
頭なんて疾っくに食い破られその外の何もかも食い尽くしては
きっとこの世は全て空っぽな卵の形にすっかり呑まれて溶けて
卵の形は遺る事を遣り果せてホッと息でも吐くように
この世でこの世程要らないものも無かろうね
この世からこの世が無くなれば

この世はすっかりこの世で無くなるばかりで
そしたらこの世も誰もそれを浮き浮きと楽しめようかな
尤もそうなってはこの世も無く誰も何処にも居なかろう
なんて呟いたにしろ　独り透き通ってる儘に
卵の形がずっとその儘にそうしてなくちゃいけないのは
空きっ腹の中にまた産毛になって生えて出て来たくても
空きっ腹を何処にも見付けられないからかな
二〇二二年四月二十一日

夜が深いにしては短過ぎたか日が変わったかは怪しいけれど
夜を真っ赤に塗り込めたなら明けた日らしい暗い絵が
壁に直に画かれ私は私の若い母と二人で肩を寄せ合い
私の娘の息苦しそうに歌う姿に見入っては日を数え損なって
見入ってる筈の娘の姿もぼやけて　いや
娘も夜と共に壁に真っ赤に塗り込められたのを目にしたろう
私の娘は私より老いていた　明らかに日を跨ぐ力を衰えさせ

その娘が歌う姿を見せ付けて来るのなら
私は真っ赤な壁に娘の声でも見たいのか
思い切って立ち上がりたかったが母に左肩と左腿を抑えられ
却って身はふかふかと沈み込み母の若さに釣られてうっかり
母に抱かれた儘で眠りたい心が擡げては
それを断ち切ろうと男の鋭く掠れた声を母に投げると
母はそっと私を離れるにしろ私の娘に近付くでもなく
母の尖った背中と娘の尖った肩を見比べられる辺りに
私は殆ど横に寝かされ足の痺れに頭まで犯されるかで
痺れる程に目は揺らめいて冴え壁の真っ赤さえ偽りと
見抜けたなら母の若さと娘の老いも見抜けようかとか
心を弛めたが徒か
母は更に若さに輝き
にしろ輝くばかりで幼さは見せず幼子へ還る兆しもなく
娘は更に老いを重ね
にしろ老けても縮んで萎れる肉の塊に近付く兆しもなく
その姿形を保った儘に
母は若返る日を何処までも遡り

娘は老いる日を何時までも過ぎ
私は二つの向きの日の流れの間かに留まり為す術もなく
それでも一つだけ　私独りの
日の流れこそ失われたのなら取り戻さなければならない
とは心付くけれど
それを妨げるのはひたすら歌い続ける娘の
果てしなく老いて行くかにも滑らか過ぎて耳障りな声で
その声に撫でられ若さを誇るかに殆ど裸の母の背の肌は
今や艶艶と眩しくて更に眩しくて
けれど母は向こうを向いた儘何の声も掛けては呉れない
母の声さえ聞けたなら　それを私は
耳の中で娘の声と取り換えて　それを
私の日の流れに添わせる事も出来そうで
でもきっとそんな事は分かってて
私の娘は歌い続けたいんだろうな
な娘の頑なさが母を若返らせ私を日の外へ追い遣ってようか
二〇二二年四月二十二日

行き止まりの石の壁に石より硬い拳を立て続けに打ち込むのは
行き止まりも石の壁もなくて硬い拳に比べればまるで柔らかい
そんな境を日を決めて通り抜ける為で　通り抜ければその先は
薫き物の香りを漂わせる仄明るい旧くからの祈りの集いの場で　にしろ
空きっ腹を抱えてやっと辿り着けた身では離れて眺めるだけで
な何から離れてるか定かでなく辺りを見回すと祈る人の姿など
ほんの疎らでその淡く滲む影などは斑に水を撒いた痕のようで
人の姿も水に溶けたかに水に映る人影が蹲って黙って祈るのか
その先を見通すのは恐ろしくて掠め見ると思った通り浅く窪み
祀られていた神が盗まれたに違いないと思えば盗んだのは私か
などと要らない事を考えている内に思った通り身はずるずると
嘗て神の据えられた筈の窪みに水に溶け掛けたかに流れ込んで
歌を聴く
祈りの言葉に聞こえて来そうでも耳を欹てれば聴き分けられる　だって
祈りの言葉なんて穢れ果ててるから
耳は窪みの底に横たえられ　窪みそっくりに真上を向き

痩せ細る限りに痩せ細った声で
幼い娘の為に歌われる歌を耳の底に響かせる
けれど　そこで
時は止まらないのか　などと
うっかり言い掛けたのを咎められるかに
けれど
耳の底で痩せた声は罅割れよう
けれど　そうして
その罅割れる美しさになら時は止まるのか
などと戯れ言を言い掛けては堪えられず洩れる歪んだ笑い声に
罅割れた声は掻き消され
声の掻き消された痕の美しさになら　もう
何を言おうと頑なに時は止まったりしない　いやこれこそ
幾ら言い続けても何も起こらない戯れ言だろうね
だって時は始めから動いてもないし止まりもしない
（始めから動いてないならずっと止まってたとも言えそう
だけれど始めから動いてないなら止まりようも無いし）
で話しは終わるんだ

神を罵る楽しみなど知らずに居たいのなら
なんて戯れ言なら祈りの言葉に混ぜ込めようかと
な事の為に歌を聴く
な事の為に聴く歌など疾っくに祈りと同じに穢れ果ててようと
二〇二二年四月二十三日

穴ならそれを知ってるか知らないかは知らないけれど
穴は穴を通り抜けても穴なので穴で
穴な限り必ずどんな穴もそんな穴で
どんなに深そうな処でもその深い先が行き止まりなら
それはただ穴に見せ掛けた深いだけの凹みでしかなく
うっかりそんな処へ落ちてやっとの事で戻って来ては
落ちた穴の奥深さとか誇らかに語られたりされるから
何が穴か間違えられ穴を抜け出られたとか思ってる君
君は何かの弾みで抜け出せる凹みと遊んでただけだよ
だなんて声がふと何処かから聞こえて来て仕舞っては

どうしよう　も無くに　穴な限りのそんな穴に嵌まり
いや　そんな穴では嵌まるも無くに何処までもが穴で
何処までもが穴なのに穴で無さそうな処が一つ有って
あぁそんな処が有るせいで穴は穴を通り抜けても穴で
然もそんな事ではそんな処が何処かは穴にさえ知れず
どうしよう　も無くに　そんな限りに全くそんな事で
済むのか済まないのか　なんて考えちゃいけないのは
それを穴で無さそうな処が独りで考えて仕舞うからで
穴にさえ何処か知れない処が考えて只で済む筈無くて
つまり考える為の物差しが無いなら考えは穴を巡って
穴を通り抜けても通り抜けても考えても考えを通り抜け
そうか考えが穴だったんだ　なんて事でも終われずに
何時まで何処までもそんな事に係わってられるなら
穴巡りが生き甲斐さとかのんびり遣って行けそうでも
穴はそんな甘くなくて穴で　穴巡りなど許す筈はなく
なので穴にさえ何処か知れない処から君は独り切りに
抜け出せずに
あぁ分かるかな

何処までも穴を通り抜けて穴な穴だけなのに独り君は
何処へも抜け出せずに
しかも何処までも穴な穴は君独りにそんな事は許さず
なら君は穴とは違う事を必ず見付けてそこを通り抜け
いや　そんなのって全く穴だよ
つまり
穴で無さそうな処が一つ　もしそれが
穴を通り抜けても穴な穴だったなんて事になったら
穴は穴か　穴が穴なら穴は穴か　どうか
から遣り直すしか無かろうね
二〇二二年四月二十四日

噛んだ砂の味さえ忘れたようでは舌に思い浮かぶのは
滑滑した泥の味ばかりなようで
溝と道の裂け目に溜まる泥の色に目を瞠らされ
泥の他に何の色も忘れたようでは

道と溝の裂け目だけを頼りに辿り着くのは
必ず辿り着かなければならない
築かれたばかりなら直に取り壊されようか
にしては艶艶した石ばかりを入り組ませた
岬の縁に拗拗と盛り上がり浜を侵して殖えて行くかな
その狭い裏口にしか辿り着けないように造られた処で
まるで恥じでも売っては食い繋いでるようなら顔を晒し
そこで何時も通り怪しい稼ぎに励むしかないにしても
売る程の恥じも泥の色の他に色を忘れたかに忘れては
見向きもされない怪しい技を窮めてるような顔を晒し
拗拗した狭い中を殆ど姿を失いひたすら歩き回っては
切れ味鋭い歌などを探していた頃を思い出そうにも
舌に思い浮かぶのは滑滑した泥の味ばかりなようで
いや待てよ
泥の歌を見張る　若さに任せ
そんな務めを買って出てたんじゃなかったっけ
怪しいどころか見向きもされないとも知らず
忘れた

のでもなく
無かった事が間違ってさも思い出されたに違いなくて
にしても泥の歌とは何だろう
見張るとは何をするのだろう
泥の色の他に色を忘れたなら
泥の見張りには打って付けか　とか
では
な泥に何処から歌が絡むのか
泥が歌を歌うのか
歌が泥を歌うのか　いや
な無かった事を思い出したのではなく
泥の歌を見張るなんて何だか知れない
泥の歌を見張る私の姿を探さずには居られないだけで
その姿が泥の色をして泥の歌でも歌い出そうものなら
私は溝と道の裂け目へと歌いながら流れ出て行けよう
な泥の姿の私なら無かった事では無かったと思い出し
二〇二二年四月二十五日

泥の色の他に色を忘れた目で泥だけを凝っと見詰めていると
泥が何で何が泥かも見失われ泥の色だけが拡がり
その色の拡がりの中に全ての色と形と
凡ゆる物の姿が映し出され
その全てを繋ぐ
歌が聴こえるにしろ歌を聴き取る耳は酷く罪深いものとして
歌から咎められているような　と言うか
歌からして罪深いのではないか
な罪の在処ならさらりと顧みられるのは
何処を顧みようと何もが歌によってだけ繋がれているからで
歌と歌によって繋がれるしかないものとが罪を紡ぎ出しては
けれど誰が歌うのか　泥が歌うのか　それとも
歌は始めから歌なので歌で　な歌が
全ての色と形と凡ゆる物の姿を泥の色に収めて仕舞うのなら
歌も泥の色も有っても無くても構わないようなもので
なのでこそ　歌と泥の色さえ有れば

全ての色と形と凡ゆる物の姿は無くて構わなくて
歌だけが泥の色を従えて独り先へ先へ生き延びて
歌われ続けて行こうけれど
けれど何の為に？　な何の為に？　など要る筈も無かろうか
歌は歌だけで歌なので歌ならば
な歌を聴き取らずに居られない耳では　な歌しか耳に入らず
いや
ない歌など　歌は始めから歌なので歌にしろ
な歌を耳が聴き取ってだけ歌でしかなく　つまり
歌など何処にも無く　無い歌を聴き取る耳だけが有るのなら
歌に罪を擦り付ける耳の罪深さに拠って
全ての色と形と凡ゆる物の姿が
泥の色の拡がりの中に映し出されているしかなかろうけれど
耳は何時までそんな耳で居られよう　それとも疾っくに
耳はその耳にだけ聴き取れて仕舞う歌によって破り棄てられ
有りもしない歌だけが歌でない全てに罪を擦り付けてそうで
二〇二二年四月二十六日　擦（なす）り

耳を弛まず犯して楽しいかに
泥の色をした歌ばかりが耳に流れ込んで来るのなら
疑わしいのは歌ではなく耳で
泥の色をした歌など何処でも流れ過ぎて行けように
なぜ耳でなければならないか
な晴れる筈のない疑いが渦を巻くならその渦が耳か　とも
渦の姿の耳を静かに眺めては
渦へ呑まれる泥の色をした歌を惜しみ憐れみながら
それでもまだ何を望めようか
な望みこそ耳より疑わしかろうかと渦を覗き込むと
嫌がるかに渦は奥へと窄まり
で晒されたた渦の底が抜けてるなら抜けた底を抜けて
底を抜けた先がぐるりと回り
回りながら拡がり渦の姿にはち切れそうな耳を包み
な耳を包んだ拡がりは窄まり
耳の中へ吸い取られて行くにしては耳の姿はぼやけ

形を崩し

そうか
ぼやけて形を崩しそれでも耳は耳か知れない
そんな耳がずっと望まれてたんだよな
そんな耳ならきっと泥の色をした歌に犯されもせず
ぼやけて形を崩して行く耳の音ばかりに耳を澄ませ　その
ぼやけて形を崩して行く音の向こうに
ぼやけも形を崩しもせずに黙って耳の音を立てる
渦の姿の耳が現れれば耳への疑いも晴れようね
二〇二二年四月二十七日

心の内では震え戦き微笑みを絶やさなければ
全て事は思い通りに運んで仕舞うのはきっと
欲しいのが何で何処で手に入るかも知れてて
そんな思う通りな眺めの中を殆ど眠り込んで
歩き続ける程に同じ処で引き摺る足を回して

踊ってるのか踊ってる積もりなのか何なのか
それは欲しい物が向こうから遣って来るのを
待ってるんだと心付くと心の震え戦きは失せ
微笑みも消え引き摺るしかないのを隠すかに
足を止めたのか止めた積もりないのか足は回り
あぁこれは間違いなく踊ってるなと暗い目で
足元を確かめたくても微笑みが絶えたのでは
もう何一つ思い通りには運ばないと思い知り
眠りから醒めたかに心は生生しくもふわりと
身を開けて固まり立ち尽くすのを狙い澄まし
それともそんな事らとはまるで係わりなしに
声が刺さる　それとも
耳が独りでにそんな声らしき音を捻り出したかでも
どちらでも構わないにしろ
その声に抑え込まれ　それとも抛り出され
（抑え込まれると抛り出されるとは全く同じだね）
醒めた筈の眠りに後ろから撫で斬られたかに背筋は反り
目の玉だけが酷く冷たくて瞼も頬も凍らすようで

目尻は尖り過ぎて切れたか血を匂わせ　そう！
そうだよ血だよ　血が何だっけ？　と先が続かなければ
震え戦く狭い心の内を溢れる血に酔うようで　どうしよう
な身を罵るのも煩わしいなら血から産まれたものを探して
そいつにこっちの血を送り込みたいもんだ
なんて間抜けな企みに微笑むと事はその通りに運んで
間違っても血に酔うなんて目付きはしていない
はち切れそうに血を溜め込んだかな張りのある肌の
常に飛び跳ねてないと居られないような
己の影まで弾き飛ばして弾け飛んだ影を笑い転げてそうな
立ってるだけなのに突っ立ち過ぎて踊ってるように見える
間違いなくその刺す声の主の　血から産まれたものに
血ではなく震え戦く心を心の儘に吸い取られ
それで微笑みも凍り付く儘なら事は思い通りに運ぼうけれど
その声に身を刺され続け　踊り続けたいとしか思う事もなく
二〇二二年四月二十八日　開（はだ）けて

白い卵を手に取ってそっと回してると　どうにも
僅かな罅一つも入ってないのに　何処かに必ず
惨たらしい割れ目が口を開けてると思えてならなくて
その奥を覗き込めない内は　卵は
ずっと手の中で回ってなくちゃいけないって思えてならなくて
けれど冷んやりしてた卵に指の温もりが伝わるばかりで
更に滑滑と全く白く輝く　その
輝きはどうにも捉え処の無くにも何処か
輝きに偏りを潜ませてるようで　その
輝きの偏りは卵の中の重みの偏りのせいで偏って
輝きの偏りは卵の中の重みの偏りを潜ませてるようで　その
重みの偏りが卵の中の身の重みを割いて　そこに…
いや重みや身が割かれるのではなく　もっと違う
卵が卵の中に孕み匿ってる卵を卵にしてる　そんな
卵に匿われながらも卵をすっかり満たして卵そのもののような
そんな何かが割かれそれは惨たらしかろう割れ目が生生しく
その奥程広くに広広と奥程深くに深深と口を開けてるようで

それともそれは卵の割れ目ではなく
卵がこっそり隠してた
この世かあの世か過ぎた世か知らないけれど　ひょっとして
そんなどの世をも合わせ全ての世を割いて割れ目かも知れず
だって卵はずっと白く輝く卵の儘ではそう思えてならなくて
けれど　秘めやかにも
世を全て貫き割いたのは全くこの卵一つの為た事ではないか　　ならば
やはりこれは卵によって割かれた卵の割れ目に違いなかろう
この世とあの世と過ぎた世が合わさっても卵一つに敵わない
そう思えてならなくても思えなくてももう　あからさまにも
世は全て卵の割れ目の傾ぐ向こうへ割かれて頽れ墜ちて行く
卵一つよりも遙かに小さく見窄らしく劣る自らを責め苛んで
二〇二二年四月二十九日

人が必ず死ぬように四月は必ず終わり
四月が必ず終わるように人は必ず死ぬ　な

空から降って来たかに出処の分からない言葉には
分かり難さの影もない
けれどそれは酷く分かり難い事ではないのか
分かり難く考えたところで憂さ晴らしにもならず
ずるずると分かり難さに何時までも引き摺られるけれど
憂さ晴らしにならないにはならないだけの事は有って
抑もこの世は何処も分かり難さに満ちていて　だからこそ
分かり易さに縋って憂さでも晴らさずには遣ってられずに
分かり難さは顧みられず置き捨てられて行くけれど
その影は燃やして灰にも出来ないのなら目は背けられない
で　どう扱えば善かろうか
空からモノを降らすのは概ね神の業だろうし
分かり難さの影もない言葉など丸きり神の言葉だろう
何も無かった昔を思い起こして考えてみれば確かに
人も四月も空から降って来たモノのようでもある
人は四月の中で生き四月は人の中で過ぎたのだから
二つは絡み合って降って来たようでもある
ようでもあるが人も四月もまやかしの作り事で

考えようでは空だってまやかしの作り事で
（だって誰が空にしたかを誰が知ろう
誰も知らない事は全て神の業にして置こうぜ　なんて
何処かで勝手に決めたならそれはまやかしの作り事だろう）
どちらがどちらと死のうと終わろうと空から降って来ようと
まやかし故に分かり難さの影もないだけで
と言うか
分かり難さに満ちているこの世で分かり難さの影もないなんて
それだけで間違いなくまやかしの作り事ではないか
それがまやかしの作り事でなかったとしたら
分かり難さの影もないなんて事こそ
どうにも分かりようもなく分かり難さそのものではないか
ならそれで善かろう　とも言えば言えよう　つまりは
分かり難さそのものには分かり難さの影もない　と言う訳だ
ではその　分かり難さの影もない分かり難さとは何だろう
いや　この世が分かり難さに満ちているなら　この世は
分かり難さの影もない分かり難さに満ちているだけで
何だろうなどと問う程の事でもないか　問うたところで

分かり難さこそ分かり難さの影もなかったと分かるだけ
の事かも知れないにしろ
分かり難さの影もなくにも分かり難さに塗れてよう儘に
四月が必ず終わるように人は必ず死に
人が必ず死ぬように四月は必ず終わる
だなんてまやかしが罷り通って何事も
終わるなら終わり死ぬなら死ぬようではどうしよう
二〇二二年四月三十日

五月

それだけは見付けたくなかった　そんなものを
見付けて仕舞ったなら見付けようとしてたんだ
そんなもの見たくもなかったって思ってみたって嘘で

仮に嘘でも見付けて仕舞ったなら嘘も嘘でないも
それをそこに見付けた処から遣り直すしかなくて
な何を遣り直してるかなんて知れた事で
と言うか知れ過ぎた事で
知れ過ぎてるのにまだ幾らでも知れて仕舞う事で
にしろ知れるなんて事は何一つ救いにならなくて
殆ど痛みでしかなくて　にしろ
痛みなんて何が痛みかなんて少しも知れなくて痛みで
それとも痛みなんて何時か誰かに知らずに知らされて
それで痛みを痛みと知れてる積もりならだけで痛みで
痛い振りでもすれば何時かの誰かに憐れんで貰えるかも
とか思って痛い思いと痛痛しく馴れ合ってるだけで
何の憐れみも掛けて貰えないとはっきり分かったなら
痛みなんて始めから嘘だったってバレるしかなく　そんな
嘘だってバレて何の痛みも投げ棄てるしかなく失って
それでも何かが残るなら痛みと呼べる筈のないものを
嘘と分かって痛みと呼べも出来ようけれど　そんな事で
痛みと呼ばれたそれは何の境目も風のように越え

水のように溶けて低くへ流れに流れるにしろ流れっ放しで
そんなそれを何処までも追っ掛けて追い越して
風も水も辿り着けない処まで遣って来られたにしろ
見付かるのは痛みと呼べる筈のないものが
ただその通りに痛みと呼べなくなって
呼べないなら呼べないだけの事で何を困るもなく　いや
痛みと呼べる筈のないものさえ痛みと呼べないようでは
見える筈のないものさえ見えなくなって
聞こえる筈のないものさえ聞こえなくなって
知れる筈のないものさえ知れなくなって
見えるものばかりが見えに見え
聞こえるものばかりが聞こえに聞こえ
知れるものばかりが知れに知れる
そんな事でどう遣って
それをそこに見付けた処から遣り直せようか
二〇二二年五月一日

そこに見付けたそれを何とも言い当てようもないなら例えば
出任せにそれを卵の形の白い石ころと言って構わないけれど
言って仕舞ったからには後へは引けず　その
卵の形の白い石ころだけから始めるしかないにしろ
直ぐにそれを酷くややこしくてうんざりする程煩わしいなと
脇へ追い遣るその脇に
硬く握り締め血を溜めたかに浅黒い拳を一つ見付ければ
恐る恐るそれを開くしかないその掌は濡れたように真っ白で
それを映す瞳の奥まで真っ白に染まって仕舞ってないかと
瞳を鏡にでも映して確かめられないものかと
鏡になるようなものを辺りに探すと何処もが真っ赤で
何処もが鏡かに真っ赤な瞳の奥がその儘に映ってそうで
ただ掌だけは目立たないなりに変わらずに真っ白で
にしろその真っ白を真っ赤と見比べると
真っ赤が色なら真っ白は必ず色では無くに
まるで違う処に有る違うものに違いなく
にしろ右か左かに拳はもう一つ有るんじゃなかったっけ

掌の他は何処もが真っ赤ならその拳は必ず
卵の形の白い石ころを握り締めてなければならないけれど
そんな拳も石ころも見当たらないのには心当たりが有って
その心当たりだけを一つ限りに頼って
拳か卵の形の白い石ころを探そうとするけれど
その心当たりに妨げられてその心当たりごと
真っ赤な中へ溶け出てゆくようで
そのすっかり溶け込んで仕舞った真っ赤な中に
それを何とも言い当てようもなく
それ一つを見付けては直ぐに目を背けるけれど手遅れで
苦し紛れに　一つ限りな
知らず握り直されてる拳を拾い物のように凝っと見詰め
その拳を開くと思ってた通り石を握ってても真っ白でもなく
すると何処もが真っ赤だった筈が真っ赤こそ色では無く
では何だ！と開かれてる儘の掌を覗き込んでも何も無く
その何も無いのを鏡に映したかに何処もが何も無くにも
何とも言い当てようもないそれ一つがまた見付け直され
あぁ見付けたぞ　繋がってたんだ

色も拳も掌も心当たりもそれも
そのどれ一つ取っても一つ限りなんだ
その一つ限りだけが有って　それがそのそれで　なので
一つ限りとも限らない喩えでしかない卵の形の白い石ころなんて
何処にも見付かる筈なくて
見付かるとしたら一つ限りのそれの裏に一つ限りの振りでもして
隠れてようけれど隠れてる儘では無いも同じで
二〇二二年五月二日

卵の形の白い石ころ…と口にしただけで必ず
一つ限りの何かを言い当てられてると思えてならないにしろ
そんな卵の形の白い石ころも
一つ限りを言い当てる喩えにされるより前には一つ限りに
卵の形の白い石ころだったに違いなく
とは言えその事までを含めての卵の形の白い石ころは
一つ限りの喩えなのもまた確かで

でしか無いので卵の形の白い石ころは喩えにも使えようけれど
ならば　どうにも喩えには使えない
どうにもただ一つ限りな　卵の形の白い石ころ
なんてものが何処かに有り得ようか
つまり　一つ限りな故に何の喩えにも使えなくて
なので一つ限りの喩えにも使えない
な　一つ限り
にしろ　この
な　一つ限り
も　全く以て卵の形の白い石ころに拠る
一つ限りに就いての喩えでしかない訳で　とすると
卵の形の白い石ころは他の何にでも換えられよう　と言うか
つまりは一つ限りが一つ限りに就いての喩えとして
一つ限りに有るのなら何の喩えも要らなかろう
な　一つ限り
にしろ　この
な　一つ限り
も　全く以て一つ限りに拠る

一つ限りに就いての喩えでしかない訳で　とすると
一つ限りは他の何にでも換えられよう　と言う事で
卵の形の白い石ころ‥と口にしただけでそれは必ず
一つ限りの何かを言い当てられてると思えてならなくて
な
言い当てられてると思えてならない一つ限りの何かのせいで
卵の形の白い石ころなど疾っくにそんな事の中へ溶けて消え
そんな事と思えてならない思いもそんな事の中へ溶けて消え
一つ限りの何かだけが輝き続けよう
いや違う
一つ限りの何かがそれ限りで輝いたり出来るもんか
一つ限りを輝かせるのは
一つ限りに溶けて消えて
一つ限りでも無くなれば堪らず自ずと輝くしかないものだけさ
一つ限りでも無いのなら
その輝きは一つ限りの何の喩えも焼き焦がそう
二〇二二年五月三日

艶めいて沈む光りの壁に隙なく取り囲まれた真っ赤な暗がりに
沈む色に艶めく布を纏う大男と二人で居なければならないなら
疾っくに床板は剥がされ穴を掘るしかないにしろ
何処を掘っても石ころのように喩えが掘り出され
喩えは石ころのように積み上がり
真っ赤な暗がりは狭く濃く息苦しくなるばかりで
大男は背を丸め立ち尽くした儘息絶えて固まって
ぶつぶつ呟くようなのは布のかさこそ擦れる音で
それとも布を剥がせば大男の脱け殻が曝け出され
な脱け殻も喩えでしか無くて積み上がる石ころと
真っ赤な暗がりが暗がりで無くならない限り激しく鬩ぎ合おう
はそれとして
真っ赤な暗がりの中に居て私は何の喩えも逃れ一つ切りだった
の一つ切りとは何が何から一つ切りなのか
だなんて喩えの罠には嵌まらないさ
一つ切りはただそれ一つに一つ切りだから一つ切りで

何の喩えにも囚われないから一つ切りなのだ
などと言い切って仕舞えばそれも喩えなので
言い切った事は言い直さなければならないが
言い直したところでそれも喩えなら
言い切ったと言い直さなければならないの間の何処やらで
ふわふわとあやふやに途切れ途切れにずれて
布のかさこそ擦れる音かに呟きか呟きでさえなく口籠もる
あぁそんな姿こそ何処から見ても誰に言われるまでもなく
喩えだよ
と
そんな何処かの誰かって何処で何してる誰なんだよ
と振り返られる向きは一つ切りで（だって私は一つ切りだから）
けれど何処ぞの誰やらに出会せるでもなく
けれど何処ぞの誰やらに出会せるとしたら喩えに違いなく
何の喩えもそこに見付からないのは寧ろ喜ぶべき事に違いなく
にしろそこに独り切りに喜んだ弾みにか
何処かの誰かは何処かの誰かにしてもそれは全く私の他になく
で無かったにしても少なくともそれは私が引き受けるしかなく

艶めいて沈む光りの壁に隙なく取り囲まれた真っ赤な暗がりで
その暗がりが息をするなら
その息に一つ切りの言葉を与え
その言葉に一つ切りが何なのかを言わせるしかない私だけれど
そんな私の替わりに何処かの誰かは石ころ一つも掘り出せずに
足元の穴を押し黙って掘り続け
真っ赤な暗がりをほんの僅かずつでも白ませ明るませるのなら
私は一つ切りとも切り離されて
微かに明るむ暗がりの布のかさこそ擦れる音かに継がれる息か
二〇二二年五月四日

艶めいて沈む光りの壁に隙なく取り囲まれた真っ赤な暗がりを
暗がりな儘に暗がりな程に光り輝かせているのは何なのかを
探しているのは何処の誰なのか　それとも暗がりが
暗がりを光り輝かせる誰かを探して光り輝くようでもあるなら
暗がりは独りで何を為てるかも知らずに何を為てるのかな

な暗がりを知っているのは私だけにしろ
な私を知っている私は暗がりを知る私から時を遥かに距たって
どちらの私も疾っくに何の私でも無さそうなら
そんな私で無さそうな誰かに出来るのは
何が出来るか知らない儘にもその出来る事の為に戦う事だけで
となれば私と私を距てる時と戦うしか無さそうにしろ
果たしてそれは時なのか　紛れもなく時にしろ時など仮の姿で
例えばそれを神とも知らずに私は神に戦いを挑んでいるような
にしても神など何かの呼び名に過ぎず
にしても神は誰からその呼び名を与えられたのか
私で有ろう筈も無いのなら
暗がりを光り輝かせているのは何なのかを探している
何処かの誰かの他には居なくて
なのにその誰かが居ないのなら
神がその誰かを殺したに違いなかろう　確かに
神は神に殺された者に呼ばれて名を与えられる
そんな事に違いない　その為に
艶めいて沈む光りの壁に隙なく取り囲まれた真っ赤な暗がりが

ここに設えられなければならないにしろ設えたのが
私で有ろう筈も無いのなら神で有るしか無かろうけれど
にしても神など何かの呼び名に過ぎず
呼び名だけのその何かが
艶めいて沈む光りの壁に隙なく取り囲まれた真っ赤な暗がりを
独り占めして居るのなら独り占めして居るらしくに
真っ赤な暗がりを暗がりな儘に暗がりな程に光り輝かせていて
その光り輝きの中に居られるのは神の名を呼ぶ者だけだろうに
神に殺されて仕舞っては居られる筈も無いのなら　身代わりに
そこに居なければならないのは　仮の姿だろうと
私と私を遥かに距てた時の姿で　他には
戦いに厭きては行方を眩ました
誰を誰とも知れない誰かの影が暗がりを静かに温めてようかな
二〇二二年五月五日

そこへだけは行き着いてはいけない処に

そこと予め決められてたに違いなくに行き着くしかなくに
それはそこへ行き着いたのではなく何処へも行き着けずに
そこでずっとそこをそこにする何かを待ってただけと分かれば
それだけしか分からなくなってそこはそこなんだなと分かれば
分かるのがそれだけでは何がそれだけか分からなくなってよう
そんなそこだけが剥き出しにされ
そこだけのそこが
そこだけのそこをそこにする何かに囚われ
そんな事をすっかりその通りに言い当てる声が声だけで
そんな事をすっかりその通りに言い当てて
なので声はただ声なだけで
そんな声には何を質しようもなく
そんな声に剥き出しの骨身ごと砕け散るしかないのかとか
そんな事を思い描けるのも骨身の在処を知れてる内で
で　何がどうなるのかな
一つそれらしいのは
そのそこだけのそこに剥き出しにされ囚われてる限り
そこは広広とした外だろうに消え失せたかに空が見えない事で

それとも空は酷く見窄らしく穢げに暗く凋んでそうで
それとも空は消え失せてそんな消え失せた空の下では
何処を逃げ回ろうと酷く見窄らしく穢げに暗く凋んだ
己の姿から目を逸らそうとし続けるしかないのが嫌で
光り輝く
そうさ　光り輝いて仕舞えば逃げ場など探さずに済むだろうし
けれど　光り輝くのは消え失せた空の下の穢げな暗がりが先で
消え失せた空の下は何処もが穢げな暗がりなら何処もが輝いて
何処へ逃げ込もうも逃げ込める処なんて何処にも無く
光り輝く
光り輝くの他には何も無くに　いや
消え失せた空だけは消え失せた儘にも独りだけ光り輝き損ない
見窄らしく凋む姿を晒して消え失せた辺りで消え失せてそうで
そんな空の下でそんな空を見ずに済む処へ逃げ込もうと勇んで
光り輝く
けれど　光り輝くのは穢げな暗がりばかり
それで　光り輝く暗がりが消え失せた空の下を覆い尽くすなら
分かるのはそれだけでそんなそれだけがそこに剥き出しにされ

声だけの声のせいで砕け散った骨身の在処も見て取れようなら
光り輝くばかりに終わらないその先の終わりようのない続きを
消え失せても消え失せた儘の空に抗って身も粉に思い描けよう
二〇二二年五月六日

空は全く穴の姿をしてるよね　と言うか
穴の姿その儘に全くぱっくり開いた穴で
あぁ嫌らしい穢らわしい恥ずかしい姿を
何故隠すとか塞ぐとか覆いを掛けるとか
そんな話しが出て来ないんだろうかって
見上げられては穴の奥を覗かれて仕舞う
空はずっとそう思い続けてるに違いなく
けれどどうにもならないのは空が全くの
穴でしかない穴だからで　そんな
空は嫌らしくも穢らわしくも恥ずかしげもなしに
全くの穴であるからには何でも呑み込んで吸い込んで　でも

空はそれで何を満たされるもなくまた呑み込んで吸い込んで
昼も夜も貪るばかりに他に出来る事もないなら無いで
そんな穴丸出しの姿を晒す儘にも
どうって事ないかにそうしてるしかないけれど
それとも空にはそれは酷い辱めかも知れないけれど
もしも空がぱっくり開いた穴じゃ無かったなら
この世で要らなくなったものを何処へ片付けられよう
空の下は要らなくなったもので溢れ返って脹れに脹れ
はち切れるしか無かろうね
「ふん　如何にも剥き出しの空の穴に怯えて　その穴の底で
おどおどしながら這いずり回ってる奴の言いそうな事だよな
確かにこの世は穴でその穴をこの空がぱっくり開けたにしろ
でもう　穴は一つ切りに何処もが穴なのさ
それがお前には見えないのか目を背けたいのか
空だけを惨めな穴に見立てれば何かの慰めにでもなるのかな
一つ切りに何処もが穴の中では上も下も有るものか
要るものも要らないものも有るものか」
それこそ如何にも

穴丸出しの姿を晒すしかない空の言いそうな事だろうよ
お前こそ　もう向こう向きに捩れて穴の奥を狭く歪ませ
見窄らしく穢げに暗く凋んで　抜け駆けでも為たいのか
それで穴を已められるともで思ってるのか
「お前にそう見えるのなら　それは
見窄らしく穢げに暗く凋んだ空と一繋がりのお前の姿だぞ
お前はもう剥き出しの空の穴に怯えてるのが耐えられずに
お前にはそう見えるだけの空を引き摺り下ろして
這いずり回るしかない穴の底を抜け出したいのさ
いや確かにお前はもう穴の底を抜け出してような
それで見窄らしく穢げに暗く凋んだ姿を晒すなら
望み通り引き摺り下ろした惨めな空の姿と同じに
お前が穴さ
一つ切りに
どっち向きにも向こう向きに捩れて穴の奥を狭く歪ませて

二〇二二年五月七日

心が考えるなら
心が考えるように
石は考えているかを考えている
その石は白くなければならなくて
白くない石が考えているかどうかはどうでも構わなくて
白い石が考えているかどうかだけが心に懸かり
白い石の姿が目に浮かんでは消え掛かり
その石は考えているのかいないのかばかり考えて仕舞う
にしろ目に浮かんでいる白い石の姿を確かめようとすれば
少しも白くもなく石でもなく姿でもないようで
それは白い石が白い石に就いて考えている
その考えの白さを目に浮かべては
その目に浮かぶ白さの中の石の考えに就いて考えたくて
その石の考えを考える為に白い石の姿は
白くもなく石でもなく姿でもないようでなければならない
かどうかなど知れよう筈もないけれど
目に浮かぶ白くもない白さの白さだけに目を凝らすように

石が考える白いなら白い考えに就いて考えようとすると
目を凝らされた白くもない白さの白さその儘に
考えている石の姿を捉えられそうで少しも捉えられずに
その捉えられなさが白くもない白さの白さへ繋がるようで
けれど
そんな繋がりなど白くもない白さの白さだけは残ろうとも
繋がってはならないかのように
それで
その石は白くなければならなくて
けれど
な白なら白など要らない
躓きの白
と
石独りが確かにそう考えた
その考えがどろどろと白く溶けて流れ込み
躓きの白に隈無く埋まる心はしかし
その儘に固まって石にもなれないのに　硬く
石が考えるより他の事を考えられなくなってるに違いなく

なのに石は考えているかしか考えられないのなら
そんな考える心こそ躓きの石ならぬ躓きの心で
心が心に躓くその心が白くなければならないのは
白は要らないように心は要らないからだろうかなどと
要らない心に躓くように白い心の姿を思い浮かべては
石が考えるように心は考えているかを石独りが考えている
それで
その石は白くなければならなくて
二〇二二年五月八日

道の消え失せた町に迷い込んだかに
道に迷ってたには違いないけれど
行ったり来たりする程に道は隈無く見慣れた道で
見慣れた道で道に迷うしかないのは全く慣れない事で
そうなると
見慣れてる程に酷く見慣れない道に見えて来て

道だろうに道とも見慣れないなら道でも無くに
消え失せた道でも辿れるのなら知らずに辿ってたのか
見慣れた家並みに一際見慣れない家を見付け近付くと
それはずっと探してた帰るべき家には違いないけれど
その家を見付けて仕舞ってはもう道に迷いようもなく
道諸共消え失せた　それとも
消え失せたのは帰るべき家かも知れず
帰るべき家を失っては
道の消え失せた町を何時までも迷ってるしか無かろう
などと
帰るべき家にすっかり居着いて
有りもしなければ思い出せる筈もない何時かの事など
忘れたと分かりながらも何が消え失せたかと顧みると
その消え失せた通りがこれ見よがしにそっと消え失せ
その後を追わずには居られず消え失せようとするのは
誰なのか
と
道の消え失せた町を何時までも迷ってる私が訝るのは

その私だけはどうやら消え失せようが無いかららしく
とは言えやはり　そうして
そんな私に就いて思いを巡らすのは
私の家に居着いてる誰かしか居ないのなら
他に為す術も無いかに堪らず
その誰かと私を私と誰かに取り換え
誰かだった私は家を飛び出し
道に迷う儘の私だった誰かの処へ駆け付けようけれど
道の為に出来たような道ばかりの町の何処を探しても
私だった誰かの姿は見付からずに私は誰でも無くなる
なんて事を
私が道の消え失せた町に迷い込むよりもずっと前から
消え失せていた誰かなら　独り
私とも誰とも取り換えは利かず
消え失せた通りに消え失せられず思いを巡らしてよう
二〇二二年五月九日

掌に乗せて嫌に軽い木箱の蓋が外れると
丸い石が入っていて確かに白かったのが
直ぐに透け暗く覗ける中は酷く散らかりにしろ
細細と象られて光りに晒されるどれもが
白を映すでもない何処かしら白くて
と
ふと白が目に分からなくなって見回すと
箱の外は確かに全く白を映すもので溢れ
この世は白が入り組んで出来たのかとも
うっかり思い込んで仕舞いそうで目さえ
白く丸い石で象られてそうで怖くなって
木箱を閉じたいけれども蓋の行方が知れず
蓋など探す内に身も心も白に侵されようならば
蓋は諦め石の中に目を凝らして凌ごうと
思ったのか思わなかったのか何時か目は
細細と象られているものの中へ紛れ込み
何処へか行方は知れず目が目を探すのも

どうなのかとも凝らされる目は丸く白く
石そっくりに木箱にそっと一つ収まって
白いばかりなこの世を苦しげに眺め渡して
あぁ何もかも影さえすっかり白いなんて
なんて呟いたのは目か石かさえ分からず
いや
目か石かも分からないのは却って救いで
つまり目と思えば目で石と思えば石なら
白いこの世を目で眺めるか石で眺めるか
同じ白ばかりな眺めでも色色と違おうか
と
ここで何かを間違えたに違いないけれど
きっと目の眺めと石の眺めでは違い過ぎ
何を間違えたかなど見極めようもなくて　もう
同じ木箱の中からの同じこの世の眺めは
救いようもなく異なる事柄で出来ていて
目がうっかり向きを変え石の中をすっかり覗き込んだりしたら
目に拠る事柄と石に拠る事柄はこの世の果てまで相容れず

この世は果てなく壊れ続けて行くしかなかろうけれど
それを目も石も同じ笑いで笑い転げて楽しもうか
二〇二二年五月十日　細細（こまごま）

白は見えない（それともそれは見えて仕舞えば何でも無い）
見えない白は踏まれた蛇が藪へ逃げ込む姿で立ち向かって来る
にしろそんな慌てた蛇の尻尾が這い回るようなだけでは
黙って見てるしかなくても白は見えなくて　そんな
白の動きには立ち向かえないなら白にされるが儘で
白が見えて来るまで白に囚われ立ち尽くすしかない
（しかし見えて仕舞えば何でもないなら
見えるそれは白でも無くて白が見える事はない）
なので　そんな白が白な訳だが遣りようは有る　例えば
白の匂いを嗅いで白の在処を突き止めるとか
白の味を舌で転がして白と馴れ合うとか
白の声を聞いて…　いや

白の声だけは聞いてはいけないよ
と白の声が聞こえて来て仕舞っては這い回る蛇は
藪へではなく耳の中へ逃げ込んで来て　そうなっては
それは立ち向かって来るどころじゃない
黙って見てれば見えないどころじゃない
けれど何も変わらない　やっぱり
白が見えて来るまで白に囚われ立ち尽くすしかない
けれど一つだけ
分かった事が有る（それとも分かり掛けてるだけか）
白は声だったんじゃないか
だなんて思っちゃいけなかったんだ　だって
白が声な筈ないじゃないか　って白の声が聞こえて
白は見えて仕舞う　然も見えても白の儘に
で見えて仕舞えば声じゃないようでも
見えて仕舞う白が白の儘なのが
どうにもならなくて堪らず蛇が藪へ逃げ込むように
這い回るように白へ逃げ込む姿が私なら私で
私で無ければ私で無かろうにしろ

そんなものと見定まれば何でも無くなって私は
白へ逃げ込めたなら白は見えなくなる筈だろうけれど
見えなくて白は白なら
それが私なら私で　そんな私が今更どう遣って
私で無ければ私で無い処へなど逃げ込めようか
二〇二二年五月十一日

白は見えるか見えないか
見える白と見えない白が有るように
内と外とが有る　なんて考えが躓きの元で
白は見えるなら見えるし
見えないなら見えないのなら
白に見えるも見えないも無いように
内が内で有れば何処もが内で
外が外で有れば何処もが外なら
何処にも内も外も無い　そんな事だよ

だなんて考えこそ全く内向きな考えで
その内の外には全くの外が外を向いてる
にしろ　かと言って
内と外が有ると考えれば内と外が有るかと言うと
内と外の内に内は有っても
外は内と外の内には無かろうね　だって
内と外の外と言っても内有っての外ならその外も内の内で
な内の内から切り離されてなくちゃ外じゃないからね
なので
何処にも内も外も無い　そんな事から始めない限り
外は何処にも無くて外を外とも知れない
な外を
な外が外に有るにしろ果たしてそれを外と知れようか
見えない白が有るにしろそれを白と知れようか
それは知れないなら知れなかろうけれど知れるなら
知れるも知れないも無くに知れるしか無かろうね
だなんて考えこそ全く知れた考えで
そんな事で知れるの知れるは何を知れようか

けれどそうしてそりゃ何も知れないよと知れたところで
何を知れるのでもないと知れるだけで
それは何も知れてないだけだろうね
なんて考えが躓きの元で
知れないなら知れないものはどう遣ったって知れないさ
それだけの事でそれが全てなんだけれどそれが全てなので
そんな全てなんて何も知らない全く違う処に
知れるだけが知れるだけで知れているよ
けれどそれは何の考えも係わらない躓きそのもので
躓きだけが躓いてるよと知れてるだけにしろ
そう知れてだけ知れているのは何処までも知れているよ
だって躓いてるからにはそれが躓くって事でしかなくに
二〇二二年五月十二日

鏡は何も映さない
何も映さないとも映さない

それを知ってるのは私の知る限り私だけなようでも
私が何を知ってるか鏡を前にすると甚だ覚束なくて
抑も鏡の前とは何処なのか知れないし
そんな処に誰が居られようと言うか
抑も何も映さないとも映さない鏡をどう遣って鏡と
知れたのか
いや
それをその通りに鏡と知れた処に私が居て　それで
鏡は鏡　私は私　と取り敢えずは言えよう
にしろ　そこに
何も映さないとも映さないなら鏡も私も影すら無く
その影すら無い前に何も映さないとも映さない鏡が
有るとだけ知れてその知れてる事だけが有るのなら
その知れてる事だけがその知れてる事だけに映って
そう映ってると知ってるらしい誰かが独り切りなら
それをその誰かが私と呼んだとしても誰も困らない
な私でしか無いのなら私が私と呼ぶ私とは違う私で
何も映さないとも映さない鏡が有ると知れてるのも

知れてようとその知れてるのとは全く違う事で　「
違う事？
ほおぅ　でも違う事にしろ
その事は必ず何処かに映ってなくちゃいけないし
その映ってる事の他に違う事なんて何も要らないし
なら何の違う知れてる事と知れてる事も同じ事の内で
そう知れる事だけが何処かに映ってるに違いなくて
そんな事が鏡なら鏡で鏡で無いなら無かろうと　な
そんな事が何も映さないとも映さない鏡で無かろうと
そんな鏡になって　それは鏡と違うなんて事もなくて
そんな事をそこに映して他に違う事なんて影すら無く
そんな鏡の他に影も無い鏡が鏡に映るのを知るのなら
それを映す鏡は
何も映さないとも映さない鏡を鏡と映すしか無かろう
」な事を知って仕舞った私はそんな鏡には何なのかな
独り何処にも映れない姿を影すら無く鏡の前に晒して
二〇二二年五月十三日

何もが鏡に映る通りでは何とも厳しいけれど　そんな
何もが鏡に映る通りなんて分かり切った事さ
と分かるしかないのはもっと辛く厳しいかも
けれど遣りようは有って（誰もが思い付こう）
鏡を割って仕舞えば済む訳で
鏡なんて脆いもんで直ぐに割れて　でもそしたら
割れた鏡に殆ど張り付いてたかな
疵一つない小っちゃな合わせ鏡が剥き出され
割れた鏡の欠片を一つ残らず映し
何もがその合わせ鏡に映る鏡の欠片に映る通りでは
何とも厳しいのか厳し過ぎるのか
なんて事を考えたって何の遣りようも　もう無いなら
馴れるしか無いけれど馴れたところで何も変わらず
けれどその何も変わらないなんて事は有り得なくて
何も変わらないせいで却って何も変わらない儘かに
全てが変わって仕舞うけれど何も変わらない儘かで

それっ切り何も変わらない　つまり
何も変わらないなんて事は有り得ない　その
有り得ない事が有り得ない儘にも有り得てるその儘を
疵一つない小っちゃな鏡は映してなくちゃいけなくて
何も変わらないなら過ぎてよう筈の時からも距てられ
割れた鏡の欠片も何も変わらない事しか映せてなくて
割れた鏡の欠片が剥がれ落ちて行こうが行くまいが
時から距てられる儘に疵一つない小っちゃな鏡一つが
一つ限りに残されれば疵一つないとも小っちゃいとも
鏡とも何も変わらない儘に見分けられなくなる儘にも
それは何一つ変わらない儘なそれで有るしか無くに
そんなそれで有る儘に変わり続けて已まない
一つ限りなそれをそれへ映そうと企てるなら
鏡がそっくり鏡だけを映す鏡の外へ還れよう
二〇二二年五月十四日

この世を映す鏡を無くして仕舞ってはこの世が
この世を映す鏡を無くしたこの身を映す鏡になり
この世の鏡に映されて佇む細い影のような身が
何処を向いても音を消して湧いて出る　な事では
な事が何時までも続く訳は無かろうとは思うが
な事に馴れて仕舞うだけでそれより何も起きない
にしろ
この世を映す鏡を無くしたこの身を映す鏡なだけのこの世は
それで果たしてこの世なのか　と疑われるにしろ
この世を映す鏡を無くして仕舞った身では
この世に就いての手掛かりは
この世の鏡に映る鏡を無くしたこの身だけにしろ　ならばと
この世を映す鏡を無くしたこの身ばかりが全くその儘に
この世なのだとも言えば言えようが　そう言ったところで
な事に馴れて仕舞うだけでそれより何も起きない
にしろ
この世はこの世の何処を何処まで歩き回ろうと
この世の鏡に映る

この世を映す鏡を無くしたこの身に出会すばかりでは
な事が何時までも続く訳は無かろうとは思うが　な
な事とは何か　に就いて　な事では何を知れようか
などと疑えば疑えようが　そう疑ったところで
な疑いが
この世の鏡に映る鏡を無くしたこの身に纏わり付くだけで
しかし　となると　その
疑いのこの身への纏わり付きようは　その時時で色色で
な色色の高がその綾に過ぎないにしろ　それに
馴れたり馴れなかったりで　それより何も起きないにしろ
この世を映す鏡を無くしたこの身の姿も　その時時で色色で
その　例えその綾に過ぎないにしろ　その時時で色色が
この世を映す鏡のように思えて来て　恰も
この世を映す鏡の換わりになってるようで　に
なこの世の鏡に映るこの身の姿が恰もこの世を映す鏡なら
な事に馴れて仕舞うだけでそれより何も起きない
にしろ　それで
この世を映す鏡を無くしたこの身を映す鏡なだけのこの世を

それで果たしてこの世なのか　と疑わてるかが疑われ
に疑いが疑わしいようでは疑い直そうにも
疑いが何か知れなくなって
それで果たして
この世を映す鏡を無くしたこの身を映す鏡なだけのこの世を
抜け出せたのかどうなのか
少なくとも見失っては居られるようで　ならばそこに映る
この世を映す鏡を無くしたこの身の姿も何処へか紛れて
消えたろうか　にしろ　な消えたか疑わしいこの身の姿は
この世を映す鏡を無くして　見た事も無いならきっと有りもしない
この世の鏡に映されて佇む細い影のような身を探すばかりなようで
二〇二二年五月十五日

そこはそこに居なければならずにそこなら
それでそこに就いて言える事は尽きている
そんなそこに居た時

の時は流れも止まりもしない
過ぎ去りも戻りもしない
損なわれも彩られも甦りも失われもしない
それでその時に就いて言える事が尽きているかどうかは
時の首根っこでも掴まえてみなければ知れないだろうが
時は必ず
どの時も断ち切られ　どの時からも
再び繋がる事はなく距てられて時で　誰も
な時と時を跨いで行き来も出来ずに
断ち切られた一つの時の中に囚われ　ふと
違う一つの時からその囚われた身を
距てられた儘に思い遣れるなら時は
生生しく断ち切られた儘に晒される　な
晒されるに切り開かれて時は時で　にしろ
切り開かれ晒されたのならば時と時は
距てられた儘にも再び繋がったのではないか
などと見誤ってみたところで何が起きるでも
無く

時に囚われた身では
時が切り開かれ晒されようと
その一つの時の中でしか生きられない身を守るしか無く
そんな身を匿う時が
切り開かれ晒されて
身の為に為る事は一つも無く
にしろ時と時は断ち切られ距てられる儘なら
時の中の身と身は傷付け合う事も無かろうが
にも
弾みで距てられる儘な筈の身と身が触れ合いでもすれば
己一つの時と身を守る為には違う時と身は殺すしか無い
にも
な事らは疾っくに済んで断ち切られ距てられて時は時で
何が見出され甦るでも無くに時と切り開かれ晒されよう
二〇二二年五月十六日

日影が溢れる窓にぐるりと囲まれ
日影の限りなさには影で立ち向かうしかない
私は有り得ない事のように私が何者なのかを知っていて
私が知っている通りのその何者は
日影の限りなさに囚われた蹲る影でしかなく
その顔形はその影を凝っと真っ直ぐ眺める目に委ねられ
その目は険しい限りに険しいので
蹲る影に険しい限りの私の顔が刻み付けられ
私に知れるのはその険しい限りの顔な限りの私なだけで
険しさで向き合う険しさだけでは
日影が溢れる中に閉ざされ二人切りの私達は
互いの身を離れた儘ぐらぐらと揺らし合うしかなくては
有り得ない事のように私は独りで
蹲る影をぐにゃぐにゃと空っぽな塊のように
巧みに操り険しい目を険しい儘楽しませなければならず
私の顔は険しい上にも険しくなり
すると険しい目はまるで虚ろで険しさは失せ
けれど虚ろななりに険しく尖る形は影を深く刻んで残し

ならば私の顔もそれに似るようで
蹲る影は険しく尖る顔付きに重く刺し込まれ
その重みに粘り着くように影の動きは見る見る鈍くなり
空っぽな塊だった筈が中に色色と
隠してる物をすっかり影は吐き出したそうで
口が上を向いて開き影の底へ日影が真下に激しく差すと
濃い影を落として煌めく何だろう
きっと険しい目を楽しませる為に取り揃えた
子供騙しの絡繰りか何かが互いを動かして生きてるかに
狭そうにも独りでに躍り出しては
立つ瀬を無くして私は有り得ない事のように
私が何者なのか知れなくなって何者かはもう私では無く
険しく尖る儘にも虚ろな顔付きが
何者の顔ともなく蹲る影から剥がれ落ちると
それを眺める目に険しい限りの険しさが活き活きと甦り
日影が溢れる窓にぐるりと囲まれ
日影の限りなさには影で立ち向かうしかない
影は有り得ない事のように影が何者なのかを知っている

二〇二二年五月十七日

過ぎた時を甦らせたくて甦られない時に囚われ
日影の限りなさから逃れようのない処に居ては
時の中に嵌め込まれ比べようのない身は苛まれ
流れる時に流され流されようのない姿を晒せば
死にたいのにずっと死にようのない様に怯える
時など流れないと知り尽くしながら尽くす程に
流れる時が目に浮かぶ浮かんだ時に身は攫われ
こんな事は有り得ないならその無くなる処まで
行くしか無いと思う何が行くと何が思うのかを
考え倦ね心を酷く荒ませてやっと心は落ち着き
な心を捨てたのが効いて身は軽やかに躍るかに
もう出来ない事なんて何も無いぞと逸りながら
その出来ない事とだけ組み合い身動ぎもならず
過ぎた時を甦らせたくて甦られない処に居ては

日影の限りなさから逃れようのない身は苛まれ
時の中に嵌め込まれ比べようのない姿を晒せば
流れる時に流され流されようのない様に怯える
死にたいのにずっと死にようのない時に囚われ
時など流れないと知り尽くしながら身は攫われ
こんな事は有り得ないならその無くなる処まで
行くしか無いと思う何が行くと何が思うのかは
身は軽やかに躍るかにその何とだけ組み合えば
自ずと考えは纏まってその何だけが逸りながら
出来ない事なんて無い事が消えて無くなる処へ
前のめりに転げ回って行くにしろそれを見送る
死にたいのにずっと死にようのない身は遅れて
日影の限りなさから逃れ時など遣り過ごせよう
二〇二二年五月十八日

この世の成り立ちから全てそう設えられていたかに

行き成り始めから働くしかなくて働くしかなかった
誰に言い付けられた訳でもないけれど
必ず働かなければならないかに働かなければならなくて
何故働かなければならないかと考えたところで　どうせ
何も知れない　と言うか抑も考えられもしてないだろう
しなければならない事が有るからなどと思ってみたって
そんな思いはあっさり消えて何を思ってそう思ったのか
それさえ思い起こせないようでは何かを思うのからして
嫌になる　あぁ嫌だ
けれど　あぁ嫌だ　もきっとその時限りの思い過ごしで
ずーっと　あぁ嫌だ嫌だ　が続いてもそれもずーっとな
思い過ごしで　にしろ
あぁ嫌だ嫌だぁぁ嫌だとずーっと思い過ごし続けるなら
ま　そんな事に窮まるだけで　何を思うも知れた事さと
何を知れたかも知りたくもなく何が嫌かもあっさり忘れ
働くしかなくて働くしかなかったけれど働いて居るのは
私独りで　いや
この世の成り立ちからこの世の全ては働いて居るのだが

それは間違いなくそうに違いないが　何故か私は独りで
働くしかなかった　いや違う　そうかやっと分かったぞ
働かなければならないなら働かなければならないけれど
私独りは働こうにも働けないんだ　だって独りだから！
私独りがこの世の悉くが打ち揃い働くその外に食み出て
働こうにも働けないせいで嫌でも働かなければならない
行き成り始めからそんな処に押し詰められ独りを押して
働こうとして働けず嫌嫌働く振りな働きをしてるだけで
それが私には働くって事の中身の全てで　そんな事なら
ま　そんな事に窮まるだけで　何を思うも知れた事さと
まるで何だか知れない事に手足を動かし頭だって働かせ
そうさ　これは全く働くって事だぞって心だって働かせ
手足が痺れて動かなくなるのでも待って待ち切れなくて
今よりもっと危ない事を探す為に働く事になってそうで
その先には命に係わる酷く危ない事が必ず待ってそうで
そしたら心は浮き浮き何を嫌だとも何も思わなくなって
進んで働く事に打ち込んでは居るにしても　こんな私に
似た奴に屍の他は一人も出会えないのはどうしてかな？

まぁそんな事に窮まるだけなので私は独りなのにしても
二〇二二年五月十九日

神には恐らく三つ有って
一つ　この世の外に有る神
この神を疑わない人は神の名さえ騙れば
この世をどうにでも出来て仕舞いそうだ
二つ　この世の内に有る神
この神を疑わない人は神の名を騙ろうと
既にこの世に神は有るのだからそれより
この世をどうしようとも思わないだろう
三つ　この世の外にも内にも無い神
この三つ目の神は有るには有るけれど
人から見れば間違いなく無い限りには無くて
神にしても神の数に入れて欲しくもなさそうなので
無い事にして（と言うか抑も無いのだから）

それで神は何も困る事はなさそうで
この神を疑わない人はきっと自らが
この世の外からも内からも無くなるのを願うだろう
もう一つ
この世の外にも内にも有る神も有りそうだけれど
いや　きっとそれは有るに違いなかろうけれど
人は果たしてそれを神として見付けられようか
確かに
先ずこの世の外に有る神を見付けて　それから
その神をこの世の内にも見付けられるなら見付かりそうで
先ずこの世の内に有る神を見付けて　それから
その神をこの世の外にも見付けられるなら見付かりそうで
けれど行き成りこの世の至る処から湧いて出て来るように
この世の外にも内にも神が有ると人に知り得ようか
先ず人はこの世の外か内かを見付け　外と内とを見付け
そして外か内かどちらかに何も無いのを見付け
それとも外にも内にも何も無いのを見付け　その無い中に
神を見ないでは遣って行けないと思い知らされる事で

他に何とも換えられない神の事を知るのではないか
もし仮にこの世の外にも内にも始めから神が有って
何も無いのを何処にも見付けられないようでは
その神を人は神とも知りようがなく
人に知りようのない神は人にとって神で有り得ようか
それともうっかり知り得たにしろそんな神は直に忘れられ
（うっかりが繰り返されない限り）
この世の何処にも有る儘にもう思い出されもしないだろう
二〇二二年五月二十日

ふーん
それで神に就いて考えてる積もり？
考えられる神など神では無いよ
神に就いて考えている考えの一欠片でしか無いよ
とは言え
神に就いて考えられない処には

神は有り得ないのも確かだよな
などと考えているのは何の事を考えているのかな
神に就いて考えている考えの一欠片を考える事が
神に就いて考えているかどうかを考えてるにしろ
それは神に就いて考えられていないのだとしたら
（だって考えられる神など神では無いからね）
神と違う事に就いて考えていると考えるしかなく
だったら目先を変えて神を何かと取り換えたって
何の事も無さそうにしろ言葉だけ取り換えたって
考えられる神は神では無いならそれで
神を何かと取り換えた事にはならないし
仮に考えられない何かと取り換えられたとしても
取り換えられた何かはどうにも神ならんじゃないか
なんて事なら神を何とも取り換えられてない訳で
などと考えているのは何の事を考えているのかな
ま　少なくとも
何の事を考えているのかなに就いては考えていて
その考えの一欠片が

考えられない神とどう繫がるかに就いてまでなら
どうやら考えてられそうにしろ
それが神に就いて考えているのだとしたら
神に就いては何も考えられてはなくて
それが神に就いて考えてないとしたら
神に就いて考えてるのかも知れなくて
かも知れない処で神とどう繫がるかに就いては　そんな
どうやら考えてられそうにしろ
などと考えているのは何の事を考えているのかな
などと考えて何になるのかなとは考えてそうでも
などと考えてそれが何になるかを考えたところで
その考えた処からは考えられない神へは繫がらず
そこで何も考えられなくなるなら
考えられる神など神では無いよ
なんて事だって考えられなくなってるに違いなく
そんなそこへなら
考えられない神もふらりと迷い込んだりするかも
なんて少しも考えずに居続けられたなら

考えられる神が神で無いのと同じに
考えられない神なんてきっと要らない事にしろ
間違っても
要らない事が神だった
なんて考えて仕舞ったら始めから遣り直しだよ
けれどそれを考えずに居られようか
なんて考えて仕舞っても始めから遣り直しだよ
などと考えているのは何の事を考えているのか
始めから遣り直すしか考えられていないのなら　その
始めの考えを神と違う事に就いてと取り換えてはどうだろう
にしろ　その
神と違う事に就いては考えられるのか考えられないのか
それを考えられるのか考えられないのか
それを知れなければ始めの考えを神と違う事に就いてと
取り換えられたかどうかも知れないに違いないよな
などと考えているのは何の事を考えているのかな
で終われるなら遣り直しも要らないにしろ
でも　どう遣って？

二〇二二年五月二十一日

「考えられない神に就いて考えたってどうにもならないなら
考えられる神に就いて考えに考えて
その考え抜かれた神に就いて考えてたら　何時だって
神に就いて考えてられるんじゃないの？」いやあのね
考えられるものと言うのは考えるのを已められるものだよね
それは考えるのを已めれば消えて無くなって仕舞うものだよ
考えるのを已めても消えて無くならないのが神だと言うなら
そこでもうそんな神に就いてすっかり考えて仕舞ってる訳で
その神はその神に就いて考えていない限り有り得ない神だね
で　そんな
神に就いて考えるのを已めただけで
何処かへ消えて無くなって仕舞う神を神と呼んだところで
或いはその神に就いて何を考え抜き何を知れたところで
それは何の事でも無いよ　何かの事だったとしても

コロコロ転がる石ころの事だったかもしれないよ
コロコロと神に就いて考えている考えの一欠片を
それが神かのように転がしては居たかも知れないけれど
転がすのを已めて見直せば　それは嫌でも
神と違う何かに就いて考えてた考えの一欠片と
見分けが付かなくなるだろうね
例え神に就いて考えてたのを忘れずに居たところで
例えその神が日日君の考えの中で甦ってみたところで
ふとそれが石ころに変わってたって
ふとその石ころを神のように思えて仕舞えば　それは
そんな石ころで済んで仕舞うような事なのさ
そんな神なら　それが神で有ろうと
神としてのそれは要らないんじゃないか
けれど
考えられない神は
どう間違ったって石ころと取り違えられたりはしないよ
考えられない神に就いて考えるのを已めてみよう
何が起こるだろうか

何も起こらないよね　その何も起こらない処で
考えられない神は考えられない神の儘に有るよ
などと考えられて仕舞えばそれはもう
考えられない神に就いては考えてなくて
けれど始めから考えられない神なんだから　ま　そんな事で
残るのは　ただ
考えられない神に就いて考えた考えの一欠片でしかなくても
何も起こらなくて
その何も起こらない事が起こり続ける事が
事の全ての儘に起こり続けるなら
考えられない神は考えられない神の儘に有って
考えられない神に就いて考える事も要らないかな
などと考えられて仕舞えばそれはもう
考えられない神に就いて考えた考えの一欠片でしかなくても
二〇二二年五月二十二日

考えられない神の儘に考えられない神が有り
他には何も無く何も起こらない
そんなそこに居る儘に何処へも行けないのは
そうであるのでそうでしかなく
他に考えようはない
などと果たして考えられているかも知れずに
いや　間違いなく何一つ考えようも無いよね
神の儘に神が有る他に何も起こらないのでは
にしろ
そんなそこに居るのは誰だろう
必ず確かに誰かが居るのも間違いない
誰も居ない処には何も起こらない事も起こらないからね
と言うか果たして誰も居ない処なんて処が有り得ようか
誰も居ないそこを誰も居ないと見て取る誰かが居る筈で
それが神だとして
（だって神の儘に神が有る他に何も起こらないのではね）
神の他に誰も居ないのでは
その神を神と知れるのは神だけでその神を知る神独りが

そんなそこに居る儘に何処へも行けずに
そうであるのでそうでしかなく
とさえ何一つ考えようも無くに
何も起こらない儘を起こらない事の儘に
その儘に神の儘に有る　恐らくはそれをそうとも知らず
（そんな神の儘に有るなら知るなんて事も要らなくて）
と誰が知るのだろう　神しか居ないなら
そんな要らない事を何の為に神は知るのだろう　謎だ
などと言う疑いは有り得ない　何故なら
考えられない神を疑える筈も無かろうからね
とは言え　と言って仕舞っては
考えられない神の儘に考えられない神が有る
とも考えられない筈で　にしろ
考えられないのは誰が考えられないのだろう
とは考えられて仕舞うけれど
考えられないのも考えられて仕舞うのも
神の他に誰も居ないのでは
その考えられない神が神自らの事を考えているしか無く

でも　どう遣って？
などとも疑えなくて　それで
そんなそこに居る儘にそんな神の儘に有る儘に
そうであるのでそうでしかなく
いや違う　必ずどのようにか
そうであるのでそうでしかないのでなければ
その神の儘には有り得ない筈で　けれど
そんなそうであるのでそうでしかないならどのようにか
そんなそうであるのがそうではないのでなければならず
神はそんな神の儘が祟り神を滅ぼそうとも企んでそうで
でも　どう遣って？
と　これは疑いではなく神の叫びか何かかな
二〇二二年五月二十三日

何も起こらない事しか起こらない処には　必ず
神の儘な神が神を滅ぼそうと企む事だけは有る

そして何も起こらない事しか起こらないのでは
それが一つ限りに
確かな事かまるで確かでない事かは
確かな事とは何かが分からない限り分からない　な
確かな事とは何だろうと神だけが問える訳だが
その神に問われる確かな事な事の折り重なりに
神は確かな事とは何だろうと問うも問わないも
同じだよなとその確かさを見ればそれだけが確かな事で
な確かな事だけが有ってその確かな事だけが神なのかな
なんて筈もない神ならやはり滅ぼすべきと神は思い知り
な事を思い知るも知らないも神の儘に神は滅び掛けてる
な神の姿を滅び掛けてる神の姿に映すしかなく
な映る姿を見て仕舞うのでは必ず滅びて行ってようにも
滅びる儘に滅びようも無くに神の儘に神な自らを呪うか
自らに呪われるかなんて神など疾っくに滅びて滅びない
神だけが神の儘な神が神を滅ぼそうと企む事だけは有る
に違いないにしろそれをそう知れたところで神は滅びず
滅びない神の滅びないだけの神の神で有る事の虚しさに

滅びる神の姿を見ないでは神で居られないなら居られず
な神の姿に耐えられずに神が神を拒んでも拒む神の姿を
何処へ映せよう何処へも映せないなら映せない処へ映し
映せない処へ映した神を神が神と崇められる筈も無くて
神がその神を拒むなら拒まれた神は拒まれる儘に滅ぶか
その拒む神を拒み返して滅ぶにしろ拒む神まで滅ぼして
神は確かに滅んだその確かな事だけは残るしかないなら
それより何も起こらない事しか起こらない処には　必ず
神の儘な神が神を滅ぼそうと企む事だけが有るしかなく
けれどそうして有るだけの企みが既に神を滅ぼしている
のならそれは起こる限りの事が起こっているに違いなく
それを起こした神が甦るかそれとも始めから神は神な儘
滅びて居たかを知りようの無い神なら神の儘な神を棄て
神で無い神な儘にその神で無い神な儘な神を滅ぼそうと
企むその企みとは何を企む事なのかその問いと答えとが
転げ回って先へ先へと逃げて行くのを追うしかない神は
神を神とも知れない神かそれともそんな神は神では無く
な無い神で無い儘にも何の問いでも答えでも無くなった

それとも始めから何の問いでも答えでも無かったそんな
ただ先へ先へ転げ回るだけのそんなそれを追うしかなく
な確かさへ全ては呑まれ残った確かさだけが神を知ろう
か

二〇二二年五月二十四日

な
神を知れたなら知れた処に
神か神に似たものの姿でも見付けられようかなんて
何処かを覗き込もうなんてしちゃいけなかったんだ
だってそんな何処かなんて何処にも無いか有るかも
見えないようではね　いや
見えないようなら見えないようなだけで
それより何も起こらなかった事に出来るに違いなく
けれど何も起こらなかったのと違う事が
起こって仕舞ってるに違いないその違いない事を
もう何処かに覗き込んで仕舞ってるなら　そんな

何処かなんて何処かじゃなく　全く見えてる儘の
その見えてる儘なそんな儘に
そこに有る儘にそこに映ってるそれで有るしかなく
あぁ　そんな有るなんて事の何ておぞましさ！
なんて極めた科白を極めたところでおぞましさは
ビクともせずに　有る儘にその儘を映すそれが
有る儘で有り続けるばかりなおぞましさなんて
きっともうそんな事では少しも無くにも　ただ
有るなら有るばかりで　な
有るばかりで有って有るばかりなそれがそれを
そこに覗き込んでるそこが何の有るばかりをも
呑み込んだのか呑み込み返されたのか　で
どっちが有って無いのか無くても有るのか　な
有るしかない事への疑いだけが有って有る儘に
見上げる先には必ず　いや
その見上げる先こそ　いや
その見上げられる事だけが有って
見上げられる先も何も無い事だけが有って

見下ろそうにも何を見下ろせよう
と言っても見下ろせるなら神しか無かろうけれど
に　見上げられる事だけが有る儘に有る儘なら
それが神を知れている事である他には無くて
起こる限りの事が起こってように　それも
その限りな事である他には無くて
知れる限りの神が有って有る儘にも
神を知れたなんて事は　疾っくに何処からも失せ
見上げられる事の後ろに棄てられ砕け散ってそうで
二〇二二年五月二十五日

有る儘の神は失せ
失せる儘に有って
有る儘ならそこに
有る姿を現そうか
などとも

知れたからには知れる儘な神に就いて
それは何処の何だろう？　と問う
（問わずに居られようか　だって
有るものは有るだけでその有る事の問いの姿ではなかろうか
と問う）この誰かはもう神の他には居ない　その
この誰かを仮に私と呼ぶなら私だた独りが神で有るしかない
（仮にしろ　しかし
仮にこの誰かを彼とかあなたとか××とか呼んで仕舞ったなら
それをそう呼んだ誰かがもう一人居なければならなくなる
のでやはり仮にとは言えこの誰かは神の儘に私としか呼べない）
その神として呼び出された私は　しかし
その私の外を向いて神が何処の何かを問う事は出来て仕舞う
それともそのように問う事しか出来ないとも言えるだろうか
（外とは言っても　この外は内と言っても構わないよね
だって　仮に内を向いて内に何かを見付けても
それを見付けた誰かにしたら　それは
それを見付けた誰かの外に無ければ見付からないからね
幾ら内だけを向いていても　うっかり

そこに何かを見付けて仕舞えばそれは外でしか無く
内なる外などと言えば言えるだけで外には違いない
仮に何処までも内を向き続けられたにしても
そうして居るのが分かって仕舞えばそれは私ごと外で
もしそれを分からない儘なら内を向くとも何処も向くとも
私が何をしてるとも分からなくなるしかないよ）
そしてその内なるにしろ外にその誰かは
神を見ないかも知れないけれども見るかも知れないし
神が何であるかを知れるかも知れないし知れないかも知れない
何故そんな事が出来て仕舞うのだろう
そして
何故そんな事が出来て仕舞うのだろうと問えて仕舞うのだろう
その答えを
私だた独りに神の儘に有る神は知れようか　それを
差し当たりにしろ知りようが無いと知るしか無いなら
そんな　ただ有る儘では有り得なくなった神である私は
逃げ道を探すしかない　それとも逃げ道からも逃げて
逃げ道ではないと自らに言い聞かせ何かを探すしかないけれど

何処に？
内を向いても外しか見付からないような処で
二〇二二年五月二十六日

神で有る儘な神が神から逃げ出せる筈はないよ
ならば神は独りの儘にそこで毀れるしか無かろうね
毀れた神は神だろうか
神かも知れないし神でないかも知れないのなら
答えは要らないのかも知れないけれど要るのかも知れない
にしても
な事が見えに見えて仕舞う処には誰が居るのだろうか
な私を私だけが見えに見えて仕舞う処に私は居られるだろうか
私もまた毀れてようか　毀れた私は私だろうか
私かも知れないし私でないかも知れないのなら
そんな私に見える事とは何だろう
などと問える私が何処に居られよう　居られないなら

この見える事を見ているこの誰かは誰なのか
それともそんな誰かも居なくて
ただ見えている外が外に有るだけなのか
でも　どう遣って？
な
でも　どう遣って？
の声は何処から聞こえて来るのだろう
それも
な声は声で有るだけで声なのか　な声は有り得ようか
でも　どう遣って？　と声は　絶え間なく繰り返され
でも　どう遣って？　どう遣って？　どう遣って…
その一つで無い繰り返し
仮にそれだけが神の業で有るしかないのなら
（しかし「仮に」とは何が何に仮になのか
それだけが有るしかないのなら仮にの外に何かを設けたところで
それだけが有るしかない　その
必ずそうで有るだけの事が有るに違いないのを拒めようか
仮にでも拒めるのならその仮に拒んだ事だけに因って神も拒まれよう

たったそれだけの神を拒んでみて何を拒めた事になろう
少しでも神の事に近付きたいなら「仮に」は棄て　必ず
必ずへ向かって進まなければならないね）
その一つで無い繰り返しだけが神の業で有るしかないのなら
神は独りではない　何故なら
神の業の声が一つでないなら
神が独りである拠り処は失われようから
（と言って一人から二人にも三人にもなるのではなく）
神は独りである事には係わらない　つまり
神は独りでも独りで無いでも無く神で有る
となると　となった儘に
独りから呼び出された私は消えるしかないよ
私は神には要らないし　ならば
私と言われて来たこの誰かも神には
その神との係わりからして誤りだったって事かな
二〇二二年五月二十七日

独りでも独りで無いでも無く有る何か
その何かから導かれると知られる　それとも
その何かに係わって来る
そのような事として何かが　その
何かまたはその何かに係わる何かなら
それは神と呼ばれるものとしか有り得ない　どや」
しかし誰がそれを神と呼ぶのかな　もう誰も居ないよ
ならば
それはそれであるだけのそれとして有る　と
その有る事にそれだけが係わる事だけがそれにとってだけ有る
「だけ」と言っても一つの事では無く
一つでも一つでも無いでも無く有ってそれの有る儘に有り続ける
そんなそれの他に神の事など無い
ならば
な事は何とも繋がれないし
な事に何も向き合えないな　なので
「神は無い」と言うなら曇りなく何の誤りも無い　少なくとも

「神は無い」を突き崩せる言葉は何処にも無いし
神にもそんな言葉など全く要らない　つまり
「神は無い」に誤りは無いにしても　その誤りの無さは
神と係われる事では無い
抑も　神が有るか無いかの問いは神の事では無いし
況して神にとってその問いでも無いよ
神が果たして何かを問うのか問わないのかは知り得ないが
神への問いが神と係わらないならそんなの何の事でも無く
つまり凡ゆる神への問いは　それら問いばかりでなく
神に係わるどんな言い草も神と向き合う神への語り掛けも
「神は無い」の一言に呑み込まれるだけの取り留めの無い
お喋りに過ぎない
二〇二二年五月二十八日

お喋りだけが取り柄の何処の誰がどうで何を遣らかそうと
神とは係われないし　神もその誰かに係わらないよ

いや　だから　そんな事で
神の儘の神と呼べる誰も居ないのだから
係われなく係わらないそれは　それとしか言えない
それをうっかり神と言い間違えるならまだしも神と言い張ったところで
誤って神と呼ばれて仕舞う張りぼての贋の神が呼び出されるしかなく
そんなの何の事でも無いし　それでも神だと言い張るのなら
ただ力任せのゴリ押しであり血を見るのが関の山だよね
（なので血を見たら神と呼ばれた奴が暴れ回った証しにもなりそうだ）
にしても
「しかし誰にそれをそれと言えるのか」と言う問いは有り得ようか
有ったにしろ　その問いはそれとは係われないし
それもその問いには係わらない　しかしだとすると或いはだとしても
例えば「空の彼方から落ちて来た」では答えにならない
（なぜならそれを拾える誰も居ないから）と分かった上で
「それは何処から遣って来たのか」と問われなければならないかな
その問いが　それがそれで有る事と少しも係わらないにしても
えっ「それがそれで有る事と少しも係わらないにしても？」と
これこそ問うべきなのかも知れないけれど　そう問える為にも

先ずはそのそれが問われなければならないなら問われなければならない
とは言え
なぜ問われなければならないなら問われなければならないのだろう
問われなければならなくても問われなくても済むなら
問われなければならない儘に
問われなければならない事もないだろうに
で　それは
問われなくても済むのか？　問われなくて済むって何？
二〇二二年五月二十九日

それは問われなくても済むのか？
は
問いだろうか　いや　未だ「それ」が何とも問われてさえ無くて
「それは問われなくても済むのか？」などと
どうして言えて仕舞えるのか　この
「どうして言えて仕舞えるのか？」は問いなら問いに違いない

にしろ　そこまでだろう　それに就いての問いを巡る凡ゆる事柄は
「それは無い」に呑み込まれるだけのお喋りに過ぎない
つまり　何の事でも無い　けれど
そんなり　何の事でも無いの中に「それは無い」も呑み込まれて行く
するとと　何が起こるだろう　とこれは問いでは無い
問いという問いは疾っくに「それは無い」に呑まれて　無い
な事で　それに就いての事柄を呑み尽くした「それは無い」が
「それは無い」に呑まれ　その呑んだ「それは無い」が
「それは無い」を呑んで已まない
いや　已むか已まないかは知れない　そんなそれではそれは
一つでも一つで無いでも無かろうけれど
已まない為には（なので已む為にも）
一つでなければなかろうか　しかし
一つでも一つで無いでも無くに已まないのかも知れない　な
已まないでも已むでも無くに　そんな儘に已まないとしたら
それは一つでも一つで無いでも無くに　そんな儘に
有るようにだけ有る　ならば無いは無い
何の無いも何一つ無い　無いの無いの無いも無い

その無いの無いの無いの無いが有るでも有るでも無いでも有るに
有る儘に有りに有る　その「それは有る」に「それは無い」が
呑まれて已まりないなら　無いは有るでしか無い
その有るでしか無いも　その有る儘に有る無いでしか無い
その有る無いでしか無いも…　の繰り返し？
いや　繰り返しとしか知れないなら繰り返しさえ無い　の
繰り返しさえ無い　の無いが有りに有って有るしか無い
そんな有るしか無い　それがそれでもそれで無くでも無く
な「無く」は有るに呑まれるしか無くに　有る限りに有る
「有る限りに有るって何？」なんて問いも有るに呑まれて無い
そんなる有るしか無いそれが…　と　しかしこれは繰り返しでは無い
有る限りの有るが一つ限りに窮まるだけで　必ず有る
一つ限りの一つは一つでも一つで無いでも無くに　必ず有る
な事で　それは
問われなくても済むのか？　問われなくて済むって何？　って何？
「って何？」の何なら　何もかもに決まってるよ
そんなそれで有る限りにそれは有る限りに有るのだから
だから何？

な「だから何？」の「何」なんて何の何でも無くにね
二〇二二年五月三十日

それはそんなそれなのでそれで
そんなそれならそれは何でも有りの何でも無いかも知れないそれで
なそれはもう　必ず有る限りに有る儘に有って有るだけで
何の事でも無くしか無くに有るだけで　つまりそれは
それが有るも無くも有るも無くも無くも無くしてそれで
けれど強いられるかに望んだかに
そんなそれにすっかり係り切りで
それっ切りに何が何でも無くにも済むのかな　とか
うっかり思ったりしたら大間違いで　済む筈は無く
それっ切りなそれはそれっ切りなばかりに
そんなそれのそれを見る間にすっかり裏返すかに
まるでそれと異なって異なったそれなんて始めからそれじゃ無く
始めからそれじゃ無いなら　それがそれと異なるなんて事も無く

それが必ず有るのそれとは何の係わりも無く
それがそれで有るとか無いとかなんてすっかり抛り投げられ
これ見よがしに何が有るも無くも有るも無くも無くも無くなれば
何を何とも言えないなら「何…」が端から何の事でも無く　なら
「何の事でも無く」とも言えなくなって　でも
そう言えて仕舞えるのは何？
なんて何を顧みたりしちゃいけなかったんだ
だってそんなのまるで出来ない事を遣って仕舞ってるよ
「何が何でも無く」な儘でそんなで済む筈は無いって今更に
この事だったんだって思い知ったって
もうそれっ切り何を顧みられる筈も無いならどうにもならずに
言えないと知りながら言えて仕舞える何に縋るのがやっとでは
何
な何は何とも何の係わりも無かろうけれど　なら何は
な何とも見る間に異なって　な異なるだけが異なって已まない
けれど
そう言えて仕舞えてる筈は無いんだよ
そう言えてないと分かればそうと分かって仕舞えてる筈も無く

そうか　分かったぞ
それは裏返りも異なりもして無くて
いや違う　そんな事はどっちだって構わない
「そうか　分かったぞ」が一つ限りに窮まるだけで
な一つ限りの一つは一つでも一つで無いでも無くて
な事で「そうか　分かったぞ」も窮まれば　きっと
一つは一つでも一つで無いでも無い　に一つ限りな事だけが
考えなければならない為に考えられなくて　そんな事では
そんな事がそれで有るならそれで無かろうとしてようし
そんな事がそれで無いならそれで有ろうとしてようし
そうしてなければ一つでも一つで無いでも居られように
な事は許されず　その居られる処は棄てて先へ進んでは
一つ限りの一つは一つでも一つで無いでも無いのは
一つ限りの欠片も無くなるまで拒まれ毀され痕に
一つでも一つで無いでも無いをそっくり映した
そんなそれそれとそもそんなそれでも無いその
そのように有るしか無いの有るとは何かを
何かとも言えて仕舞える筈も無い儘にも

そんな事らは何の事でも無いとも知れ
知れた儘に留まるなら消えて行こう
けれど知れない儘に何が残るかは
その残った何かにも知れないか
二〇二二年五月三十一日　端（はな）

六月

これがこれなんだよとそれが言った
その声はこれの声なのかそれの声なのか
そう問う声だけはその声の儘に聴き取られていて
そう問う声はこれとそれとに切り分けられていて
これがこれなんだよとそれはそう言わなければそれは
それっ切り消えて無くなるしか無いなら言うしか無く

これとそれとに切り分けられるとはそんな事で　なら
これがこれのこれはそれの為のこれでしか無いにしろ
そのこれがこれのこれにそれは呼び出されただけでは
それこそがこれがこれのこれの為のそれなのも確かで
そんなこれとそれとを問うて仕舞ったのかと分かれば
分かる程に声は声から逃げ出したくなって
切り分けられたこれとそれとを繋ぎ合わせ
出来るならこれとそれとは一つだった事にしてみたい
と望みさえすればこれとそれとは初めから全く一つで
にしても一つなのと同じなのは同じ事では無く
これとそれとで一つに纏まって一つなだけでは
これとそれとはまるで違う事に違いなく
な事で　ただ
な事を味わって居るだけかも知れないね

二〇二二年六月一日

心を心の限りに引き裂いて光り輝く
空と海とその端っこにへばり付く人の営みを眺めるしかなくて
な凄まじい眺めも時には抗えず跡形無く消え去る
幾ら励もうと何を報われよう　報われたところで
無かったのと同じに忘れられ　後には何も残らず　こんな中を
時に背を押され前を向かされ　止まる事も為らず
ただ進んで行くしかない　と　思い窮める
までは出来ようけれど
な思い窮めが　時を止められるなら救いにもなろうけれど
な思い窮めも　直ぐ様時に流されれ
引き裂かれた筈の心の端っこにべったりへばり付く
醜い傷痕になって残るだけにしても直に消されて忘れられ
いや忘れられないにしろ　ただただ忘れられないだけの
心の端っこにへばり付く　何だか知れないそんなものでは
救いどころか何の使い途も無く却って救いを求める妨げで　ふん
つい言葉が走って仕舞ったかな　救いを求めるなんて何？
そんなの　知ったこっちゃないんだけどな　悪いのは全て
空と海とその端っこにへばり付く人の営みを眺めるしかなくて

それっ切りで引き裂かれる限りに引き裂かれる心だけの事
だなんて何かを分かったように思えて仕舞う心の浅ましさ
ま　そんなトコだね
二〇二二年六月二日

何日も面影を探しているけれど見付からないのは
失われたとしか知れない面影では
探しようもなく　けれど
失われたとしか知れないから探し続けるしかなく
そうして見て取れる面影を巡る色形の様様な欠片
とも言い切れないにしろ失われたとしか知れない
何かがそこに映し出されていても却って面影から
遠ざけられ　いやきっと少しもそんな事ではなく
抑も失われたとしか知れない面影は面影ではなく
失われたとしか知れないと知れた何事かを
面影に置き換えようとしているに過ぎない

と見ると
人の顔が一つ浮かんで来る
いや違う
人の姿にしろ顔は見てはならないかに翳んでいる
いや違う
人の顔を確かに見たけれど直ぐにそれは
顔の翳んだ人の姿に置き換わったらしい
（らしいとしか言えないのは置き換わりは見逃したから）
けれどこれを
失われたとしか知れないと知れた何事かの姿と見て取れば
すっかりそれで何の差し障りもなく
そんなものに収まりそうで却って
これこそが
探し続けなければならない面影を
失われたとしか知れない何事としか知れなくさせている
な事を　見付けたくもないのに見付けて仕舞ったようで
と見ると
人の姿は消え　確かに人の顔だけが一つ浮かんで来る

笑っているような暗い目を吊り上がらせているような
けれどそれを
失われたとしか知れないと知れた何事かの姿と見て取れば
それは全く探しようもない失われたとしか知れない面影で
そんな事では何を見付けた事にもならないけれど
いや違う　そこでは確かに
失われたとしか知れない面影が面影の儘にも失われ
何が面影を失わせたかまで見えて仕舞って居ないか
なのでそれは全く探しようもない姿と見て取られて
何が面影を失わせたかのその何かだけが残るにしろ
その見えて仕舞う儘にも他に何も見えなくさせては
それはまるで失われたとしか知れない面影だろうに
失われたとしか知れない面影では探しようもなくて
二〇二二年六月三日

何も失われてはいないとしか知れないなら

そんなそれは失われた面影として
その失われた事だけが失われずに現れるばかりで
そんなそれはそれを失ったのと何が違うのだろう
などと訝ってみても何の効もなく
失われた面影が失われたその儘に
なのでそれは何も知らせて呉れず
抑も何がそれかも知りようがなさそうでは
それっ切り何も起こらないようだがそうでもなく
いや
それっ切り何も起こらないような儘に
それっ切り何も起こらないなんて事は有り得ない
少なくとも
それっ切り何も起こらない事は起こり続けていて
そうして起こり続けるからには
それっ切り何も起こらない事とは異なる何事かが
必ず係わっているに違いない
に違いはなかろうけれどだったにしてもやはり
失われた面影が失われた儘なのには変わりはなく

その変わらない事こそが
何も起こらない事とは異なる事そのもののように
死んでも死んだ儘で腐りもしない人の顔のように
いや見付けたぞ　そうだよ間違いなくその顔だよ　と
失われた面影が甦りそれを追えば必ず見て取れる
追わなければまたそれは直ぐにも失われそうなら
追うしかないと行き着いて仕舞ったらしい処には
まるで見知らぬ顔が一つ　行き止まりの壁を背に
何かの間違いのように生毛の震えまで色付かせて
くっきりと　けれど酷く見難い儘に収まって居る
のは何

二〇二二年六月四日

のは何
なんて問われなくちゃいけないのは
のは何なんて言っているのは奴にとっての「のは何」で

な「のは何」が
「のは何」の行き止まりに激しくぶち当たり
きっと凄い音を立て　のは何なんて言っていた奴は
その鳴り響く内へ滑り込んで
「のは何」の壊れ果てた様なら探せば見出せようか
にしろ　そんなものはもう要らないし探す暇もなく
入り込んで仕舞った「のは何」の果てた処で
酷く見難い見知らぬ顔に凝っと見詰められる
その目付きに晒される身をその儘にしては置かれず
その目付きの届かない処へまでその身は抛り出されれ
さてそれからどうなっただろう
なんて問わなくちゃいけない誰も居ないらしく
どうやら何処までも「のは何」の果てた処が続いて
盛る陽が照り付けるばかりでは果てた「のは何」も
すっかり乾涸らび　その乾涸らびて已まない響きに
満ち満ちて　のは何なんて言っていた奴の身は細り
細り尖る程に果てた筈の「のは何」から逃れられず
込み上げる怒りと諦めは綯い交ぜに互いを脹らませ

乾涸らびて已まない響きを巻き込んで　それにまた
巻き込まれ　その渦の目に埋められたろう尖る身は
さてそれからどうなったろう
なんて問わなくちゃいけない誰も居ない筈は無くて
居る筈の奴が振り返る先で酷く見難い見知らぬ顔の
その目付きに晒されるのは「のは何」にしろ
の「のは何」の何は何だろうと問われるのは何
なんて問えるのは誰　なんて誰に問えるだろう
なんて事で
どの「のは何」がどの「のは何」と同じか違うか
知れない儘に転げて行く
のは何
（と問えたか問えなかったかは　きっと問えずに）
二〇二二年六月五日

全ては「のは何」に細り尖り逃れられない身が

その身に纏わる問いを振り翳してるだけだよ
なんて言い放つだけなら容易かろうけれど
昨日も見た通り　身なんてモノは
酷く見難い見知らぬ顔に凝っと見詰められる
その目付きに晒されて身なだけなモノで
その目が逸らされれば
盛る陽に煌めく塵のように消えて仕舞う
なんて事で
疾っくにそんな身なんて跡形も無く
（だって　その目付きの届かない処へまで
その身が抛り出されてから先のその身なんて
盛る陽に煌めく塵のようなモノだろうよ）
違うの？
の違うの何が違うかも誰が誰にも尋ねられずに
だって塵のようなモノにそんな真似が出来ようか
いや
けれどそんな事で
そんな事などうんざりして見離してる誰かが

間違いなく
ここに居て
けれどそんな誰かをそんな誰かだよとか
間違いなく指し示すようには言えないのも確かで
な確かな事だけが　確かなせいで
その確かな事から逃れられず　ただその
確かな事だけがそれだけで
その儘に有り続ける　あぁ
その確かなそれだけの他は
悉く磨り潰され掻き消されたか
そんな事が有ろうとは　有るにしろ
そんな事にどうして係われよう　にも
間違いなく
ここに居て
二〇二二年六月六日

確かな事だけがそれだけで
その儘に有り続けるのは何
そんな何がどうしたのかな？
なんて言える口が有るとしたら
（有るんだよ間違いなく目の前に！
何も言ってそうにないだけで
いや確かに何も言ってなくて）
食う為でない物を食い始めてる口で
（そうか　それで何も言わないって訳か）
あぁそんな口が物を食ってるなんて
間違っても目にしちゃいけなかったんだ　だって
確かな事だけがそれだけで
その儘に有り続けるその中で
物を食う口だけが物を食って
その食う口は確かな事なのか確かでない事なのか
そんな事など知りたくもなければ知れる筈も無く
ただその口だけが物を食って動いているよ
目も耳も死んでよう　息は疾っくにしてなかろう

肌も真っ青で　手足もすっかり冷たかろう
なのに物に齧り付いては
噛んでも噛んでも強張るばかりな物をモグモグと
何の味も味わえようもないのが楽しいのか
薄っすら笑みさえ浮かべる顔は見る見る肉が落ち
額と頬ばかりを尖った石のように盛り上げ
確かな事だけがそれだけで
その儘に有り続けるのなら
それで全ては事足りてように
食う為でもない要らない物を
どうして食い続けなければならないのか
どうしても食い続けなければならないのなら
その口だけが確かな事で　その口の前に
僅かに残ったらしい確かで　ない物を食い漁っては
確かな事だけがそれだけで
その儘に有り続ける為にそうしてるに違いなくて
にしても噛んでも噛んでも口の中の物はその儘で
何時までも飲み下しようも無いようでは

口の中だけは少しも確かな事では無いのでは
いや全く確かじゃ無いよな　とそれは確かな事で
あぁそんな確かな事になんて
係わっちゃいけないに決まってようにな
二〇二二年六月七日　齧（かぶ）り付

係わっちゃいけないなんてそれは
全く確かな事にひりひりと焼けるように何時も剥き出しで
係わっちゃいけないせいで嫌でもそれに係わるしかないなら
全ては剥き出される儘にひりひりと熱く焼けるようで
今更になってやっとこの世の光りの中で
目に出来る悉くは苦しみに窮まっていた
なんて知れたところで高が知れてようけれど
高が知れてるばかりな全く動かない確かさが
確かさだけで目からも身からも心からも離れて行く　その
苦しみは　窮まっていた苦しみさえ苦しみで無くす程に

苦しみとさえ言えないなら　苦しみから剥がされて
苦しみさえ苦しめないそんな事で　それは全く確かな事で
ただそんな事の確かさに駆り立てられるしか無くに
ただそうとも心付いただけなようなら
そんな事の確かさも跡形無く消された辺りを
その消されて有りもしない事を消し直す為かに
それにも係わっちゃいけない振りをするしかない
のは苦しみなのか喜びなのかを測りようもない
な測りようもなさに身を委ねて居られるのか
ただ前を向けば必ず現れるしかない眺めの中へ
どうやらそんな身を刺し込んでは行けてるようで
二〇二二年六月八日

真昼にしろ真夜中にしろ
昼も夜中も要らなくて
欲しいのは

真
なだけなのだが
真悲しいにしろ真楽しいにしろ
悲しいも楽しいも要らなくて
欲しいのは
真
なだけなのだが」
そんな真は何処にも無いよ
「そう来ると思ったよ
けれど何処にも無いなんて何でも無い事だよ」
真にとってはね
「そうじゃない
真でないもの全てにとって
真が何処にも無いなんて事は何でも無くて
なのでそんな
真
だけが欲しいんだよ　そんな
真

なので
真が何処にも無いのが何でも無い事に係わらない処で
真が何処にも無いのが何でも無い事を
何処にも無い真と擦り替えて　その擦り替えたそれを
真が何処にも無いのが何でも無い処へ持ち込めば
真が何処にも無いのが何でも無い事は何処にも無くなり
擦り替えられた真を真が何処にも無い処から持ち出せよう
そしたら
真が何処にも無いのが何でも無い事が真でしかなくなって
そんな
真
は　それっ切りそんな事で　そんな儘に忘れて仕舞えよう
二〇二二年六月九日

私は確かに前を向いて進んでいるのだが
後ろに背を向けているだけだった

私は私に追い付かれて私だった
私は私に追い付いて私だった
なので私は
私に駆り立てられて私だった
私を駆り立てて私だった　そんな
私が私で有る限り
（私は私が私で有る限り私で有るしかない）
私はずっとそうして私で居なければならなかった
けれどこんな事は　今が今なのは確かでも
何時かの何処かの古い事のようでもあろう
いや　今が今が確かなのは怪しくはないか
いや　今が今が確かなのは確かなのだが
その今が今の私を切り捨てては　それとも
今の私が今を切り捨てては
今と今の私とが追い付き追い付かれ
その儘追い越し追い越されないばかりに
駆り立て駆り立てられ　なのに
酷くのろのろとも　けれど

酷く追い立てられるような
のろのろで
ただその
のろのろとした身一つを後ろから前へ進めて居られるなら
必ず行き着ける処へ真っ直ぐ向かって居るに違いなかろう
なのできっと　酷くのろのろよりももっと酷く
のろのろは　のろのろな儘に速い限りに速かろう
と心付いて前を眺める弾みに後ろを振り返れば
その酷い速さが間怠っこく遅く鈍（のろ）く身を重くして
身の重さはそっくり目の重さで　振り返られる眺めは
低くへ低くへ滑り降り
私を見失い　見失ったのも忘れては　私にはそれっ切りな
必ず私とは違う
あなたとも互いに呼び合える筈もなくて
初めから擦れ違ってたかに何時とも知れず別れるしかない
そんな姿が人とも知れず更に低くへと流れて消えたろうか
二〇二二年六月十日

家が見当たらない　なら
庭に就いて語らなければならない　なぜなら
家を失ったなら庭も失った筈だからで　なのに
庭の眺めばかりが何処までも続いて行って
家が見付からないのは尤もにしても
庭の眺めが止め処ないようでは
止め処ない事に就いて語らなければならないのか
それとも止め処ない事ならば何も庭に限らず
な事では　何を語る事にもならないのか
それとも止め処なく庭の眺めを語り続けなければ
庭に就いては何も語れないのか…
などと　これは全く
庭に就いてしか語っていないのは明らかなのに
庭の何に就いて語っているのかも知れなくて
にしろ
庭の眺めが止め処ないなら止め処ないように

その通りを語り続けるしかないのも確かで
うっかり黙り込んで慌ててまた語り出しても　そこに
取り返しの付かない裂け目でも見付けて仕舞おうなら
庭の眺めにもそれそっくりな裂け目が走るに違いなく
何時そこへ墜ちるかと怯えながら
止め処ない裂け目に沿って斜めに走り続けるしかない
斜めに？
斜めな先にも庭の眺めは続こうか
そこはもう庭の眺めそっくりだろうと庭では無く　ただ
裂け目の続きが止め処なく先へ先へ眺められるばかりで
裂け目に就いてなど語りたくもないし
語れる事などもう有ろう筈もないのなら
黙り込む儘に何時裂け目に墜ちるか知れないようで墜ちない
私の姿を見出すしかなかろうに見出せずに
語り続けなければならないけれど何を？　と問うなら
庭に決まってよう
裂け目など知った事では無い　なぜなら
裂け目に墜ちる誰がそこに居ようか

そこに私の姿が見出せないなら　そこは何処までも
私の庭なのだから（裂け目さえ私の内って事？）
二〇二二年六月十一日

庭が何処までも続く眺めの
庭に就いて語り続ける事は出来ない
なぜなら止め処なくては　何処かで必ずうんざりするから
きっと　そのうんざりしている事ばかりを
知らぬ間に語り続けているなって分かってて
ふと見れば庭の眺めなどすっかり見失っているに違いない
いや　違いないには違いないにしても　その儘に
見失われてさえ庭の眺めは続いて行こう　なぜなら
それに替わる何も無いから　あぁ
庭
庭しか無いのは誰のせい？　だなんて
答えの見付かる筈のない問いは虚しい

問われた庭に嗤われるのが関の山とか
庭の眺めの先で　そんな
関の霞む山山が嗤い連なって遠くに眺められたら
それをきっと嗤い返せよう　そしたら
止め処なくも庭の眺めはそこで止まるようにも見えないか
などと思うだけで止まるのだ（だって全く私だけの庭だから）
それとも
そんな関の山山の連なりなど初めから遠くに見えていて
進めど進めどそこへ近付けないのが
庭
とこれは
庭の姿を丸ごと見て取れているのではないか　ならそんな
庭など要らない（だって何処までも続く眺めで庭だから）
と思えば庭はどろどろと溶けて　そんな
庭に背を向けられようけれど　きっと
背もどろどろと溶け庭に混ざり込んで
庭の重みに引き摺られ　身は後退りするしかないにしろ
何処へ

二〇二二年六月十二日

ややこしい事はややこしい限りでは
全くややこしい限りな儘にそれっ切り
と見切れば分かり易いけれど　その
分かり易さに目を奪われ
ややこしい事のややこしさを見下して
ややこしい事がややこしく無くなったとか
ややこしい事のややこしさを済んだ事に出来たとか
思ったら大間違いで　けれどその
大間違いにしろ
ややこしい事をややこしい限りな事と見切っただけの
分かり易さに飛び付いてるだけの言い草で
大間違いな事など何処にも有る筈もなく
ややこしい
いや

ややこしいだなんて決め付けられる事だって
何処にも無さそうで
じゃ何が有るんだっけ　だなんて
有る筈が有りそうな辺りに
うっかり目を向けたりしちゃいけなかったんだ
だってそこには全く
ややこしいとしか言いようも無いのに
ややこしいと言ってみたって少しもややこしく無い
そのややこしく無さがややこしいだけの
ややこしさが見付かるだけで
それをややこしいと言おうが言うまいが
ややこしさにしたら何の事でも無くて
そんなそれに目を向けて仕舞っては
ただそれに目を向けてる事だけが
全く酷くややこしい事になって
けれどややこしいだなんて決め付けられる事は無いなら
目を向けてるなんて何
二〇二二年六月十三日

ややこしい事が
有ろうが無かろうが知ったこっちゃなくたって
ややこしいと言える事なら幾らでも有るし　それら
ややこしいと言い放たれて放ったらかしにされた
事らが積もりに積もって山を連ねて仕舞うのは
それら
ややこしいと言われた言われ方のややこしさを測って
例えばその測り取れたややこしさに順って
並べたりする事も出来れば
何のややこしさもその並びの傾きの中に見て取れて
そしたら
態態また　ややこしいと言える事を見付けては
ややこしいややこしいと言い続けたって
どれもその並びの傾きに分かり易く収まろうけれど
そんなの絵に画いた餅だからで　抑も

有ろうが無かろうが知ったこっちゃない事を
ややこしいと言えちゃってるのから
まるでめちゃな訳で
（測れるめちゃならめちゃじゃない）
めちゃとややこしいとがどう違うのかのも
それをどう言ってみたって
ややこしいと言えるだけのめちゃな事な訳で
とは言えこんな事は　こんな
事らが積もりに積もって山を連ねて仕舞ってるのを
眺め渡せば直ぐに分かる事で　それともそんな
分かり切った事を分かり続けて居る為に
有ろうが無かろうが知ったこっちゃない事を
言い続けなければならないのかも知れず
（だって分かり切った事まで分からなくなったら
何もかもが分からなくなりそうで）
だとしたらそれを測れなくたって
めちゃはめちゃなりにめちゃじゃない　と言うか
めちゃならめちゃでなくちゃ困るよ

確かに　そんなめちゃな
事らが積もりに積もって山を連ねて仕舞うなら
ま　そんな事な訳で
分かり切った事を分かり続けてなくちゃいけないない訳だ
けれど
そんなめちゃめちゃに何時まで付き合ってられようか
二〇二二年六月十四日

誰も居ない処で
誰にも見られずに雨だけが降っているのは
雨でも降らなければ降る筈もない要らない物らが
止め処なく降って来そうだからで
けれど誰も居ない処で雨だけが降るせいで
要らない物らは何処かで積み上がり
何時か必ず溢れ出て降って来るに違いない
けれど何処へ　そこもやはり

誰も居ない処で
誰にも見られずに
要らない物らとは何なのかも知られずに
そんな物らだけが雨そっくりかに降っていて
そんな物らでも降らなければ
降る筈もない雨が
止め処なく降って来そうだからで
けれど誰も居ない処でそんな物らが降るせいで
雨は何処かで溜まりに溜まり
何時か必ず溢れ出て行き成り降って来るに違いない
けれど何処へ
誰も居ない処で
誰にも見られずに降ろうにも
降る筈もない雨では降る筈もない
けれど何かの間違いか溜まるからには降るしかないかで
降ったにしても
そんな雨とは何なのかも誰にも知られないから
雨が降ろうが降るまいが

それが何と係わろう
など高を括って誰もが雨に押し流され
降る筈もないながらに降り已まない雨は
誰も居ない処で
誰にも見られず　どうしてようか
二〇二二年六月十五日

隠し事を隠して置くには嘘を吐かなければならない
あなた隠し事があるでしょ　と言われて
べらべら喋って仕舞っては隠し事にならない
にしろ
あなた隠し事があるでしょ　と言われないように
そんな事を言い懸けて来そうな人を躲し躲し
ずっと黙ってられれば嘘を吐かずにも居られる
で　ずっとそうしてる内に　今更にやっと
隠し事の事が思い出されて来て　それは

私は或る人を闇から闇へと葬って
それに就いて問われただけで私の命も危うくなるのだった
と見ると
あなた隠し事があるでしょ　と私の側に来て
言い懸けて来そうな人を私は闇に葬ったのだった
確かに葬ったのにその人が私の周りを彷徨くのは何だろう
目が覚めて夢だと分かった
けれど　私は間違いなく或る人を闇から闇へと葬って
それに就いて問われただけで私の命も危うくなるのは
全く確かな事なのだと改めて思い出されて来て
私はずっと嘘を吐き続けなければならないようでも
あなた隠し事があるでしょ　などと私に問い懸けるのは
その人しか居ないに違いないなら
ただ黙って居るだけで済みそうで
けれどひょっとして
私は或る人を闇から闇へと葬ったと言う話しは
私が私に嘘を吐いているだけかも知れず　としたら
隠し事なんて一つも無いのが私のただ一つの隠し事で

それを私に隠して置く為に
私は私に嘘を吐き続けなければならないようで
いいや　そんな嘘こそ嘘の嘘に決まってるだろ　と
私が私に問われたりしたら私が私の命を闇に葬りそうで
それを押し止めて呉れるのはその人しか居ない　その
その人しか居ないその人を闇へと葬ったと言う話しは
そんな訳で　それが嘘も嘘の嘘も無く
必ず覚えて置かなくてはならない
一つ限りの隠し事に違いない
二〇二二年六月十六日

暗がりを押し分けるように狭い道を進んで行けたのは
引き摺っていた足が治ったからか　足を引き摺っては
平らな広い処しか歩き回れなかったのに何時の間にか
嶮しい登りの道に入り込み　暗くても陽は高く真上に
有った

有った筈だ
見た訳ではない
では何を見ていたのだろう
ずっと俯いた儘で　にしろ足元は暗がりに紛れていた
目は開いていても瞑っていても変わらないかのように
懈い足の歩みだけは止まらず体は向かう先へ運ばれて
狭い道を抜けたかと思うと高みの眺めが眩しく拡がり
振り返ると（振り返る他に何が出来ただろう）
振り返ろうとするだけで振り返れずに居るだけだった
これはつまり…
と何かを考えなければ身の置き処も無くなりそうだが
何の考えも浮かばない
けれど何故何の考えも浮かばないかなら分かるようで
それはつまり…
何も見ていないからだ　なので
目は開いていても瞑っていても変わらないかのようで
さもそんな男が跪いて体を揺らし
体を揺らすのは体が独りでに揺れて仕舞う程に凝っと

目の前の眺めを見ようとして見えずに居るからだろう
そんな男の後ろへ回り込み（にしろ
その姿を見て取れた訳では少しもない儘に）
背を蹴ったか頭に石を打ち付けたかして男を片付けた
確かに片付けはした（だって何の痕も残ってないから）
けれど片付けるとは何をしたのかが今一つ分からない
けれど何故今一つ分からないかなら分かるようなのは
それはやはり
何も見ていないからだ　何故見ないのだろうか
見えないのだろうか見ようとしないのだろうか
どうやらそのどれでもなさそうなら　それは
何をすれば何を見たと言えるのか　それを忘れた儘に
何も思い出せないからなのではないかひょっとして
思い出すにしろ　それも何かを見る事だったりしたら
話しはこれで終わるにしろ
その終わりを見て取れないなら終わりにも出来ないか
それとも何とか終わりだけは見て取れるようでもあり
片付けられた男に成り換わり跪いて体を揺らし凝っと

それは

目の前の眺めを見ようとして見えずに居る私の姿かも

二〇二二年六月十七日

明日になったら私は何処にも居なくなっていた
明日になったのだから死んだなどとは思いも寄らない　いや
思いも寄らないと思ったのなら幾らかは思ったに違いないが
それは
明日になって居なくなったのより前に
例えばそれは今日でも構わないが
何処にも居なくなっていたかも知れないとか
そんな事に思いを至らせているだけではないだろうか
にしろ
そんな事に思いを至らせて居られるのも
今この今日が明日になった明日の今日だからで　なら
今日の今日はどうなったろう　況して
今日の昨日など跡形もなかろう

（今日が明日では明日の前の日は今日なのでは
今日と明日とで昨日を消し去ったようではないか）
にしろ
明日になったら私は何処にも居なくなっていたのなら
その同じ私が今日の内に今日を全て生き抜いて
その抜けた先の今日と繋がる明日へと入り込み
そうして私は何処にも居なくなっていたのなら
今日からもう何処にも居なくなっていたのでは
にしろ
そうして今日の私は
明日になったにしても今日の私の儘でもある私なら
今日からもう私が何処にも居なくなっていた事など
今日にしろ明日にしろ係わりようはなくて
ただ今日の明日で明日の今日であるこの今の日に
私は何処にも居なくなってさえいたのなら
時が失われたかにそれ切り何も起こりようはない
と考えられる限りに考えるしかなさそうで
にしろ

何処にも居なくなっていた私の考える限りとは
何の限りだろう
二〇二二年六月十八日

何処にも居なくなっていた私なら　さっさと
その通りに何処にも居なくならなければならない
などと思ったりして仕舞うものだから
何処にも居なくなっていた私なりに
何処にも居なくなれなくなって仕舞うのを
分かって居てもどうにも出来なくて
ならばこれはきっと
分かって居る事などとはまるで違う
何処にも居なくなっていた私が私ともまるで違う
そんな事が
そんな事を思えるも思えないも無くに
起こるしか無くに起こってようか

などと思ったりして仕舞うものだから
思う事は思う事とは必ず違って
その違いだけが思いも寄らずに思われているに違いなく
なのでそれは何も思っていない思いに限りなく近付いて　けれど
限りなく近付く程にその違いばかりが思われて限りなく
噴き出して已まないかに思われ続け　あぁそうかそれで
何処にも居なくなっていた私かそれらしい私などそこに
居なくなっていたなりに居なければならないのだろうか
いや　そんな事を確かに思うにしてもそれは
それとは違う事との違いを思い已まないだけなのだろう
けれどそれで何が困るのか
何も起こらない儘に何も起こらないのは
違う事が起こって欲しいなら　困った事かも知れないが
それもまたそれとは違う事に違いなく
二〇二二年六月十九日

ただここから居なくなりたいだけなのではないか
けれどそう望む程にその望みに引き摺られ
望みは遠ざかって行くしかなく　何か
ここから居なくなっていた徴を見付けようとして
見付からないだけとか　いや
その見付からないのこそ紛れもないその徴なのだ
と決めて掛かったところで空回りは知れてように
空回り！　そうだ
空回りこそ　その上で
ここから居なくなりたい望みを躍らせて呉れよう
けれど却って何も叶えては呉れない
けれど
なのでこそ空回りなのだからそれで全く構わない
かと言うとそうでもなく
空回りは何とかそこを抜け出そうとして空回りで　いや
にしたところで　どう抜け出そうとしてるだろう
抜け出し方が分からないから空回りするしかなく
と

少なくとも私はそんな事は少しも考えては居ない
見渡してみても（けれど何処を）
誰もそんな事を考えて居そうな奴は見当たらない
と
そんな私は見晴らしの利く静かな処に足を止めて
なのに行き止まって居るようなのは　そこからの
高く広過ぎる眺めが行き止まって居るからで
低い処に遠い誰かのゆるゆるとした身の熟しの
それを見下ろす自らの虚ろな目に押し黙らされて
二〇二二年六月二十日

煙と言うならあの時の煙に違いない
けれどもうその何時とも思い出せず
暑いぃ〜
うっかり煙の事など考えたら益益暑くなるぞ
とうっかり考えて仕舞って益益暑くなった

ならば煙とあべこべの事を考えたなら
少しは涼しくなりそうだけれど
煙とあべこべの事とは何だろう　冷えた灰の事でない
けれど冷えては居るなら煙を吐き尽くした火の穴とか
そしてそれは何故か人の形をして居る
人の形で穴が開いているなら女か
にしろ戯れにも更にうっかり女の事など考えたら
益益に輪を掛けて益益が益益暑くなるぞ
取り敢えず女なら女に逆立ちをさせてみた
逆立ちをさせても火の穴の儘に女は女だろうが
暫くすると頭に血が昇って脂汗をダラダラ垂らす女なら女だ
そんなものを眺めて居て涼しくなるものだろうか
脂汗にも限りが有り　脂汗が尽きて
顔は皺だらけで体も痩せ細って行く
そんな女なら女を眺めて居て何になるのか
いっそまだ息の有る内に皮を剥いで
裏返しにして丸めて転がしてみてはどうだろう
少しは女とあべこべの事に近付きそうではないか

暑いぃ～
のはこんな事を考えて仕舞うせいかも知れない
いや　そうじゃない
女とあべこべの事にまで確り考えが及ばないせいだ
取り敢えず干涸らびる前に逆立ち女は片付けよう
と見ると女は床にテカテカ光る脂汗だけを残して
裏返しに丸まって肉も骨も丸出しで転がって行く
あぁ　そうまでして
女こそが女とあべこべの事を探し求めていたんだ
などと何が分かったか分からないなりに
さも何か分かったような心持ちで居ると
まさか裏返し女が転がって消えて行った先から
冷たい風でも吹いて来るのか　なら
暑いぃ～
のは幾らか収まったようでも風のせいじゃなく
女だろうと男だろうと何だろうと裏返って
あべこべの事を探し求めて転がってさえ行けたなら
あべこべの事にまで考えが及ばないどころじゃなく

きっとそんな儘に何もかもがすっかりあべこべで　けれど
そんなあべこべに覆われてるらしいこの世のせいで　また
暑いぃ～
のがぶり返すのなら
そのあべこべのあべこべの事を探し求めない限り
暑いぃ～儘　なのかな
二〇二二年六月二十七日

九月

数えてばかり居たのなら
数えるのを已めなくちゃいけない
けれど
数えるのを已めなくちゃいけない

が隅から隅まで数を数えて数え尽くした数なんだって
知りたくもないから知らなくちゃいけない
けれどその
知らなくちゃいけない
には
数え尽くした数さえ見付からないなら
替わりに見えてるのは
先が塞がれてると分かってる逃げ道だけで
けれど
先が塞がれてなくちゃ逃げ道じゃないさ
何処までも逃げられる逃げ道なんて道でさえ無いさ
なんて嘯きながら
そんな逃げ道に逃げ込むのから逃げるしか無くに
逃げずに立ち向かう向きへ進まなくちゃいけない
な事で立ち入ったのなら　ここは
二〇二二年九月十一日

濃い繁みは先へ進めない
繁みを避けて何処へか回り込むのも為らない快さ
にもそれは繁みをすっかり伐り開く為の同じ快さ
に違いないなら疾っくに
繁みだった辺りは丸裸とも知れずに
剥き出しの土の上を乾いた風が滑って行くだけで
そんな風は自ずと傾こうけれど昇りへか下りへか
など構う事でも無いなら　など構わない処へ至り
にもそんなそこではそこは至れない処でも有ろう
とそんなそこを見晴かせるかな見通しは失せれば
風は滑りも傾きも昇りも下りもしてなかったろう
ただ乾いた儘に剥き出しの土の上で凝り固まって
風が凝り固まるからには風は風の中で風を絶えず
ずたずたに引き千切ってそのばらばらな儘を束ね
繁みの伐られ果てた跡などうっかり追い求めれば
繁みからも丸裸からも激しく弾かれるのは
弾かれるからにはそこへ至り着いた

繁みを眺めてた奴しか居ない
など構う事でも無くて
剥き出しの土が
二〇二二年九月十二日

つるりと細い体を拗らされて
幾ら拗らせても音は出せない　それは
音の出し方を知れないからと分かれば
何処からか必ず音は聞こえて来る
と言うより
つるりと細い体を拗らせようとして来る
と分かれば音の出処も自ずと見定められる
細い体はただ拗らされているのでは無く
これ見よがしに獲物を狙うかに舞い踊り
疲れ知らずに却って音を思う儘に操って
と言うより

音の出処さえ疾っくにつるりと撥ね除け
拗らす細い体さえつるりと擦り抜け
獲物なんて一つも見当たらない処で
二〇二二年九月十四日

全てこの世はこんな事に尽きているよ
と言われて顧みて
こんな事さえ見付けられないのがこんな事なんだな
と分かった事にしてみても　やはりその
こんな事とは酷く距てられてる儘じゃないか
と　それっ切りなのはどうなのか　いや抑も
うっかり顧みたりするのがどうなのか　と
全てこの世はこんな事に尽きているよ
と声の聞こえて来た辺りに目を遣ると　そこは
誰も居ないのと一人だけ誰かが居るのとの境目で
酷くぼやけてるのと酷くはっきりしてるの境目で

あぁ　ずっとこんな境目を酷い遠目で探してたんだ
と心にも無いと分かりながら思い込もうと勢い込んで
そっちへ踏み込む足取りの酷くふらついて危うげなのは
二〇二二年九月二十七日

どう遣っても
死ぬのは何時もどうにも独りじゃ無い
それが何より嫌で死ねないんだな　と
二つか三つ　それとも四つかも知れない死に方を
小手先でごちゃごちゃ弄り廻してると
うっかり手が滑って
その内の一つの死に方が指に刺されば死ねるよな
などと考えれば
これが四つ目の死に方なのかな
と
その四つ目だけを小手先でごちゃごちゃ弄って

それっ切り死ぬのからどうにも遠ざかるようで
ごちゃごちゃ弄ってるのもどれもただの玩具で
死に方に見立てた玩具を死ぬまで弄り続けるのが
きっと始めから決まってた一つ目の
一つ切りの死に方で　そんな事なので
死ぬのは何時もどうにも独りじゃ無い
二〇二二年九月二十八日

曇り空の（僅かにも晴れ間が覗いてはならない）
影の消えた狭い坂を下り切った
そこだけ青い窪みの底に見える辺りには何も無いなら
後は坂を下りさえすれば済むし
坂はスベスベして一息に滑り降りられるかも知れない
いや　そうして
坂を見下ろす眺めを独り占めし
そんな眺めからふと目を切れば

目は曇り空の何処にも定まる筈も無くに
独り何も無い処に至り着いて居られよう
にしろ
何も無い処が何も無い処で有る為には
必ず無ければならないものが有る筈で
逃れ難くそんなものと取っ組み合って
何も無い処が何も無い処で無くなって仕舞うのを
ずっと防ぎ続けて居なければならないのは
余りに嬉しく楽し過ぎて酷く辛くもあって
それはしかし
何も無い処を独り占めして居られるのは
有りと凡ゆるものに襲い掛かられる儘に
何処にも逃げられないように自らを縛っているからで
そんな辛さへ辛さだけが繋がり
繋がりは荒荒しく輪を閉ざそう
何も無い処が何も無い処で有る為に
二〇二二年九月二十九日

思い出せない事を思い出せないのは
思い出すとは何をする事か思い出せないからで
思い出すとは何をする事か思い出せたなら
思い出せない事は無い
に違いない　けれど
に違いない　とは
な甘い見通しに淡い望みを繋いでいるだけで
思い出すとは何をする事か思い出して
思う様思い出せる事を思い出した
なんて事が有った事を思い出せたのでも無い
しかしそれは
思い出すとは何をする事か思い出せないからで
思い出すとは何をする事か思い出せたなら
そんな事が有った事もすっかり思い出せる
に違いない　けれど
いやここで　けれど

など要らないのは
何も思い出せなくて
ずっと何も思い出せなった事だけが思い出されれば
それとも　必ずそうでなければ
何も思い出せないでしか居られないここには
居られそうも無いから　にしろ
な事を分かって仕舞うならもう
眺められる限りの何処か外でも
探すしか無さそうで
二〇二二年九月三十日

十月

同じ丸い山が二つ並んで

水をたっぷり溜め込んで
高い遠くと低い近くへと
黒い艶に煌めき波立って
揺れて居るのは　あれは
山なんかじゃないのなら
その間へずり落ちたような裂け目こそ
裂け目では
黒い艶に煌めき波立つ筈も無かろうに
その暗い奥で低い遠くと高い近くへと
激しい波は行ったり来たりを繰り返し
山なんかじゃない二つ並んだあれらを
堅く盛り上げ留めているのは　あれは
裂け目なんかじゃないのなら
その暗い奥で低い遠くと高い近くへと
同じ丸い山が二つ並んで
水をたっぷり溜め込んで
激しく波打つ形を内へ内へと畳み込み
二〇二二年十月一日

真っ直ぐと言うのが拙いに違いない
真っ直ぐは必ず前を向いて仕舞って
そんな真向かいな前でしか無い前は
必ず揺さぶり壊し消し去らなければ
どうにも揺さぶり壊し消し去れない
酷く尖って尖る程に深い穴を隠して
隠した穴を尖った姿に翳し晒しては
暗く真っ赤な程に滑るように白くに
そんな真向かいな前でしか無い前を
必ず揺さぶり壊し消し去ろう　いや
と思えてならない程に酷く重そうに
何も起こらない事だけが真向かって
細身に激しく匿われ荒ぶる血の息を
それは静かに殺し続けるならそれを
どうにも揺さぶり壊し消し去れずに

直ぐにも

ならば真っ直ぐをそろりと脇へ退け
逸れて行くしか無かろうそちらには
二〇二二年十月二日

速さの内に身を強張らせ（あぁ幸せの他に何も無い）
速さが全てと諦めて（でもそんなのは誤りで）
早速それは間延びして（でもそれって何？）
「だから間延びするのがそれなんだよ」って
それは言うんだね（ふん嘘に決まってるさ
それが言う事なんて全て嘘さ）
でもそんなそれのせいで幸せで
速さの内に身を強張らせ（あぁ他に何も無いのも嘘なのか）
と
速さの外へ身を乗り出せそうならそうしてて
嘘も真も知らないくっきりと白いそれの姿が
あぁ姿の他に何も無くては止め処無いけれど

そんな姿がくっきり白いなんて有り得ないよ
なんて嘆こうと姿だけでは何も変わらなくて
けれどこの身ではそんな姿に絡めるでも無く
「この身って何？　そんなの嘘でしょ」って
それはそう言うのかくっきり白いばかりでは
分からないなんて分かり切ってた事だけれど
分かり切ってたって事こそ真っ先に分からないのも確かで
な確かさでなら直ぐにくっきり白い姿へ絡んで行けそうで
行けなささそうでは
速さが全てと諦めて
早速それは間延びして
あぁそんな間延びの内へと投げ出され巻き込まれて
粉粉に砕かれたいなんて望みがこの身に
「この身って何？　そんなの嘘でしょ」って
言わせてたに違いないのはまさか嘘じゃ無かろうね
二〇二二年十月三日

音を出そうとしてた　だって
音から始めるしか無いじゃないか
音の出し方なら他の何より知っている
音でこの世が満たされてるのも分かってる
なのに知ってる音の出し方の通りにしてるのに
音が出て来なくて　それでも音を出そうとする程に
音で満たされてるこの世で私の身だけがまるで空っぽで
な空っぽな身がこの世の音に囲まれてるのは分かるにしても
音の出せない私だけがこの世で嫌われるかに
この世の音らは私から程程に遠ざかり堅く脆そうに固まって
音の出せない儘に私の身が震えれば　きっと
この世の音らは粉粉に砕け跡形無く消え失せそうで
そしたら私だけが私にしか出せない音を出せそうで
身を震わそうとした　しただろ？　だって
身を震わすしか無いじゃないか　で
身は震えるのか　震えないのか
それがさっぱり分からないのは　それは

音を出せないからと分かっては
笑いが込み上げたりしそうだが
笑う切り何も出来ずに笑い固まる私の姿が目に浮かぶだけで
笑えずに固まるだけ固まり果て
そんな固まる身なら自ずと転げてカラカラと空っぽな音でも
出せそうなのか　出せそうでもないのか
それもさっぱり分からないのは　それも
音を出せないからと分かっては
誰の身やら　その身は音も無く
何処へでも転げては行けるようだけれど何処まで転げようと
何の音ともぶつかり合えないようでは埃に塗れて行くだけで
二〇二二年十月四日

拾われた（そうして私に私の姿は見付けられた）からには
私は棄てられてたにしろ見付かるのは
私に棄てられたものばかりで

それらは棄てられた切り誰にも拾われないで私の前に有る
けれど遠くて小さくて堪らずに
数えて仕舞うと五つで（数えて五つで無かった例しは無い）
それで遠くて小さい儘でも一つずつ手に取れて
私に棄てられたなら私に馴染みのものが見付かろうかと
中を覗くと三つ目まで空っぽで
その三つが私の前に並ぶだけで
後の二つはもっと遠くからにしろ脅すように大きく脹れて
空っぽの三つには見向きもしないのは二つだからで仮に
三つでは三つと三つで互いに溶かし合い数は数で無くなる
で
な必ず五つな数に縛られるかにも　と言うか五つのせいで
私は何処へでも五つに背を向け行方を眩ませられるけれど
その何処にも棄てられた私と私が棄てたものしか無くては
距てられた儘の二つに戻れる筈も無く戻って行くしか無く
そうして身は孰れ数に切り刻まれ磨り潰されるしか無いか
などと考えて仕舞うせいなのか
三つから引き摺り出された三つの身を二つが貪り喰うのを

ただ一つ限りに私に起こる事として眺めて居られるのなら
何が私を棄てたのか（数に決まってる）
何を私は棄てたのか（数で無いに決まってる）　それを
幾らでも詳しく焦げるまで目に焼き付けられようけれど
うっかり匂いを嗅げば焦げているのは三つの身ばかりで
だってジュージュー焦がせばナマより芳しく旨いからね
二〇二二年十月五日

右と左の無い処へ　どうやら
足を踏み入れたらしい　足を踏み入れたからには
上と下と前と後ろは有ったに違いない
しかし右と左とは何だったろう
草や木や茸や苔には
上と下は有っても右と左など有るだろうか
鳥や獣や虫にも上と下は有るだろう
（鳥は下へは舞い上がれないし上へは舞い下りられない）

前と後ろも有るだろう
（目が付いている限り
目の向く向きが前でその後ろが後ろだろう
目を失った獣が後ろへ向かって走れたとしても後ろは後ろだろう）
（阿修羅は三つの顔を持つそうだが
それぞれに三つの前と後ろが有るだけで
それらがまぜこぜになったりはしないだろう）
草木にしても苔や茸も或いは磯巾着や富士壺も
風の向きや水の流れの向きがそれなりに変わらないなら
前と後ろはそれなりに変わらずに有り続けるのかも知れない
その上と下や前と後ろを取り換えるのは難しい
しかし右を左　左を右と取り換えたとして何が起こるのか
馴れれば直に何とかなりそうだ　それとも初めっから
頑なに右とか左とかグズグズ言ってるのは人だけか
などと考えて居る内に
前と後ろも怪しくなって来た
どちらを向いても前しか無いのではないか
その前の後ろは常に前によって打ち消されて仕舞ってないか

などと考えて居る内に
上と下も怪しくなって来た
どちらを向いても上でも下でも有りそうで　だったら
上でも下でも無さそうで　有ったところで無いも同じで
いや確かに　そうして
数え切れないならどちらとも知れない儘な数知れない向きが
絡まりもせず交わりもせずに　そうして
そうでなければ見付からないそれを
探している
二〇二二年十月六日

あいつ居なくなって仕舞ったよ
何時の間にか
知れない内に
なら
知れない内に

何時の間にか
私とても居なくなって仕舞うかな
探しても見付からないどころかまるで探しようも無く
これは全て
あいつのせいだ
あいつが初めっから居なかったなら
私はずっと居なくなったりして仕舞わずに済んだんだ
何時までだって　あいつ無しでもここに居られたんだ
二〇二二年十月七日

急ぐのは急ぐからで急ぐ他に何も無い　なので
急ぐのを已めれば消えるしか無い　けれど
消えられる筈も無ければ急ぐしか無く
いや　だから
急ぐ事こそ無いんだけどな　などと
思い窮めて良いかどうか　それで

うっかり思い窮まったりしては　きっと
急ぐと急がないとに引き裂かれるとか　何か
拙い事が起こりそうで　で
急ぐしか無いんだと急ぐのを已められない
しか無い　にしろ　その
しか無い　しか無いなら　中中に
しっくり来るよな　な
何処にしっくり来るんだよ来る訳ないさ　と
何処も無いのが分かり窮まれば急ぐしか無い
けれど　重くなるばかりなんだ
急ぐ身が　それとも目が　それとも足が　どれでも有るなら
現れては過ぎ去る　この眺めが酷く重いんだ　な
重さに囚われたらお仕舞いで　なので
急ぐしか無くて消えられもせず
急ぐ身は　きっともう重過ぎる眺めに撥ね飛ばされてて
何処へか転げ落ちても行けたならまだ増しで
急ぐしか無いのに変わりはないのなら　ただ急ぐだけが
過ぎ去る眺めも撥ね飛ばされた身も　引っ張り上げて

消え去れる処でも探してるみたいに　急ぎ迷うなら
迷いなど消え　急ぐ他に何も無く
その先も無く　とも思い及ばずに失われた身を持て余そうか
その事だけを　ずっと目指して来てたみたいに
二〇二二年十月八日

どうやら風さえ吹き払われ澄み切って
遙か彼方も見晴るかされ　そんな
遥か彼方は直ぐに指で撮めそうで
そこに僅かな動きを見付けて仕舞うなら
それ一つに目を凝らすしか無い　けれど
そんなそれに目を凝らしても何にもならない
こんな事の為に時を使うのは間違ってる
と知れたところで　目も時も
もう何処へも動かせないでは
どうしよう　な

どうしよう　だけが
くっきりと鮮やかな眺めの真っ只中で
濁って汚れ渦でも巻きたげに内を向き
動かせない目と時を歪められないか
な望みは重過ぎるのかな
身からすっぽり抜け落ちるようなら
身ばかりはきっと霞んで行けそうで
二〇二二年十月九日

濡れた耳は音を殺す　ふと
遠く微かに音を聞けたなら
耳は乾いて　ならばきっと
心も渇いて
心を濡らせるもの　それは
耳を濡らせるもの　例えば
まだ血の匂いに仄かに湿る

じっとりと手に纏わり付く
獣の皮を探し回ってないか
音に誘われる儘に彷徨いて
で見付かるのは　身を捩り
皮を擦って音を出している
そんな事に歓び狂ってる生きた獣で
な音を間近に聞かされては
耳の奥は雫が滴るかに濡れ
獣ならではの音は遠ざかり
直に消え果てそうだけれど
心は却って渇くばかりなら
耳に音の残る内に獣を殺し
その血で心を濡らすしか無かろうね
二〇二二年十月十日　誘（いざな）われる

陽に順って時は過ぎ

逆様な事など少しも見当たらないのに
音だけは幾つか逆様に聞こえて仕舞う
この眺めが全く逆様なら
逆様に聞こえる音だけが逆様で無いのかも知れないけれど
この眺めが全く逆様かどうかは他の眺めと比べようも無く
音だけ逆様なのを受け容れるしか無い　けれど
な音は
少しも耳に入って来ない　それとも
耳に入った音が耳の中で逆立ちして
音を聞き取れなくして仕舞うだけか
な聞き取れない音が
逆様に聞こえて仕舞うとは…
と見ると逆様の幾つかの音が　目の前で
逆立ちしているように見えているだけで
見えているそれらが音かどうか定かで無くなり
陽に逆らって時は　淀むのか止まるのか
それとも戻るのか　戻るのなら何処へか
な音が

確かに聞こえて仕舞うのなら　それらは
この眺めの逆様が　音の逆様の姿に映り現れて
時の流れを匿う耳の端へ傾れ込んで来るらしい
二〇二二年十月十一日

時が止まらなければ何一つ動かないと知れて
眺められる限り何一つ止まってないのなら
時が止まっているのは確かにしても
傾き始めた陽の速い動きは目に見え
時は始めから陽の動きの及ばない外に有り
陽に順って巡るのは時では無かったと知れて
擲たれた醜い屍が肉を飛び散らせて激しく動き続け
鳥や獣や虫共に当たり前に喰われて行くだけにしろ
それは喰われる程に際立って真新しいなら
時に見棄てられた陽の屍に違いなかろう
（傾き始めた陽が目に見えて速いのは　あれは

屍の走る影が空に映るだけに違いなかろう）
ならば　喰い尽くされた屍の骨を焼き
直ぐにも真新しい匂いを空へ届けなければ
孰れ陽は衰え　傾くのも叶わず動きを止めよう
それで　止まっている時があからさまに動き出せば
眺められる限り何一つ止まってない眺めは失せ
眺められる限りを止めて仕舞おう
時に見棄てられた陽の屍と見えたのも
傾き急ぐ陽の走る影に過ぎなかったかに
二〇二二年十月十二日

「陽が屍かどうかなんてどうだって構わないさ
陽は擲たれ打ち据えられなければならないよ」
「疾っくにそうしてるさ　なので時を止めて置けてるんだ」
「嘘吐け　いや嘘かどうかなんてどうだって構わない
そんな事じゃ無く　陽を打ち据えなければ

止まるも動くも　時は凋んで萎れて
時は時でも無くなって仕舞う」
「時は時でも無くなって　で　どうなるんだ？」
「陽だけが果てなく燃え盛って
時で無くなった時を焼き尽くし
それとも陽さえも焼き尽くされ」
「嘘吐け　陽は打ち据えられてだけ燃えるんだ」
：なんて話しに耳を塞ぎたくて
止まってると知れる時にまで辿り着けたのに
何が間違ったのか！
と見ると　陽はすっかり去って
それでもゆっくり動き続ける暗い眺めの中に
遠く独り炎が立ち　時の屍でも燃やしてようか
止まってる時が燃え尽きれば
止まらない時が甦り暴れ出し　いや違う
そんな事とまるで違う事しか起こらない
それでもう私と私で無い誰かは
何食わぬ顔で嘘を吐き合っては

そんな嘘だけが時を操って行くなら
止まってる時など無かったかに忘れられ
二〇二二年十月十三日

私で無い誰かが　誰かで居られる為には
私が私で無ければならない　いや私は私で無くても
私は私なら私の儘に有り　それで構わない
概ね私は　私で有るだけで　私では無い
な私は　私で無い誰かの居る処へ行き着くしか無い
行き着けないなら　孰れ私は
私からはぐれて私で無くなろう　とは言え
そんな事を幾らでも遅らせられるなら
遅らせられる儘に　私は私からはぐれる事も無かろう
ならば何故　　そんな私が
私で無い誰かの居る処へ行き着かなければならないか
な事を考えさせられるのも　ただ

私で無い誰かの居る処へ行き着いて仕舞ったからで
行き着いて仕舞えば
私で無い誰かが私を消し去る事しか残って無さそうで
とは言え　そうして却って先ずは
消え去るのは私で無い誰かに違いなく
それを消し去った私が残るなら　それは
私では無い…　有る筈が無い
私が私で無ければならない訳も無いからには
二〇二二年十月十四日

火は常に煩く語り過ぎて已まないけれど
あれこれと語り過ぎる火を前にしてだけ
火に照らされる誰もが
今更に火から何処へと逃れようとも
ずっと黙り込む儘で居る他には無かろう
な火は疾っくに闇へ送られたのか失せて

照らされる事も無い誰もが黙り込むなら
独りの息遣いだけが微かにゆらりと届き
それに誘われ違う独りの息遣いが継がれ
火が語り已まなかった事を叶えようかと
ゆらりと黙り込む儘で息は息に揺らされ
な揺らされる息は揺らす息を断ち切って
独りの息遣いだけが耳に残る火の語りを
なぞるようにも　なぞり損なうようにも
転げ波立つ果てに沈み失せるなら失せて
誰が火にそれを語らせたかは自ずと知れ
断ち切られた息がそれをなぞり已まない
のを聴き取るのは誰？
火に照らされない儘に
二〇二二年十月十五日

女が居ると居ないとでは大違いだぞ

などと言う声が聞こえれば
例え女が居なくても女は居て　その
居なくて居る女は
女で居る為に　それとも
女で居なければならない事を強いられる為にか
女に殺される為の男を厳しく呼び出すしか無い
などと言う声が聞こえれば
女に送り返すしか無かろう　しかし何を？
何を？　とはまた息さえ急くようで
それはきっと女には無くてはならない物で
小部屋やら壺やら箱やらの
口を開け閉め出来て覗けば中に何か入ってそうな
それとも
家やら庭やらそんな眺めやらの
せっせと出入りしては中に何やら溜め込めそうな
いや違う
そんな物らは疾っくに目の前に並べられて
その奥で　火のように燃えているのが女だ

な女が燃え続ける為には何が要るのだろう
などと言う声が聞こえれば
男は自らを切り刻み薪のように火にくべる
な振りしか出来ないで　並べられた物らを
さも訳有りげに並べ直しては朽ちて行こう
などと言う声が聞こえれば
男は手ぶらで遣って来たのを見せびらかし
並べられた物らを中も見ないで蹴散らして
知らん顔で女の陰に隠れてる見知らぬ男を
引き摺り出して切り刻もうとするだろうか
二〇二二年十月十六日

外で（外にしては大きそうに
けれど　大きそうにも限りが有って狭そうに）
外が外を向いて磨かれ
狭そうに直ぐ脇に迫り

濃やかな傷だらけの艶に僅かに脹らんで
舐めたらきっと苦そうで　けれど
ここは間違いなく内なのだから
外が外を向くのを見える筈が無いだろう
そう心付けば　ここは
そんな外の外で内なんだと　それで
何故か身は　間違いなく内に落ち着いて
そんな身は　内に溶けて消えるようで
消える弾みに見付かるのは
透けるまでに磨かれた細長い卵の形で
その奥には何も無くて　それは
この身より背が高そうで　すらりと立って
近付いて吸い込まれるように　ゆっくりと
その内を覗き込むと　透けている筈なのに
濃やかな傷だらけの艶に目は弾かれ逸れて　　ならば
内に溶けた身へと向けられるしか無いのに
そんな身は溶けた内の中で外しか向けずに
突き刺さって行くけれど（何処へ

と身の構えを確かめれば前へと決まってるのに）
透けるまでに磨かれた細長い卵の形とは
それとの間のもう一つの内が脹らむのか
な内は透ける儘に硬そうな艶を滲ませて
そんなそれに阻まれるかに距たる儘では
その儘に何も変わらず　ふと前は消えて
二〇二二年十月十七日

私に何が知れるのか」と問うなら　それは
あからさまな嘘でしか無いけれど　そんな
言いようでしか身を守れないのも確かなら
その嘘の問いばかりを投げ付けて　ここは
乗り切るしかないのは始めから決まってた
ようで
ならばそれはここが始めから嘘塗れだった
だけの事で「

私に何が知れるのか」と問うても　それは
ここに転がり込んだ私が
ここで転がり続ける為の
他に言いようの無い言い方でしか無かろう
だなんて顔付きをうっかり見せたばかりに
嘘は嘘の儘にまるで嘘で無くなって　私は
ここを
ぶち抜いて行く　そんなここでだけ　私は
ぐったり横たわる私の　息絶えたようなら
冷たくなっても　変わらず嘘を吐き続ける
身一つを
他の誰の身とも見分けて撫で回して居よう
二〇二二年十月二十九日

な身一つの私に　「
お前に知れない事など有るのか」

と　立て続けに
嘘で無さ過ぎる問いが投げ付けられれば
私だけが知っている
必ず嘘で無い事ばかりを言い募って
ここが始めから嘘塗れだったと言う
嘘を暴きに暴き
嘘塗れな振りで
身一つに楽しく身を躍らせて
眠くならない限り　そうして
身は躍るばかりと諦めたなら
もう疾っくに眠って居ように
身はずっと躍り続けるようで
二〇二二年十月三十日

遺る事は一つしか無い　それは
予め決まっていたのか　それとも

いきなり今　決まっていた事にされるのか　その
どちらとも知れなくて
遣る事は迷いなく進められて行くしか無いけれど
遅過ぎたのか　それとも
遅過ぎるのを取り返そうと急ぎ過ぎるのか
一つしか無い出来る事は
遣らなければならない事と凡そ違っていて　いや
違っているのさえもどうやら違っているようでは
進むか退くかを決められないのは違いないにしろ
遣り始めて已められない事は何の障りもなく捗り
捗る程にやはり　これは
遣らなければならない事とは違う事を遣っている
と思う程に　その
遣らなければならない事と違う事しか出来なくて
ならば　そんな事が
一つしか無い遣る事かと思うしか無さそうにしろ
そんな
違う事しか出来ない身の置き処は　ここしか無い

そう思い定めれば　そんな
身は行き場を失ったかにここを離れて離れる程に
また違う
遣る事は必ず遣る事とは違って身に迫って来ては
行き着くしか無い処は　もう直ぐそこなのだろう
二〇二二年十月三十一日

十一月

穴の口は狭くて
やっと片手しか入らなかった　いや
後で考えたら　片手しか動かせなかった
それとも片手しか無くて　その
片手で穴の中を探るしかなかったのを

狭いと思い込んだだけなのではないか
（つまり　片手だけではなく　例えば
穴に丸ごと入り込める体でも持ってたのなら
穴の口はその体と同じ広さだったに違いない）
にしろ　後で考える後とは何時なのか
今しかない
けれどどうやら　この今とは違う今で
時を穴の外の拡がりを測る儘に測ると
この今ばかりがだらりと拡がるようでも
なこの今ばかりの遠い先が見通せるなら
違う今がこの今を待ち構えるように潜んでそうで
と見通せるなら
この今もすっかり違う今に違いなくて
ならば今などどうだって構わないのだ　と
片手で探り取れるものを穴の中から取り出すと
如何にも片手で穴の中から取り出せるようなものが
取り出せる　それらは全く見るからに
片手で穴の中から取り出せるようなもので

見てる内に穴そのもののような形に見えて来て
そんな形にしか出来なそうな内向きな動き方で
ゆっくりと三つに分かれて違う向きを向いて離れて
（そうか　穴の形とは離れ離れな三つだったんだな）
などと見てる内に　三つはどれとも似ても似つかぬ姿で
そんな姿にしか出来なそうな外向きな動き方で
今の中に入り込んで来て　今を食い潰しに懸かるようで
二〇二二年十一月三日

筋が切れたのは腿か肩先かを
背筋は伸ばして横向きに
勢い良く転げながら
考えているのは
誰なのかと
遠く暗い尾根伝いに卍のような姿を見付け
けれどそれは少しも転げるようでは無く

揺らめいて暈けて淡く煌めくようなら
筋を切ったのはそれを眺めて動けない男で
そうと知れても切れた筋が腿か肩先かが
分からないのは卍のような姿のせいで
卍のような儘に卍を凝っと見詰めていると
卍の奥に卍を捩切った深い傷口が開いて
角張っては丸くなるのを繰り返すのは
それが勢い良く転げるからに違いなくても
卍が卍な儘ではその奥で何が転げるのか
いやそれは男の身の他には無かろうに
卍に凝り固まった身である筈は無いのなら
それとは違う男の身であるしか無かろう
けれど男と違うなら女かも知れないぞ
と傷口の奥に女の陰を思い描いたのが徒で
裏返りそうにも傷口は脹れて突き出され
血を吸いたそうに口を硬く尖らせては
卍な儘なのは右と左のどっちの腿も肩先も
筋が切れっ放しだからだと分かった男の

卍から目を逸らした目の奥に象られる
揺らめいて暈けて淡く煌めくような姿から
で何処へお前は転げて行きたいのかなと
要らない答えの為に冷たく尋ねられて
何処にも卍のような姿の見付からないなら
要らない答えのそれが答えに違いないなら
などと考えているのは誰でも無いのか
二〇二二年十一月五日

音なら溢れてようけれど少しも
音には聞こえず
大きく立ちはだかる重しのようでは
音を立てなくては居られなくて
音を立てる手立てが見付からず
重しを吹き払う心持ちで歌を口ずさんだ
けれど直ぐにそれは歌じゃないと分かれば

溢れる音は音じゃないし
音じゃない音の溢れるは溢れるじゃないし
重しのようは重しのようじゃないし
音を立てる手立てが見付からずは
見付からずじゃなくて
（とは言え見付かる訳じゃなく
ただ見付からずじゃないだけで）で
歌じゃないそれも却って重しに吹き払われ
酷く静かで居るしかなく
けれどそうして居るだけで
静かとも酷く違う中に居るに違いなくては
音でない音も歌でない歌も　きっと
その中に溢れるじゃなく溢れてて
それらを聞こえずに聞けてるようなら
何も見通せずに何でも見通せてるようで
目を瞑れば眠れずに酷く安らかに眠れよう
二〇二二年十一月六日

左腕と右脚がすっかり無い　それとも
右腕と左脚がすっかり無い　その
どちらなのかさっぱり分からないのは
頭の向きが定まってないかららしくて
腕と脚よりも頭の向きの分からなさで
どっちへ歩けば良いのか分からなくて
いや　そんな頭のせいで全く歩けない
に違いない　いや
ひょっとして頭はすっかり無くなって
それで
腕と脚が欠けていると思えるだけかな
片腕と片脚で何処でも好きに歩き回れてたろうが
と決め付けて仕舞えば
跳ね飛ぶように舞うように何処へでも
全く思う通りに歩いて行けるにしても
その周りをぐるぐる廻るようにして

少しずつ近付いて行く向かう先は
掘り返されるのを待ってようか
芳しい香りの際立つ白い墓で
けれど墓は既に暴かれていて　片脚で踏み入って
片腕で白い体を抱き起こすと体は水のように溶け
いや
水に深く映る白い体を抱き上げようとしただけだ
と分かれば白い体は水に触れるより少し高い処で
何処か汚れたような硬い煌めきを
脅すようにも優しげに放ってよう
そのビクともしない煌めきのせいで片腕と片脚は
（もうずっと前の事だろうが）失われたに違いない
などとは思いも寄らない事の筈だが
思いも寄らない程その通りに思え　それで
失われた腕と脚が水に深く映って　それは
水の底へも易易と潜っては行けようけれど　直に
水の白さに溶ければ沈む儘にそれっ切りで
白く硬い煌めきを跳ね返して何も映さない

水面だけが水面だけでは何とも為らずにも
失われたか失われて無いかも知れない
白い体の行方を探しても居ようか
二〇二二年十一月十一日　水面（みなも）

石そっくりに
使い古され壊れた音が転がっている　それとも
石が
壊れた音そっくりに使い古されたか　その
どちらでも同じなら同じ事　違うなら違うにしろ
それは
石なら石で　少しずつ膨らんで伸び上がって行き
音なら音で　壊れたなりに壊れた音は出され続け
そこから
石と音とでしか出来ない事を始めようとしている
と考えて仕舞うのが腹なら（目でも頭でも無く）

それはもう
腹の中に収まって　背を伸ばし続け音を響かせて
この儘では孰れ腹は破れて仕舞うに違いなかろう
などと考えるのは
そんなそれを使い古した男の他には居ないけれど
そんなそれが男の腹に収まったようでも無いなら
まさか時を戻して　それは
それを産んだ腹の中にでも温温と潜り込んだのか
なら男はその腹の側に蹲って耳を欹てるしかない
「君は震えているね
「震えてないよ
「震えてないものなんてこの世に一つも無いよ
「君は震えてないじゃないか　なので何も震えてないよ
「震えてないのは震えてるからさ」
どちらでも同じなら同じ事　違うなら違うにしろ
「いや　同じでも違うでも無くて　そうして
「なら　震えるでも震えないでも無くて　そうして　そうして
「震えだけが震えるんだよ　何も震わせずに

「そうして　石も音も石と音とでも少しも震えられずに
腹を裂けば　石は音を産み音は石を産み続けそうだよね」
二〇二二年十一月十二日

音を鳴らすのは常に屍で　その
音を
屍を夜の中に打ち棄てて
死に損なって朝を迎えたのなら
必ず聴き取らなければならない　その
音は
男の体を弄って　男が
死ねる為に必ず無くてはならない徴を
見付けよう　それが
男の耳を通して伝わって
傷痕のような痣のような　それとも
夜に打ち棄てられた屍の腹に開いた

深い傷そっくりかも知れないような
その黴を見付ければ
その黴から
音を鳴らす屍を取り出して
音を鳴らすなら　その
夜を明かした朝に
陽が昇る事は無い　その
黴に優る物は無いからは
二〇二二年十一月十四日　弄（まさぐ）って

片　２０２２

著者　u_

© 2022 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published